

# 鹿兒島県史料



齊彬公史料

第二卷

題  
字

鎌 鹿  
田 児  
要 島  
人 県  
知  
事

## 例言

一 本書は、東京大学史料編纂所蔵本「斉彬公史料」（二〇一冊）を底本とし、これに底本収録以外の斉彬文書を補遺として、これを「鹿児島県史料 斉彬公史料」全三巻として刊行するものである。時代の範囲は、文化八年から明治二十九年までである。第二巻は、安政元年から安政四年に至る内容を収めて刊行した。

一 編集の体裁は、原則として原編者の体裁によった。

一 原編者市来四郎の掲げた見出しはそのまま掲げた。

一 原本もしくは写本・刊本など照合本が存在するときは、努めてそれと対比して校訂し、文末に「○○にて校訂」などと注記した。底本と照合本が著しく異なる場合には、その箇所「○○文書」・「○○」などと傍注にて併記し、照合史料名を示した。その際、特に照合頻度の高い左記の史料集については、次のような略記号を用いた。

照 照国公文書（島津家臨時編輯所編）

順 順聖公年譜・同年譜稿（東京大学史料編纂所蔵本）

大 大日本古文書幕末外国関係文書

昨 昨夢紀事（日本史籍協会編）

島 島津家書翰集（日本史籍協会編）

一 刊行巻ごとに、見出しに一連番号を付した。一つの見出しで数種の文書や内容を含むときは、文首に小番号を付した。

一 漢字は、固有名詞については原則として正字を用いることにし、それ以外は常用漢字新字体を使用した。特殊文

字のノ(しめ)はそのまま用いた。

一 仮名は、底本または原本の体裁のとおりとした。変体仮名は普通の仮名に改めたが、江だけはそのまま用いた。

一 平出・擡頭・闕字および但書は、原則として底本の体裁によった。

一 原编者による傍注および注記( )などは、原則として底本の体裁によった。新に編纂者が注を付する場合は、〔 〕を附して原编者注と区別した。

一 人名および地名については適宜傍注を付した。

一 本文には適宜読点「、」を付し、人名・地名・品名・数量等の連続するときには、並列点「・」を付した。

一 朱書は、その部分を「」で示し、〔朱〕と傍注を付した。

一 頭注および付箋は、「」で行間に示し、〔頭注〕〔付箋〕と注記した。ただし、後筆のものは削除した。

一 欠所部および解説困難な箇所の場合、原编者注本マ、と虫喰のある箇所は、□又は□を以て示し、本マ、・虫喰または〔○○カ〕・〔不明〕と傍注を付した。

一 文意の通じない字または箇所には、〔ママ〕または〔衍カ〕・〔○○カ〕と傍注を付した。

一 重複して掲げられている文書については、編纂者が注を付し、削除した。

一 出典を明記していない他史料集からの転載文書のうち、史料名の判明するものについては、見出しに〔○○抄〕と注を付して示した。

一 欄外に掲げた年代は、それぞれの巻の表紙に記載してある年代である。この年代に該当しない収載文書については、見出しに〔○○○年〕などは、見出しに〔○○○年〕などと注を付した。

一 見返しに、水府明德会彰考館所蔵「安政四年六月二十九日池田慶徳宛島津斉彬書翰」(代筆)と鹿児島市磯尚古集成館所蔵「安政三年正月二十九日名越盛光宛島津斉彬書翰」を掲げた。

# 齊彬公史料 第二卷 目次

例言

安政元年(甲寅)

一	総覧	三
二	齊彬公文武ヲ奨励シ玉フ (安政四年) 正月十七日	一八
三	新鑄一朱銀通用布告 安政元年正月	一九
四	甲寅春御参府並布達 同正月	一九
五	参考 黒田家々記抄	一九
六	川路左衛門尉等魯西亜使節ト応接始末 同十二月三日	二〇
七	魯西亜使節へ賜品ノ手続	二一
八	参考 安田助左衛門警衛在府日記抄(軍賦役警衛方) 同正月〜二月	二二
九	阿部伊勢守外国船渡来ノ節家士注意スヘキ訓令 同十月	二四
一〇	夢々物語(協坂家蔵書) 同三月三日	二四
一一	桑名侯通商貿易ニ付上書(協坂家蔵書)	二五
一二	魯西亜船修理ニ付職工差出方ニ付水戸殿伺書 同十一月二十九日	二七

- 一三 下田港魯人遭難スクーネル船新製始末 安政元年七月十五日……………二八
- 一四 外国人日本通商之企アメリカ人日本志望ノ事ヲ載タル公頭之造牒記……………二九
- 一五 英吉利船渡来及魯土戦争ニ付長崎風説……………三四
- 一六 英吉利船四艘渡来長崎奉行達書 同閏七月十五日……………三五
- 一七 米艦下田港ニ死人ヲ乗セ来泊ノ報 同閏七月二十六日……………三五
- 一八 和蘭軍艦將官ノ差出シタル風説書 同七月晦日……………三五
- 一九 同〔和蘭軍艦將官ノ差出シタル風説書〕 同閏七月朔日……………三六
- 二〇 同〔和蘭軍艦將官ノ差出シタル風説書〕 同閏七月朔日……………三七
- 二一 正月三日齊彬公水戸侯ニ御贈翰 安政元年正月三日……………四〇
- 二二 正月二十四日齊彬公水戸侯ニ御贈翰 (嘉永六年)正月二十四日……………四一
- 二三 三月十九日齊彬公水戸侯ニ御贈翰 安政元年三月十九日……………四一
- 二四 四月十二日齊彬公水戸侯ニ御贈翰 同四月十二日……………四三
- 二五 四月二十七日齊彬公水戸侯ニ御贈翰 同四月二十七日……………四五
- 二六 五月八日水戸侯齊彬公ニ御答翰 同五月八日……………四七
- 二七 六月二十三日齊彬公水戸侯ニ御贈翰 同五月十二日……………四八
- 二八 六月十三日水戸侯齊彬公ニ御答翰 同六月二十三日……………四九
- 二九 四月十三日齊彬公尾張侯ニ御贈翰 同四月十三日……………五〇
- 三〇 七月二十三日齊彬公阿部侯ニ御贈翰 同七月二十三日……………五一

三二	門閥家ノ奨励訓示書 安政元年正月	五二
三三	洋式砲術軍備之根本ニ定メラル旨御親書 同正月十四日	五二
三三	海陸軍拡張ニ付節儉並風俗矯正ノ御親書 同正月十五日	六〇
三四	砲術操練勉勵御褒詞布達 同六月	六六
三五	島津齊彬手製茶碗ボムベン(白砲)并題函和歌	六六
三六	高島秋帆(四郎太夫)カ爆彈擬似ノ茶釜ノ図ニ題歌	六七
三七	考証 市來廣貫建言 (嘉永六年) 十二月二十二日	六七
三八	田原・磯永・市來ノ三名ニ砲術指南役ヲ命シ玉フ 安政元年正月	七一
三九	洋式騎兵創設	七二
四〇	兩番頭へ学問ノ要旨其他訓令 同正月二十日	七二
四一	出水・高尾野二郷ニ水田開墾ヲ命シ玉フ	七三
四二	齊彬公御東上ノ途ニ米艦入相ノ報ニ接ス 同正月	七三
四三	改元詔 同十一月二十七日	七四
四四	梵鐘大小砲銃鑄換詔 同十二月二十三日	七四
四五	齊彬公島津豊後へ賜書第一 (嘉永五年) 三月頃	七五
四六	全上第二 (嘉永六年) 五月四日	七五
四七	参考 福岡侯川路左衛門尉へ与ル書 安政元年七月八日	七五
四八	参考 宇宿彦右衛門書牘(江戸ノ形勢)	七八

- 四九 魯・英・米ノ三国江条約締結ノ論達 (安政二年) 八月十三日 ..... 八〇
- 五〇 亞米利加国軍艦日本沿海測量願出ニ付論達 (安政二年) 八月十三日〜十五日 ..... 八〇
- 五一 營中ノ形況 (脇坂家蔵) 安政元年三月〜十月 ..... 九〇
- 五二 魯国軍艦下田ニ於テ遭難 ..... 九七
- 五三 滞在亞米利加人之挙動風説書 (脇坂家書類) ..... 九七
- 五四 参考 在江戸竹下覺之丞地震ノ私報 (安政二年) 十一月四日・安政元年十一月 ..... 九八
- 五五 外国船渡来ニ就テ布令十条 安政元年正月 ..... 一〇九
- 五六 魯国軍艦長崎ニ来ル当時幕令 同正月二十日 ..... 一一三
- 五七 尅朱銀新鑄各金銀貨交換令 同正月二十一日 ..... 一一四
- 五八 異国船渡来諸家人数招集等ノ布令 同正月〜二月 ..... 一一四
- 五九 米国使節応接祝砲放発布告 同二月 ..... 一一六
- 六〇 新御靈屋銅燈籠献納ニ不及布達 同三月 ..... 一一六
- 六一 異国船碇泊中訓練停止布達 同三月二十二日  
同四月九日 ..... 一一七
- 六二 御所炎上布告 同四月 ..... 一一八
- 六三 米国軍艦退去ノ布告 同六月十日 ..... 一一九
- 六四 各藩其他供人数減省令 同六月 ..... 一一九
- 六五 英国軍艦来崎布告 同八月六日 ..... 一二〇
- 六六 閣老海防事務取扱事件布告 同八月十一日 ..... 一二〇



六七	御拳場近辺鉄砲稽古事件布告	安政元年九月二十二日	一一〇
六八	將軍家定公襲職更ニ武家法度ヲ発ス	同九月二十五日	一一一
六九	大船製造荷船造建云々布告	同九月二十五日	一一二
七〇	亜墨利加合衆国船下田・函館ニ港繫泊許可布告	同十月十日	一一三
七一	禁裏炎上後御警衛	同七月九日	一一三
七二	北蝦夷ノ光景通報	.....	一一三
七三	魯国船長崎へ来ル島原藩主届書	同三月二十四日	一一四
七四	無名氏建言水戸・福山ニ侯異論云々	.....	一一四
七五	長崎入津清人書牒	(嘉永六年) 四月	一一六
七六	京都七口警衛達書	安政元年十一月十八日	一一六
七七	昇平学校ニ在ル長州書生本藩製船ノ事ヲ聞キ友人ニ送ル書	.....	一一七
七八	参考 江田平藏日記抄	.....	一一七
七九	米艦総督往復書	同正月	一一九
八〇	魯国軍艦渡来ノ報	同正月二十六日	一一三
八一	米船貨幣ニ交換ヲ請フ	同正月二十六日	一一四
八二	英人冒耳頓渡来在留ノ報	同正月二十六日	一一四
八三	琉吏英人冒耳頓カ在留謝絶ノ書	同正月十八日	一一六
八四	英人冒耳頓在留ノ挙動具申	同正月二十六日	一一八

- 八五 在琉英人ノ情況 同正月二十六日……………一五一
- 八六 在琉英人伯德令退去ノ報 同正月十三日……………一五二
- 八七 魯国軍艦渡来之報 同正月六日……………一五七
- 八八 諸土風俗矯正及ヒ學問ノ方針ヲ訓諭シ玉フ 同正月二十日……………一六〇
- 八九 衣服制度ヲ嚴令シ玉フ (安政二年) 正月二十三日……………一六一
- 九〇 澁谷村ニ別邸ヲ創設シ玉フ……………一六一
- 九一 主上御護身ノ刀劍奉獻ノ事實……………一六二
- 九二 古笙奉獻ノ事實及水戸烈公新鈴虫ノ銘文及ヒ其由緒……………一六二
- 九三 三條實萬公將軍宣下關東下向手記抄 (嘉永六年) 十一月……………一六四
- 九四 大船製造上申云々幕令 安政元年九月二十五日……………一六七
- 九五 近衛殿ヨリ尾張中納言殿へ書牘 同九月二十日……………一六八
- 九六 阿部正弘松平慶永公へ贈ラレン書翰 同七月二十三日……………一六九
- 九七 尾張中納言殿へ御所御手薄ノコトヲ告玉フ御書翰 同四月十一日……………一六九
- 九八 大内炎上並ニ越前侯婦国差留薩侯書翰 同四月十三日……………一七一
- 九九 遠藤世子回答 江州野州郡三上  
遠藤美濃守胤城……………一七一
- 一〇〇 高須老侯御内示……………一七一
- 一〇一 高須老侯へ御返翰……………一七一
- 一〇二 内裏炎上造營云々ノ書……………一七二

一〇三 〔内裏御間席〕寛政二庚戌年三月之御治定……………一七四

一〇四 米国人角力見物ノ形況追手風力士名ヨリ之書面……………一八七

一〇五 三十八社再祈之御教書……………一九〇

一〇六 北亜墨利加共和政和国略記……………一九〇

一〇七 当時ノ俚語其他時勢諷詞……………一九一

安政二年（乙卯）

一〇八 総覧……………二二一

一〇九 主上近衛殿へ物ヲ賜フ 安政二年正月……………二二五

一一〇 神宮其他諸社御祈禱 同正月九日……………二二五

一一一 禁裏御所内ニ植木栽培達書 同四月……………二二六

一二二 鹿兒島諏訪神宮司本田親徳叙任願……………二二六

一二三 齊興公御叙任伺 同十二月二十七日……………二二九

一二四 和蘭人長崎・函館兩所交易許可奏聞（留守居報）（安政四年）十一月……………二三〇

一二五 亜墨利翰官吏江戸登営国書提出事件奏聞（安政四年）八月……………二三〇

一二六 亜墨利加国ヨリ差上候書翰和解 安政二年八月二日……………二三一

一二七 大坂安治川へ砲台及ヒ造船所取建ノ上奏（安政四年）五月十三日……………二三二

一二八 所司代組与力・同心鉄砲丁打届書（安政四年カ）五月二十二日……………二三三

目次

一一九	参考 齊彬公事蹟抄 (安政四々五年)	二二三
一二〇	孝明天皇勅詠ヲ島津齊興公父子ニ賜ハリシ事実附十七節〔史談会速記録抄〕	二二三
一二一	参考 非藏人日記抄	二四五
一二二	當時朝官人名〔非藏人日記抄〕 安政二年	二四五
一二三	非藏人日記抄 同正月々二月	二四六
一二四	京都地震〔非藏人日記抄〕 同三月	二四九
一二五	御所御造營地並之始〔非藏人日記抄〕 同三月	二四九
一二六	新内裏木造初〔非藏人日記抄〕 同三月	二四九
一二七	鳥羽法皇七百回忌〔非藏人日記抄〕 同四月	二五〇
一二八	新内裏礎立柱〔非藏人日記抄〕 同四月々八月	二五一
一二九	内裏上棟期日陣儀〔非藏人日記抄〕 同八月	二五五
一三〇	新内裏上棟式〔非藏人日記抄〕 同八月々九月	二五五
一三一	月帯蝕〔非藏人日記抄〕 同九月	二五七
一三二	新内裏遷幸治定〔非藏人日記抄〕 同九月	二五七
一三三	京都地震〔非藏人日記抄〕 同九月二十八日	二五七
一三四	新内裏遷幸式寛政二年(光格天皇御宇)ノ式ニ則ラル〔非藏人日記抄〕 同十月	二五八
一三五	新御所御引渡式〔非藏人日記抄〕 同十月二十八日	二五九
一三六	新御所引渡〔非藏人日記抄〕 同十一月	二六〇

一三七	鳳輦新調引試〔非藏人日記抄〕	同十一月	二六〇
一三八	新内裏遷幸期日時御治定〔非藏人日記抄〕	同十一月二十一日	二六二
一三九	新内裏遷幸〔非藏人日記抄〕	同十一月二十三日	二六二
一四〇	新内裏遷幸拜賀〔非藏人日記抄〕	同十一月	二六五
一四一	新内裏遷幸幕使拜賀〔非藏人日記抄〕	同十一月、十二月	二六六
一四二	新内裏御造管所司代脇坂安宅賞賜〔非藏人日記抄〕	同十二月	二六九
一四三	内裏炎上ニ付京都市中ノ献金者人名〔非藏人日記抄〕	同八月	二七〇
一四四	参考 阿部正桓家記一		三〇七
一四五	参考 井地要略		三一九
一四六	遷幸御列書	同十一月二十三日	三二八
一四七	京都留守居報告		三四六
一四八	御所御造営費諸大名御手伝献納金額	同十二月二十九日	三四七
一四九	安政二乙卯年十二月京都町触		三四八
一五〇	山川港外ニ米国軍艦渡来ニ就テ窺書	同二月二十六日	三五〇
一五一	衣服ノ制限再達	同二月	三五一
一五二	幕府軍艦献呈ヲ促サレタル書	同六月二十六日	三五二
一五三	水軍創設御予定 (安政四年) 六月十六日		三五二
一五四	国旗旭章雛形ヲ製シ阿部正弘ニ示シ玉フ	安政二年	三五三

一五五	異国船渡来ノ節制令並山川へ米国船渡来ノ事実	安政二年五月十二日	三五四
一五六	江戸大地震ノ事実並布達	同十月	三五五
一五七	外夷処分ノ御意見阿部正弘へ内申ノ御書	(安政五年)五月二十八日	三五七
一五八	亜米利加官吏登營後御建言	(安政四年)十二月二十五日	三五九
一五九	質素節儉並風俗矯正ノ訓令	安政二年十二月	三六〇
一六〇	勢州海岸巡視輕弁令	同正月二十一日	三六一
一六一	万石以上ノ面々火之番等省費布達	同二月二十九日	三六二
一六二	領知判物頂戴心得達書	同三月朔日	三六二
一六三	大森及ヒ徳丸原大砲稽古願云云布告	同五月二十七日	三六三
一六四	諸家屋舖ニ於テ貫目以内ノ砲発放不苦云云布告	同六月四日	三六三
一六五	將軍家御法事白銀献上其他布告		三六四
一六六	水戸前中納言殿御軍制改正ニ就テ登城達書	同八月十四日	三六四
一六七	諸国田畑増石達書	同八月二十六日	三六四
一六八	神田明神祭練物御曲輪内へ引込ニ不及旨布達	同八月	三六五
一六九	大地震ニ就テ諸大名登營達書	同十月三日	三六五
一七〇	火之元取締達書	同十月(三日カ)	三六六
一七一	大地震及大火ニ就テ月次御礼等登城ニ不及達書	同十月四日	三六六
一七二	万石以上ノ面々地震火災ニ就テ帰国勝手次第達書	同十月四日	三六六

一七三	兩關老官宅引払下屋舖住宅布告 安政二年十月四日	三六六
一七四	地震大火ニ就テ拜借金年賦上納年延達書 同十月十日	三六七
一七五	文字磨滅吉歩銀曳替歩合云云達書 同十月	三六七
一七六	地震大火ニ就テ規式ニ関スル諸事省略布告 同十月十九日	三六七
一七七	火事裝束制度 同十月十九日	三六八
一七八	御門番ノ諸家簡易云云布告 同十月十九日	三六九
一七九	地震大火ニ就テ諸事省略供列レ減少布告 同十月十九日	三六九
一八〇	遠国奉行旅裝伊達道具等減少布令 同十月十九日	三七〇
一八一	外夷渡来或ハ地震大火ニ就諸家人員減少隱居厄介者在所勝手願出達書 同十一月晦日	三七〇
一八二	参照 昨夢紀事抄	三七一
一八三	水戸前中納言殿ニ隔日登城ヲ命セラル〔昨夢紀事抄〕同八月〜九月	三七二
一八四	江戸大地震〔昨夢紀事抄〕 同十月二日	三七七
一八五	堀田正睦再ヒ老中ニ任ス〔昨夢紀事抄〕 同十月九日	三七七
一八六	松平慶永書翰並ニ建白書〔昨夢紀事抄〕 同十月十六日	三七七
一八七	梵鐘鑄換停止歎願	三八四
一八八	齊昭公親筆	四〇〇
一八九	江戸御參觀道中銃砲ヲ備ヘラル (安政元年カ)二月	四〇六
一九〇	近衛公尾州侯ニ御問ヒ合セ書 安政二年二月七日	四〇七

一九一	福井侯へ皇居御造営及ヒ魯艦云々御親書	安政二年正月	四〇八
一九二	尾州侯近衛公へ御造営及梵鐘ノ事返翰	同四月	四〇九
一九三	蘭学講会所設立	同三月	四一〇
一九四	魯・英・墨三国条約書廻達	同八月十五日	四一〇
一九五	幕府政務改革及ヒ質素節儉令	同八月七日	四一一
一九六	鹿兒島灣へ米国船渡来ノ事実	(萬延元年)六月二日	四一二
一九七	西洋通詞職創設	安政二年九月二十四日	四一三
一九八	増上寺火之番免セラル	(安政三年)九月	四一三
一九九	江川太郎左衛門御鉄砲方拜命報告	(安政元年)四月十八日	四一四
二〇〇	篤姫君近衛忠熙公養女云布告	安政二年四月二十六日	四一四
二〇一	海防令	(安政元年)四月九日	四一五
二〇二	上杉家旧臣宮島誠一郎秘藏齊彬公御詠歌及書類		四一六
二〇三	齊彬公事蹟考鈔	(安政元年)	四一七
二〇四	新納久仰上申書外夷処分云々	(嘉永五年)六月二日	四一八
二〇五	齊彬公近衛忠熙公ヲ以テ御猷刀拵概略		四一九
二〇六	水戸齊昭公琉球ニ於テ外国処分批評		四一九
二〇七	軍艦昇平丸献上ニ付御刀拝領及軍艦略図	安政二年十一月二十五日	四二〇
二〇八	簡易質直云云布達	同十月	四二〇



二〇九	参考 造船製式付言 <small>田原明章自記抄</small> .....	四二〇
二一〇	参考 伊地知季安自記抄.....	四二二
二一一	参考 諏訪伊勢履歷抄 <small>一時島津ト唱フ</small> .....	四二二
二一二	参考 昨夢紀事抄.....	四二三
二二三	齊彬公福井侯ニ密書ヲ示ス〔昨夢紀事抄〕 安政二年十月二十六日〜十一月九日.....	四二九
二二四	江戸市街出火 同二月.....	四三五
二二五	江戸市街再ヒ出火 同三月.....	四三五
二二六	大坂市中出火 同四月.....	四三六
二二七	京都市街出火 同四月.....	四三六
二二八	大坂市中再ヒ出火 同五月.....	四三六
二二九	伝奏衆へ所司代脇坂淡路守ヨリ達書 同四月二十一日.....	四三六
二三〇	内海御台場御普請並大筒鑄立車台其外製造之御用相勤候ニ付拝領物 同五月.....	四三八
二三一	大筒鑄立車台其外製造之御用相勤ニ付拝領物 同五月.....	四四〇
二三二	海岸手当向伊勢守達書廻達 同八月十五日.....	四四一
二三三	米国人日本海測量請願 同八月十三日.....	四四二
二三四	十月二日夜亥之刻江戸大地震.....	四四二
二三五	江戸大地震ノ事実.....	四四六
二二六	質素節儉令 同十月.....	四四七

二二七	水戸公齊彬公ニ送ラレン書	安政二年九月二十三日	四五〇
二二八	齊彬公島津豊後へ賜書	(安政五年) 正月六日	四五一
二二九	齊彬公春嶽公へ御親書	(嘉永六年) 正月二十六日	四五一
二三〇	大森村ニ於テ新鑄八十斤砲ヲ試ム	(参考 安田助左衛門日記抄)	四五一
二三一	参考 小松相馬家記抄		四五二
二三二	齊彬公御病氣御全快布告	安政二年三月十七日	四五二
二三三	齊彬公春嶽公へ御親書	(安政元年) 四月十一日	四五二
二三四	魯艦入浦ノ報	(安政五年カ) 六月二十六日	四五三
二三五	齊彬公春嶽公へ御親書	(嘉永六年) 六月二十九日	四五三
二三六	米艦内海小柴沖へ乗入リタル報	(安政五年) 七月	四五三
二三七	内裏造管地引木作初	(参考 非蔵人日記抄) 安政二年三月〜四月	四五四
二三八	参考 水戸前中納言殿銃術問答	同六月十九日	四五五
二三九	齊彬公福井侯ニ御親書	(安政元年) 六月三日	四六一
二四〇	下田・箱館兩奉行へ達書	安政二年二月	四六三
二四一	米艦測量ノ形況	同三月二十八日	四六四
二四二	魯艦乗組員書翰	同四月六日	四六六
二四三	福井侯齊彬公ト當中ニ面晤	(参考 昨夢紀事抄) 同七月朔日	四六六
二四四	和蘭蒸氣船運用規則	(安政元年) 七月十二日	四六七

二四五	和蘭国王汽船ヲ献ス及ヒ答礼品目ノ調	四七一
二四六	松平和泉守並ニ松平伊賀守老中ヲ罷ム	四七二
二四七	米国人ニ沿海測量ヲ許ス	四七二
二四八	藩曆ノ来由	四七三
二四九	伊集院苗代川村朝鮮人ノ来由概略	四七四
二五〇	近衛信輔公御謫居事蹟概略	四七四
二五一	門葉家名人員	四七五
二五二	江戸年中御用金定額 享保・元文頃ノ定額	四七七
二五三	江戸芝邸在勤人数	四七八
二五四	太守様御登城御行列	四七八
二五五	義久公九州御領知概略	四七九
二五六	徳川家御軍役賦	四七九
二五七	薩隅日三州及諸島人別改	四八〇
二五八	札改年間	四八〇
二五九	薩隅日諸芸	四八一
二六〇	砲術書講究事件建言	四八二
二六一	蒸気船雛形製造事件建言	四八三
二六二	海岸砲台改築建言	四八五

二六三	蒸氣船雛形製造事件建言	安政二年五月十八日	四八六
二六四	軍艦製造不完全云々建言	同五月二十九日	四八八
二六五	汽船運用伝習艦將意見〔海軍歴史抄〕	同六月十三日	四九〇
二六六	和蘭国王汽船献上事実〔海軍歴史抄〕	同七月	四九三
二六七	長崎製鉄所創初〔海軍歴史抄〕	同七月、十一月	四九四
二六八	汽船献上ノ手續甲比丹上申書〔海軍歴史抄〕	同八月	四九六
二六九	幕府海軍創設及規程〔海軍歴史抄〕	同十月二十四日	四九九
二七〇	海軍伝習令	同八月二十四日	五〇五
二七一	蒸氣船伝習之儀上申書	同八月	五〇五
二七二	軍艦昇平丸長崎ニ航ス〔海軍歴史抄〕	同八月	五〇七
二七三	汽船伝習生給金等和蘭甲比丹上申書〔海軍歴史抄〕	同八月	五一〇
二七四	軍艦昇平丸長崎港ニ入ル〔海軍歴史抄〕	同十月二十日	五一一
二七五	海軍伝習所ヲ長崎ニ設ク〔海軍歴史抄〕		五一一
二七六	諸藩伝習生人名〔海軍歴史抄〕		五一四
二七七	米国人ニ沿海測量ヲ許ス		五一八
二七八	大地震ニ就テ救恤	同六月二十四日・八月十三日	五一九
二七九	江戸大地震	同十月二日	五二一
二八〇	齊彬公御事蹟抄 <small>郷友会誌 氏所記</small>		五二一

目次

二八一	書類料紙ノ布達 安政二年十月十五日	五二二
二八二	軍備ノ為メ非常節儉ヲ令シ玉フ 同十二月	五二三
二八三	大地震江戸中ノ惨状及ヒ謡歌 同十月	五二三
二八四	卯十月二日夜四ツ時大地震火災厄払ヒ	五二九
二八五	市川難十郎外郎売ノセリフ	五三〇
二八六	梵鐘鑄換官符ニ対スル議案ノ二 同六月二十六日	五三一
二八七	諸国寺院之梵鐘大砲小銃ニ可鑄換旨内慮伺 同六月	五三四
二八八	梵鐘為差出方之手続評議案 同三月ノ九月	五三六
二八九	梵鐘鑄換触書案 同四月	五四三
二九〇	梵鐘鑄換諸宗触頭共ヘ諭書案	五四四
二九一	梵鐘鑄換勘定奉行ヘ達書案 同九月	五四五
二九二	梵鐘鑄換大小監察ヘ達案 同九月	五四七
二九三	梵鐘鑄換事件水戸殿御城附ヘ達書案 同十月	五四九
二九四	諸宗触頭共ヨリ諭書案	五四九
二九五	梵鐘鑄換官府ニ対スル議案ノ一 同正月	五五一
二九六	梵鐘鑄換砲銃触案 同正月	五五三
二九七	林大學頭申出書付 同正月	五五五
二九八	御三家方始万石以上以下之向々ヘ可相達趣	五五六

二九八	梵鐘鑄換三家方始万石以上以下向々へ可相達議案	安政二年正月	五五六
三〇〇	梵鐘鑄換触案	.....	五五七
三〇一	大砲製造及ヒ梵鐘鑄換制度議案	同正月	五五七
三〇二	關老阿部正弘水戸公ニ贈ル書牘	(安政元年)十月二十三日	五六二
三〇三	諸寺院梵鐘引上ケ之議水戸公阿正弘へ与ル書翰	(安政元年)十月二十四日	五六三
三〇四	梵鐘鑄替之儀安政二卯正月水戸老公ヨリ阿闍へ御親翰	安政二年正月二十一日	五六四
三〇五	大政官符五畿七道国司	(安政元年)十二月二十三日	五六五
三〇六	梵鐘御触并京都へ御請振之義	安政二年正月〜二月	五六六
三〇七	梵鐘鑄替之儀	同一月カ	五六八
三〇八	蝦夷地之儀・梵鐘之儀	同三月十五日	五六九
三〇九	梵鐘鑄替大砲之儀	同四月十四日	五六九
三一〇	梵鐘之儀	同八月六日	五七〇
三一〇	梵鐘之儀ニ付御手扣御直書	.....	五七一
三一一	梵鐘之儀	.....	五七一
三一二	奸僧誣説之儀	同十月	五七二
三一二	西本願寺掛所輪番ノ僧ヨリ京地同列共へ遣候書面ノ由ニテ京地ニ流布致シ候書付写	同四月七日	五七二
三一五	鶉銅吉左衛門書翰	同十月七日	五七五

三二六	開港可否列藩へ諮詢宣命 (安政五年) 三月二十日	五七七
三二七	中山正親町其他建言 (安政五年) 三月七日	五七八
三二八	水戸前黄門公ニ登宮ヲ命ス 安政二年八月十四日	五七九
三二九	米国人内地沿海測量請願ニ就テ齊彬公申稟 同八月十三日	五七九
三三〇	齊彬公福井侯ニ与ル書 (参考 昨夢紀事抄) 同十月二十六日	五七九
三三一	蒸気船運用伝習意見案 (海軍歴史抄) 同十一月	五八〇
三三二	福井侯齊彬公へ御内書 (昨夢紀事抄) 同十一月十二日	五八二
三三三	齊彬公福井侯ニ与ル内書 (昨夢紀事抄) 同十一月二十八日	五八二
三三四	阿部侯齊彬公へ贈ラレシ内書 (昨夢紀事抄) 同十一月二十四日	五八四
三三五	福井侯齊彬公へ内書 (昨夢紀事抄) 同十二月五日	五八五
三三六	福井侯水戸老公ニ贈ラレシ内書 (昨夢紀事抄) 同十二月十一日	五八六
三三七	福井侯齊彬公ノ心事ヲ論ス (昨夢紀事抄) 同十二月	五八七
三三八	齊彬公慶永公へ御書翰 (昨夢紀事抄) 同十二月	五九五
三三九	米使上申書ニ対シタル達書 同三月二十八日	五九七
三三〇	和蘭王汽船献呈ニ就テ船中規則艦將上申 (海軍歴史抄) 同八月十七日	五九七
三三一	魯国船修復事件上申書 (海軍歴史抄) (安政元年) 十二月二日	六〇四
三三二	魯国船下田ニ於テ遭難上申 (海軍歴史抄) (安政元年) 十二月四日	六〇五
三三三	魯艦颶風ニ遭難シタル事実 (海軍歴史抄) (安政元年) 十一月	六〇五

三三四	魯艦遭難事実上奏〔海軍歴史抄〕（安政元年）十二月二十三日……………	六〇七
三三五	魯国使節約条上申〔海軍歴史抄〕（安政元年）十二月二十二日……………	六〇七
三三六	小野友五郎外国処分意見〔海軍歴史抄〕（安政元年）十二月……………	六〇八
三三七	六孫王九百年祭 安政二年九月……………	六一〇
三三八	齊彬公水戸公ニ贈ル書 同九月二十八日……………	六一〇
三三九	周防国妙満寺月姓意見書……………	六一一
三四〇	阿部伊勢守卒去布告（安政四年）六月二十八日……………	六一八
三四一	諸国寺院ノ梵鐘大小砲鑄換詔勅ニ対シ幕令 安政二年九月二十七日……………	六二〇
三四二	寺院ノ梵鐘鑄換ノ詔勅ニ対シ引揚ノ手順各藩へ布令 同十月二日……………	六二一
三四三	諸宗触頭共へ諭書……………	六二二
三四四	寺院梵鐘曳揚ノ内査 同正月……………	六二六
三四五	梵鐘鑄換寺社奉行へ達書 同正月……………	六二六
三四六	東叡山へ達書 同正月……………	六二七
三四七	林大學頭へ達書 同正月……………	六二八
三四八	御三家方始万石以上以下之向々へ可相達下案 同正月……………	六二八
三四九	卯三月廿八日阿部伊勢守ヨリ差上候書面……………	六二九
三五〇	擬諭天下緇徒 同四月十七日……………	六三三
三五一	知恩院梵鐘鑄換停止歎願 同正月……………	六三三



三五二	梵鐘鑄換ノ事ヲ近衛忠熙公ヨリ尾州侯へ御書翰	安政二年二月七日	六三五
三五三	齊彬公尾州侯ニ送ル書牘	同二月二十七日	六三五
三五四	梵鐘毀壞ノ説	.....	六三五
三五五	梵鐘鑄換事件近衛忠熙公尾州侯へ書翰	同三月十八日	六三六
三五六	延曆寺大衆梵鐘鑄換停止歎願	同四月	六三七
三五七	日光門主梵鐘鑄換停止歎願	同四月下旬	六三八
三五八	齊彬公春嶽公へ内報	(安政元年)四月十一日	六三九
三五九	齊彬公春嶽公へ回答	安政二年正月	六三九
三六〇	尾州侯近衛公へ返翰	同四月	六三九
三六一	昨夢記事抄	同十月	六四一
三六二	齊彬公福井侯ニ与ル書翰	同十月十五日	六四七
三六三	福井侯答書	同十月	六四七
三六四	英・魯・米等条約交換ノ達	同八月十三日	六五四
三六五	諸大名節儉令	同十一月晦日	六五四
三六六	齊彬公多喜樂眞院へ与フ御書	(嘉永六年)八月二十九日	六五五
三六七	全上	(嘉永六年)十月二十九日 十一月朔日	六五五
三六八	大地震藩邸破壊ノ形況	.....	六五五
三六九	或人ノ手帖	同十月四日	六五七

三七〇	全上 安政二年十月初旬	六五八
三七二	寺島宗則自記履歷抄	六六二
三七二	齊彬公春嶽公へ親書 <small>天璋院殿事夷</small> (安政三年) 七月七日	六六四
三七三	齊彬公越前公へ親書 (安政三年九) 八月二日	六六五
三七四	齊彬公水戸前中納言殿へ御親書 安政二年九月二十一日	六六五
三七五	齊彬公洋学生徒ヲ奨励シ玉フ (安政三年) 三月十日・五月六日	六六六
三七六	齊彬公春嶽公へ御親書 (嘉永二年) 十月九日	六六七
三七七	齊彬公春嶽公へ御親書 (安政三年) 十月二十六日	六六八
三七八	齊彬公島津豊後ニ与ル書 安政二年十一月二日	六六九
三七九	水戸齊昭公大砲船ノ題詠	六七一
三八〇	安政紀事抄開港説	六七一
三八一	江戸大地震死者二十万人 同十月二日	六七一
三八二	堀田正睦再ヒ老中ニ任ス 同十月九日	六七二
三八三	所司代脇坂安宅条約書上奏 同九月二十二日	六七二
三八四	新内裏遷幸及ヒ御祝宴 同十一月二十三日	六七二
三八五	非蔵人日記抄 同十一月二十四日	六七三
三八六	諸大名ノ父兄等在国及ヒ節儉勅諭 同九月二十日	六七三
三八七	非蔵人日記抄 同八月〜九月	六七四

三七八	新内裏遷幸〔非藏人日記抄〕	安政二年十月〜十一月	六七四
三七八	齊彬公水戸侯ニ政務問答	同九月二十一日	六七六
三九〇	水戸公御答翰	同九月二十三日	六七六
三九一	軍艦昇平丸江戸海ニ廻航ス	同三月〜八月	六七七
三九二	汽船運用伝習	同七月二十九日	六七七
三九三	幕府洋式ノ銃陣演習ヲ許ス	同八月晦日	六七八
三九四	日下部伊三治水戸藩ニ帰藩ヲ乞フ		六七八
三九五	参考 訥齊日下部氏并婦人碑文		六七八
三九六	参考 鎌田正純日記抄		六八二
三九七	参考 江田平藏日記抄		六八二
三九八	参考 在留英人退疏後取締	同十二月十五日	六八三
三九九	新御所遷幸御列書 <small>原田才輔書状 添フ、送ス</small>	同十一月二十三日	六八四
四〇〇	京都留守居報告 <small>（所司代へ奉呈書ノ写ナリト云フ）</small>		六八四
四〇一	御所御造営費諸大名御手伝献納金額	同十二月二十九日	六八四
四〇二	蝦夷地開拓布告	同十二月	六八四
四〇三	齊彬江戸邸勤番長屋ノ制限ヲ令ス	同十二月	六八五
四〇四	松平慶永公ノ齊彬公行状記	明治二十年四月	六八九
四〇五	英・佛人清国北京ニ迫リタル事実琉球人届書ニ対シ齊彬公茶話		六九一

四〇六	西郷隆盛カ諫言ニ対シ齊彬公ノ御弁解	六九二
四〇七	橋本左内上京事蹟記抄 (安政五年)	六九五
四〇八	長崎人某述志	六九八
四〇九	徳川齊昭公ニ登營ヲ命ス 安政二年八月十四日	七〇一
四一〇	鹽谷世弘昇平丸記	七〇一
四一一	齊彬公蝦夷開墾ヲ試ミントス	七〇三
四一二	齊彬公農耕ヲ奨励ス	七〇三
四一三	齊彬公兵庫開港御建白書 <small>中山日記</small>	七〇三
四一四	孝明天皇御製 (嘉永六年)	七〇五
四一五	洋式ノ造船ヲ許スノ達書 (安政元年) 正月	七〇五
四一六	参考 橋本左内日記抄 (安政三年) 五月	七〇六
四一七	橋本左内西郷・樺山面晤〔橋本左内日記抄〕 (安政三年) 五月	七〇八
四一八	藩内石高地所検見来由	七一

安政三年(丙辰)

四一九	総覽	七二八
四二〇	文武奨励達書 安政三年二月	七三二
四二一	武備実用云々訓論 (安政二年) 八月十五日	七三三

四三二	三港開市達文 (安政二年) 八月十三日	七三三
四三三	水戸侯政務ニ参与ス (安政二年) 八月十四日	七三三
四三四	水戸侯意見書 (安政五年) 六月九日	七三三
四三五	当時ノ実況 <small>福井藩 記事抄</small> .....	七三四
四三六	藤田彪薩製軍艦ヲ見タル形況ヲ武田正生ニ報告書 (安政二年) 六月九日	七三六
四三七	御参勤御往来毎ニ洋式劍銃ヲ備フ (安政元年) 正月	七三七
四三八	海軍創設ノ令 安政三年正月	七三七
四三九	天璋院殿御結婚始末 (嘉永六年) 四月上旬カ	七三八
四三〇	齊彬公御意見御建言 (安政五年) 五月二十八日	七三八
四三一	新鑄式步判通令 安政三年六月	七三九
四三二	琉球国佛蘭西条約ノ事實具申 同正月	七三九
四三三	佛国条約琉吏具申 同十月七日	七四一
四三四	参考 中山實善日記 同十二月	七四一
四三五	市来廣貫軍事改革建言 (御親書対照) 同三月十九日	七四五
四三六	蒸気船雛形製造事件意見上申 同五月二十九日	七四八
四三七	磯永孫四郎上申 同七月二十九日	七五一
四三八	砲術号令改定意見上申 同三月九日	七五三
四三九	藩吏ノ悪弊建言 同三月二十八日	七五四

四四〇 蒸気船製造届書 安政三年七月二十九日……………七五六

安政四年(丁巳)

四四一 総攬……………七六〇

四四二 水戸前中納言殿国事尽力ノ概略及ヒ猜疑ノ一斑……………七六三

四四三 徳島侯国事尽力ノ概略……………七六四

四四四 橋本左内西郷隆盛へ与ル書翰 (安政五年) 正月二十六日……………七六四

四四五 福井侯及ヒ齊彬公国事掌ノ概要……………七六五

四四六 齊彬公水軍創設ノ概要 安政四年六月……………七六五

四四七 齊彬公造士・演武ノ二館名号更正之内定 同六月……………七六六

四四八 齊彬公瓦斯燈創設ノ事実 同七月〜八月……………七六六

四四九 御下国間モナク磯邸へ被為入造船又ハ軍備ノ諸事指揮シ玉ヒシ事実 同五月〜八月……………七六六

四五〇 谷山郷和田村ノ海浜ヨリ荒田村海浜ニ干寄地着手ノ事実 同冬……………七六七

四五一 福井侯齊彬公へ与ル御書簡及ヒ齊彬公御返翰〔昨夢紀事抄〕 同十月十六日……………七六八

四五二 米国使節幕府ニ贈ル本込新銃模形借用セラレムトノ御書翰〔昨夢紀事抄〕 同十一月二十七日……………七七〇

四五三 当時ノ形勢米国人ノ意思要略……………七七一

四五四 参考 水戸前納言殿堀田備中守ニ与フル書 同十一月十五日……………七七一

四四五 参考 昨夢紀事抄 同十二月九日……………七七五

四五六	西郷隆盛中根鞞負ト密話 (昨夢紀事ニモ記ス)	安政四年十二月十四日	七七六
四五七	齊彬公福井侯ニ与フル密書及ヒ御建言書 (昨夢紀事抄)	同十二月二十六日	七七七
四五八	齊彬公米国使節登營事件建言 (昨夢紀事抄)	同十二月二十五日	七七八
四五九	鎌田正純小野寺庸齋ニ質問書	同六月	七七九
四六〇	永井玄蕃等魯西亜布恬廷ト応接之趣上申書	(安政五年) 六月二十一日	七八〇
四六一	阿部伊勢守死去及ヒ事蹟概略	安政四年六月	七八四
四六二	非藏人日記抄	安政四年	七八四
四六三	當時ノ実況		七八五
四六四	橋本左内西郷吉兵衛ニ与ル書	安政四年十二月十四日	七八六
四六五	彦根藩土宇津木六之丞長野主膳ニ与ル書	(安政五年) 九月二日	七八六
四六六	中山忠能其他六卿上書	(安政五年) 三月七日	七八七
四六七	参考 竹内半右衛門覚書鈔	(安政五年)	七八七
四六八	造船方ノ吏田原明章記事鈔		七九〇
四六九	黒岩堅藏記事抜粹		七九〇
四七〇	山川港ニ外国人接待所建設御目論見之事實		七九〇
四七一	島津折烏帽子ヲ用ラレシ事實	(安政元年) 閏七月	七九一
四七二	風俗矯正御沙汰之趣布達	(安政元年) 九月十九日	七九二
四七三	拝借金被下切ノ布達及ヒ事實	安政四年閏五月二十四日	七九三

四七四	御家宝ノ刀劍朝廷へ御内献之事実及ヒ内勅	安政四年五月	七九四
四七五	丁巳閏五月御下国之事実	同閏五月	七九四
四七六	鹿兒島府下ニ書肆開カレタル事実	同六月	七九五
四七七	和蘭領事官上申書(佐賀侯密贈)	同二月朔日・三日	七九七
四七八	英人廣東攻撃ノ始末	同二月	七九八
四七九	二月五日永持享次郎・御徒目付へカビタン申上候	同二月五日	七九八
四八〇	英人廣東攻撃ノ事実報告	同二月二十四日	八〇二
四八一	集成館紀事鈔(市來廣貫紀事石室秘稿)		八〇三
四八二	國學館並洋學書開設關・八田・後醍院・石川等へ取調御内命	同六月中旬	八〇七
四八三	諸郷士格式復旧ノ尊慮	同七月頃	八〇八
四八四	禁鬪警衛ノ策關勇助へ取調ノ御密命	同夏	八〇八
四八五	海防論策ヲ求メラレシ事実及ヒ諸建言	同二月朔日	八〇九
四八六	参考 聖堂・造士館・演武館・神農殿	(安永二年〜天明六年)	八一〇
四八七	幕府学制訓諭	(寛政三年)	八一八
四八八	昌平国学之記	(元禄六年・寛政七年・寛政八年)	八一九
四八九	黒田清綱建言御弁論	(安政五年) 四月二十四日・安政四年九月十九日	八二一
四九〇	島津豊後へ賜書	(嘉永四年夏頃)	八二三
四九一	長崎事情(長崎聞役届書)	安政四年二月	八二三



四九二	日州去川山柞灰製御取弘	八二四
四九三	和蘭船長崎ヨリ来琉、御附人ヨリ在番奉行ヘノ書状持参及ヒ戊午ノ春井上庄太郎其他守衛人員数十名大島ヘ渡海ノ顛末(市來上申書鈔)	八二四
四九四	三司官座喜味親方退役ノ顛末(市來上申書鈔)	八二六
四九五	国老島津豊後ヘ賜書 同十月二十八日	八二八
四九六	江夏十郎ヘ御親話(石室秘稿鈔) 同夏	八二九
四九七	下ノ關ヲ長州ニ与ヘタルハ幕府ノ拙策(石室秘稿鈔) 同夏頃	八二九
四九八	軍制改革洋式砲術奨励ノ事実	八三〇
四九九	参考 山本藤助家記抄	八三一
五〇〇	御家老座其他諸局ノ悪弊ヲ矯正シ玉フ (安政三年) 三月	八三一
五〇一	外国形ノ風帆船創製ノ事実	八三三
五〇二	齊彬公撮影術 <small>一名御開キ御真影ヲ写サシメ玉ヒシ事実</small>	八三三
五〇三	書生遊学勸奨及ヒ学风匡正ノ訓令 安政四年九月	八三五
五〇四	士商ノ名分ヲ正サレシ事実 同九月	八三六
五〇五	和蘭国ニ箱館長崎ノ通商ヲ允ス 同十一月三日	八三七
五〇六	琉球国王賀慶使出府ノ費用ヲ貸与ス 同四月二十六日・十二月十五日	八三八
五〇七	参考 島津久徵家記抄 (安政三年) 十二月十八日	八三八
五〇八	国老島津豊後ヘ賜書 同十月二十七日 同十月二十九日	八三九

五〇九	函館通寶 安政四年閏五月六日	八四二
五一〇	薩摩朝鮮人種	八四二
五一一	天明・天保度饑饉之際甘藷・里芋等救急有益譚(市來廣實紀事)	八四二
五二二	加治木郷銭作ノ説(慶長頃)	八四四
五二三	鹿兒島大火之記事 (延寶八年) 正月	八四四
五二四	橋本左内ノ書翰 安政四年十一月二十八日	八四五
五二五	水戸侯鷹司閔白へ奉呈書 同十月頃	八四九
五二六	有馬新七建言 同十一月二十九日	八五二
五二七	寺島宗則自記鈔	八五五
五二八	参考 非藏人日記抄 同五月十六日	八五六
五二九	三條内府公へノ建言(無名氏)	八五七
五三〇	学習所揭示	八六一
五三一	箱館通寶鑄造 同閏五月	八六一
五三二	所司代脇坂中務大輔出立諸家其外見立云々達書 同十月十一日	八六二
五三三	米国使節登營布告 同十月	八六二
五三四	外国形船通航浦触停止国旗云々布令 同十二月二十二日	八六三
五二五	御黒書院出札ノ面々其外不時登營ヲ命ス 同十二月二十八日	八六三
五二六	参考 橋本左内書翰 同十一月二十八日	八六三

五二七	参考 七卿西竄始末初篇三條實美公記抄	安政四年二月〜三月	八六三
五二八	將軍閣老ノ精勤ヲ賞シ物ヲ賜フ	(安政三年)十二月二十七日	八六四
五二九	参考 阿部家記	安政四年二月〜六月	八六四
五三〇	薪炭高価云々論達	同十二月	八六六
五三一	金貨兩替云々布達	同四月	八六六
五三二	参考 江田平藏日記抄		八六七
五三三	十二月所司代本多美濃守殿ヨリ伝奏へ御達	同十二月十三日	八六七
五三四	十二月十六日叙任	同十二月	八六七
五三五	当時流行俚謡		八六八
五三六	参考 白石正一郎日記摘要	同九月〜十一月	八七二
五三七	越前藩士阿部又三郎・村田巳三郎ノ来麿		八七三
五三八	遊学御勸奨並学弊匡正ノ御訓諭	同九月	九一〇
五三九	士商ノ名分匡正ノ御書取及ヒ事実	同九月・十一月	九一〇
五四〇	大廊下下ノ御部屋御扣御承知之布告	同三月	九一二
五四一	哲丸公御誕生御届並布達、砲声ニ驚風症御発云々及ヒ黒田清綱建言御弁論	(安政五年)四月	九一三
五四二	國學館並洋學所開設、關・八田・後醍院石川等へ取調御内命	同六月中旬	九一三
五四三	造士館・演武館ノ名号更正之御内命	同六月	九一三
五四四	諸郷士格式復旧之尊慮	同七月頃	九一三

五四五	禁闕警衛ノ策關勇助へ取調密命	安政四年夏	九一三
五四六	海防論策ヲ求メラレシ事實	同二月朔日	九一三
五四七	造士館学風矯正之御親書	同十月七日〜十一月	九一三
五四八	軍制改革洋式砲術奨励ノ事實	.....	九一三
五四九	齊彬公島津豊後へ与ル書	(安政五年)二月二十九日	九一三
五五〇	参考 山本藤助家記抄	.....	九一三
五五一	御家老座其外諸局ノ悪弊ヲ矯正シ玉フ	(安政三年)三月	九一三
五五二	外国形ノ風帆船創造ノ事實	.....	九一三
五五三	齊彬公撮影術 <small>一名写真</small> 御開キ、御真影ヲ写サシメ玉ヒシ事實	安政四年九月	九一三
五五四	齊彬公書生遊学勸奨及ヒ学風匡正ノ訓令	同九月	九一四
五五五	齊彬公士商ノ名分ヲ正シ玉フ及事實	同九月	九一四
五五六	齊彬公文武御奨励御訓示	同十月	九一四
五五七	和蘭国ニ箱館・長崎ノ通商ヲ允ス	同十一月三日	九一四
五五八	琉球国王賀慶使出府ノ費用ヲ貸与ス	同四月二十六日	九一四
五五九	参考 島津久徵家記抄	.....	九一四
五六〇	齊彬公国老島津豊後へ賜書	同十月二十七日 同十月二十九日	九一四
五六一	造士館学風矯正之書取	同十月七日〜十一月	九一四
五六二	柴山愛次郎実兄良助へ送ル書翰	同九月二十八日	九一四

五六三	柴山愛次郎兄良助ニ海防急務対策建言ノ事情報告	安政四年二月二十九日	九二五
五六四	蒸気船雛形製造及ヒ大砲鑄造意見建言	(安政三年) 九月二十九日・安政四年六月二十七日	九二六
五六五	堀田正睦一橋殿ニ調和ヲ依頼ス	安政四年十二月	九三三
五六六	参考 非藏人日記鈔	(安政五年) 正月二日	九三三
五六七	水戸前中納言殿へ御渡勅書当中納言殿へ達書	(安政五年) 正月十三日	九三三
五六八	水戸藩土堀田關老ニ面接ヲ乞フ	(安政五年) 正月二十日	九三三
五六九	堀田正睦修學寺御苑拜觀ヲ辞ス	(安政五年) 正月二十一日	九三三
五七〇	兩伝奏堀田正睦旅館ニ参向叡旨ヲ達ス	(安政五年) 正月二十三日	九三三
五七一	京都習學所揭示	安政四年閏五月二十四日	九三四
五七二	福井侯堀田關老へ送ル書	同十一月二十七日	九三四
五七三	参考 非藏人日記鈔	同九月三十日	九三四
五七四	山川港ニ外国人接待所建設御目論見	.....	九三七
五七五	櫻島洗出又ハ神瀬其外砂揚場等へ砦堡建築ノ御目論見	(安政五年) .....	九三七
五七六	島津折烏帽子ヲ用ヒラレシ事実	(安政元年) 閏七月	九三八
五七七	風俗矯正御沙汰之趣ヲ布達ス	(安政元年) 九月十九日	九三八
五七八	四丁巳五月嵐山御遊行及ヒ御所御遙拜ノ事実	安政四年五月	九三九
五七九	拝借金被下切ノ布達及ヒ事実	同閏五月二十四日	九四五
五八〇	御家宝ノ刀劍奉獻之事実及ヒ内勅語	同五月	九四五

五八一	丁巳閏五月御下国ノ事実	安政四年閏五月二十四日	九四五
五八二	鹿兒島府下ニ書肆開カレタル事実	同六月	九四六
五八三	蒸氣船御注文ニ付市來廣貫へ下賜ノ御親書	(安政五年) 正月二十日	九四六
五八四	和蘭領事官上申書 (佐賀侯密贈)	安政四年二月三日・二月・二月五日	九四八
五八五	幕府長崎・下田・函館三奉行へ外国処分ノ意見上申ヲ促ス	同二月二十四日	九四八

〔表紙〕

# 齊彬公史料

市來四郎編

安政元年

〔扉に、表紙の文字の外に、「元国事鞅掌史料（紙数八十六枚）」の記載あり〕

安政元年甲寅 清曆咸豐四年  
西曆千八百五十四年

神武天皇御即位紀元二千五百十四年

孝明天皇 統仁第百二十代 御即位弘化四年八月二十四日  
丁未九月二十四

將軍家定公 第十襲職嘉永六年十一月三十一

藩主齊彬公 第二十八世當時薩摩守ト称ス 知政嘉永四年四月四十五美  
藩祖忠久公薩隅日三州及琉球国受封（八皇八十二代）

後鳥羽天皇寿永五年即チ文治二年（六百六十九年）

関白太政大臣 鷹司政通公

左大臣 九條尚忠公

右大臣 近衛忠熙公

内大臣 鷹司輔熙公

老中 阿部伊勢守正弘 （福山藩主）

牧野備前守忠雅 （長岡藩主）

松平和泉守乘全 （西尾藩主）

松平伊賀守忠優 （上田藩主）

久世大和守廣周 （關宿藩主）

内藤紀伊守信親 （村上藩主）

本多豊後守助賢 （嚴山藩主）

松平玄蕃頭忠惠 （小幡藩主） 十月依  
（泉藩主） 病罷免

本多越中守忠徳 （三上藩主）

遠藤但馬守胤統 （高田藩主）

本庄伊勢守道貞 （敦賀藩主）

酒井右京亮忠毗 （壬生藩主）

鳥居丹波守忠舉 （生美藩主）

森川出羽守俊民 （龍野藩主）

脇坂淡路守安宅 （龍野藩主）

所司代 京都町奉行

浅野中務少輔長祚

岡部備後守豊常

伏見奉行

内藤豊後守正繩

国老

○島津石見久浮

○島津豊後久寶

○島津將曹久徳

○末川近江久平

○喜入安房久通

樺山伊織久成

新納駿河久仰

鎌田出雲正純

島津左衛門久徴

島津伯耆久福

島津 登久包

以上十一名前代ヨリ勤  
続ノモノハ○印ヲ付ス

目録

総覧

齊彬公文武ヲ奨励シ玉フ

新铸尅朱銀通用布告

甲寅春御参府並布達

参考 黒田家々記抄

川路左衛門尉等魯西亜使節ト応接始末

魯西亜使節へ賜品ノ手続

参考 安田助左衛門警衛在府日記抄(軍賦役警衛方)

阿部伊勢守外国船渡来ノ節家士注意スヘキ訓令

夢々物語(脇坂家蔵書)

桑名侯通商貿易ニ付上書(全上)

魯西亜船修理ニ付職工差出方ニ付水戸殿伺書

下田港魯人遭難スクーネル船新製始末

外国人日本通商之企アメリカ人日本志望ノ事ヲ載タル公

頭之造牒記

英吉利船渡来及魯土戦争ニ付長崎風説

英吉利船四艘渡来長崎奉行達書

米艦下田港ニ死人ヲ乗セ来泊ノ報

和蘭軍艦将官ノ差出シタル風説書

同上

同上



一 総覽

安政元年甲寅 公四拾六歳

正月

元旦

五社御参詣、国老島津豊後(久費)扈従ス、竣テ御帰城、御一門四家及ヒ国老・若年寄・大目付等ノ年賀ヲ受ラル、尋テ御側役員ノ賀ヲ奥御書院ニ受ケ玉フ、先規ノ如シ、

二日・三日

兩日先規ノ如ク、大身分以下諸士年首ノ賀ヲ受ケ玉フ、三日江戸ノ報至ル、本年正月御参観、御先規ノ通タルベキ旨ナリ、閣老阿部正弘伝命ス、

四日

御参観期日布達セラル、

六日

先規ノ如ク、砲術館開場式執行、御名代島津安藝、

九日

伊敷村ニ放鷹シ玉フ、同日島津登ニ親命シテ、吉野村牧場ニ於テ、洋式大操練ヲ催サシム、

同日新納駿河ニ砲術館改革等ノ御親書ヲ授ケ玉フ(後卷ニ記ス、附記建言一冊)

同日同人ニ琉球政務ノ改革及ヒ御内用掛ヲ命セラル、

十一日

先規ノ如ク、大小吏ノ昇級ヲ命セラル、其人々ニハ島津右膳(久)ヲ詰来ニ、物頭伊集院靜馬(久照)ヲ当番頭ニ、町奉行田原藤太左衛門ヲ御用人ニ進メ玉フ、其他地頭転換略ス、

十二日

種子島彈正(久珍)、領地種子島ニ於テ病死ノ報到ル(幼名報七郎、齊宣公第六男)

日

閣老阿部正弘伝命スルニ、將軍家御継統ニ就テ、琉球王使江戸参賀、来ル辰秋(安政三丙辰)タルベキ旨ノ報臻ル、

十五日

詰衆新納次郎四郎(久備)・同島津郷十郎(久度)ヲ当番頭ニ進メ、御鉄砲奉行川上正十郎(親裁)ヲ町奉行ニ、御側役山口直記ヲ当番頭ニ進メ御側役如故、当番頭高橋縫殿(胤)ヲ御小姓組番頭ニ、当番頭伊集院隼

衛 (CAP) ヲ表御用人ニ進ム、

十六日

国老島津豊後御首途御名代トシテ、式事ヲ行ハシム、  
十七日

吉野村牧場ニ御騎行、洋式大操練ヲ覽玉フ、二三六ノ  
三組ノ士四百余人ヲ大隊ニ組ミ、遊軍隊ニハ四番組七  
百余人、其他八百余人ヲバタイロントシ、島津登之ニ  
將タリ、外ニ野戦砲二隊砲数十二門発砲操練ス、此ノ  
操練隊制ノ組織ハ、公親ヲ御制ノ図ヲ以テ創定セラレ、  
以來軍規ト令セラレタリ (図式別ニ添フ)、此日御帰路  
吉野村七社ヲ経テ、磯邸ニ入ラセラレ御逗留、此日山  
口直記・御記録奉行伊地知小十郎 (季安)・同副役町田  
孫十郎 (俊徳)・同見習佐多佳八郎 (直盛) ニ古文書取  
調ヲ命シ玉フ (藩内寺社亦ハ士庶ノ家蔵)

十八日

磯邸ヨリ小舟ニ架セラレ (丸木舟)、櫻島有村及ヒ瀬戸  
村ノ造船所 (軍艦) ヲ覽玉フ、当夜御帰城、

二十日

大砲操練四季休間ナク演習スベキ旨ヲ令セラル、從來  
幕令ニ従ヒ、四月ヨリ八月ヲ期トシタリ、

二十一日

江戸ニ向テ御発途、国老島津豊後扈從ス、御側役豎山  
武兵衛・名越彦大夫・山口直記等、此日伊集院苗代川  
ニ御泊 (朝鮮歌舞ヲ見玉フ、先規ノ如シ)

二十四日

高城郡西方村ニ御休憩中、江戸ノ飛報達ス、本月九日  
米国軍艦相州浦賀ニ來リ碇泊、江戸市街騒然タリ、  
二十五日

物頭上野司 (CAP) ヲ物主トシテ、警衛ノ為メ出府セシ  
ム、其人名左之如シ、

御軍賦役

隊長

松元十兵衛

木脇嘉左衛門  
(寛カ)

向井十郎大夫

日置半兵衛

二階堂與右衛門

岩城三左衛門

有馬雄之介

川村與十郎  
純義  
旧名

染川伊兵衛

谷山次郎右衛門

上村四郎右衛門

御目付

肥後五左衛門

相良勇右衛門

御軍賦役

永田新八郎

竹内勇藏

同筆役

岩下新之丞

三原善兵衛

仁禮平右衛門

池水荒次郎

醫師

伊集院常安

小頭役

川上斑之進

全上

谷山晚翠

外ニ太鼓貝役ニ与力二人・足輕八人、

吉村才之丞

戦兵ニハ、出水・加世田・穎姓ノ三郷士九十六名、

村田次右衛門

右本月廿六日江戸ニ向テ出発ス、

松元鐵之介

江戸邸在勤国老島津伯耆、在邸ノ兵ヲ率ヒテ高輪邸ニ

伊勢勘兵衛

齊興公ヲ守護ス、其兵上下二百名、米艦浦賀ヨリ内海

伊東藤七郎

ニ乗入リタルニ依リ、江戸市街ノ騷擾甚シ、

細江彌右衛門

芝藩邸ニハ、御前様(恒姫君)・虎壽丸様(世子)・勝姫

長束八郎次

君在邸、警衛嚴ナリ、

榎本十郎

二月

前田十郎

十三日

以上十二人

国老島津石見、旨ヲ奉シテ江戸邸警衛ノ二番手ヲ命セ

兵糧玉葉奉行

ラル、人名左ノ如シ、

皆吉金

〔物主順〕  
御小姓組番頭

島津藤馬

使番

川上武右衛門

〔町田孫六  
六病氣代リ〕

北郷八右衛門

旗預

毛利喜平太

兵糧玉薬方

福島助右衛門

野崎吉兵衛

坂本猪之助

田原五兵衛

實鳴新左衛門中江仲之丞病氣代

大迫新藏

池田龍悦

重信(怒力)怒成

医師

全上

諸郷士兵

高岡十一人

財部 四人

小林 八人

國分 五人

飯野 二人

福山 二人

清水 四人

始羅郡山田四人

蒲生 六人

鶴田 四人

樋脇 四人

高城郡高城二人

東郷 四人

伊集院四人

大口 六人

山崎 二人

鹿屋 四人

出水 五人

加世田五人

川邊 三人

高城タキ 三人

御兵具方与力二人  
同足輕八人

以上人員至急出發、大坂マテ予備ノ為メ出發セシム(二十日・二十一日ノ兩日ニ發ス)、此兵ハ大坂・伏見ノ間ニ在テ、臨機江戸ニ赴クノ旨ヲ命ス、其実ハ京都警衛ノ内旨ナリキ(事實後卷ニ記ス、近衛家奥表両日記及ヒ宸翰聯帶書彙參看)

二十五日

質素節儉・冠婚葬祭・祝宴等ノ制ヲ立、軍備充実・士氣振作云々、国老川上筑後・嶋津石見・新納駿河・樺山伊織伝令ス(後卷ニ詳記ス)

二十七日

島津安藝死ス(今和泉郷ノ領主、齊宣公五男、幼名啓之助、天璋院殿御実父)

同月二十五日浦賀碇泊ノ米艦退帆ス、此日島津伯耆率ル処ノ兵、高輪及ヒ田町邸ノ警衛ヲ撤ス、御発程ニ臨テ、国老新納駿河ニ親書ヲ授ケ、砲術館改革及ヒ宿弊ヲ祛キ、軍備ノ基本トスベシ云々、或ハ砲隊騎兵創設ノコトヲ令シ玉フ、御親書第(ママ)卷ニ記スカ如シ(市廣カ建言ト比較スベシ)

三月

六日

御道中ヲ急カレ江戸邸ニ御着、米艦渡来ノ報ニ接シ、  
急行セラレシ故ナリ (行道平常ヨリ凡十日許ノ早着)

八日

鹿兒島下町出火、延焼戸数九百九十五戸・土蔵二十八  
(今町赤田金助火元ナリシト)

十三日

先規ノ如ク、閣老松平和泉守 (乗全) 臨邸、旅勞ヲ慰シ  
物ヲ賜フ (先規ノ如シ)

十四日

江戸・大坂守衛人数ノ家族ニ米ヲ賜フ、各在職ノ俸ニ  
同シ、

十五日

御登營、御參勤ヲ謝シ玉フ (先規ノ如シ)

二十八日

御発駕前、洋式砲術ヲ軍事ノ基礎トシ、砲術館拡張、  
或ハ犬追物場ニ於テ操練スベキ旨、御親書ヲ以テ令セ  
ラレタルニ依リ、本日一大隊ノ小銃隊、運動ヲ試ミタ  
リ、国老・若年寄・大目付等臨場シ、御小姓番頭指揮  
(与脱カ)

号令ヲナセリ (事実後巻ニ詳記ス)

四月

四日

若年寄島津登奉命セシ洋式騎兵、本日天保山ノ操練場  
ニ於テ、瓶メテ運動ヲ試ム、国老川上筑後及ヒ大番頭・  
御小姓与番頭・当番頭・詰衆 (門地ノ輩初メテ就職之名)  
其他寄合等ノ人々ヲシテ隊伍トス、其数凡二百余騎、  
久包ハ奉命以来御下附ノ翻譯書ニ則リ、講習研究シ、  
或ハ己カ邸内ニ演習場ヲ設ケ、訓練ニ努メ、隊伍編制  
演習スルニ至レリ、翻譯書講習或ハ馴馬・発砲等ノコ  
トニ從事シ、久包ヲ補翼シタルハ、相良助大夫 (常長)・  
伊集院喜左衛門・磯永孫四郎 (周徳) 及市來正右衛門  
(廣貫) 等ノ輩ナリキ (事実後巻ニ記ス)

十九日

御納戸奉行兼御軍賦役田中仁右衛門ヲ御側役ニ進メ、  
御軍賦奉行ヲ兼ネシム、

二十二日

洋医修行ノ為メ、府下士有馬洞雲谷山郷士小倉玄昌・  
郡山土岩崎俊齋等ヲ長州ニ遣シ、青木周弼カ門ニ学シ  
ム、尋テ府下士八木玄悦 (後彌平ト改) ヲ大坂ニ遣シ、  
(務)

緒方洪庵カ門ニ入ラシム、是ヲ洋医官費生ノ扱メトス、月俸各四人口ヲ玉フ、

御途中伏見駅ニ御逗留中、三日国老島津豊後(久寶)ヲ

シテ近衛家ニ遣シ、世子虎壽丸公ノ結婚ヲ約セシメ、

尋テ公モ御微行、御参殿、御結婚ヲ謝セラレ、或ハ国

事ヲ談シ玉ヘリト(期時三條實萬公・中山忠能公臨席セラレシト云フ、近衛家三個御日記參看、事實後卷ニ記ス)

此月 日御留守居半田嘉藤次(歳典)ヲシテ、閑老阿部

正弘ニ就テ、虎壽丸君結婚ノコトヲ稟請セシム、將軍

家之ヲ允シ、且ツ賀シ玉フ、近衛公ハ家臣中川讚岐守・

今大路民部少輔ヲ江戸ニ遣シ、結婚ヲ賀セラル(式事後

卷ニ記ス、近衛家三個御日記參看)

二十六日

(伊達宗城)宇和島侯ノ請ニ依リ、洋式砲術教授ノ為メ、田原直助

(明章)宇和島ニ遣シ玉フ、

同月十七日去ル嘉永四年ノ夏起工、磯邸内ニ創建ノ反

射籠、其他ノ工事、稍々其功ヲ揚ケタルニ依リ、更ニ

関係者ノ名義ヲ改メ、反射籠係リ・大砲製造掛トス、

其人々ニハ、御庭奉行兼同局掛江夏十郎(直義)・御徒

目付兼小細工掛宇宿彦右衛門・御徒目付兼御庭方市來

正右衛門(四郎旧名)・御庭方兼御製菓方中原猶介・職工頭取濱田平右衛門・千葉助十郎ヲシテ、其事ヲ督監セシム、御側役三原藤五郎ニハ惣監セシム(創建ノ事實後卷ニ記ス)

此月閑老諸藩ニ令シテ曰ク、米艦内海ニ入ル、縦恣国法ヲ犯シ、殆ント戦ヲ開ントス、幕府ハ開戦ノ不可ナルヲ覺リ、枉ケテ彼ノ求ニ応シ、漂民恤恤、航海薪水・食糧欠乏ノ品、各地ニ於テ請求、及ビ下田・函館・長崎ニ寄港ヲ允ス、由テ海防嚴整、士氣振作スベキ旨ヲ令ス(當時ノ形勢後卷ニ記ス)

二十八日

国老封内海岸ヲ巡視シ、防海ヲ嚴令ス、

此月国産ノ錫、他邦ニ販売ヲ禁ス、当時一般大砲製造

ニ耗スル尠夥シク、從テ價格非常ニ上騰ス、依テ国産

ノ利益アリシト云フ、

五月

士氣振作・文武育成ノコトヲ令シ玉フ(令書後卷ニ記ス)

朔日

江戸邸御門出入等ノコトヲ、御側役堅山武兵衛・井上

逸作ニ令シ玉フ(後卷ニ詳記ス)

二日

江戸邸在勤砲術館書籍掛岩城三左衛門・岩下新之丞、砲術教授ノ勞ヲ慰シ、且兩名御徒目付ニ進メ、金若干ヲ賜フ、

十一日

直触(御家老組トモ唱フ)以下(御家老直接触達ヲ云フ)ノ輩、急變ニ臨ンテ物主及小頭(隊長ノ通唱)ニ任スベシ、平常隊制運動指揮号令會得スベキ旨ヲ殿令シ玉フ、

十三日

江戸邸員カ、米艦内海ニ入リシ際、警衛ヲ命ス、其人員御家老末川近江・島津伯耆・島津隼人(久典)、其他國分・加世田等ノ人々数百名ナリキ、

十五日

近衛家諸大夫今大路民部少輔等、藩邸ニ来リ、御結婚許可ノ報ヲ代表セシム、来月七日三條中納言(實萬)・防城宰相中将結婚ノコトヲ内奏セラレシヲ報シ玉フ(報書後卷ニ記ス)

二十一日

閣老阿部正弘、御留守居西筑右衛門ヲ官邸ニ呼ヒ、明朝公官邸ニ来駕アラムコトヲ達ス、

二十二日

公卯ノ上刻、阿部侯ノ官邸ニ臨ム、正弘公ニ問フニ、若シ米人琉球日本領屬否ヤヲ問ハ、其答弁如何、或ハ江戸其他防海ノ策ヲ懇問ス、公ハ帰邸直ニ筆ヲ執リ、外国処分且ツ琉球ニ於テノ対策ヲ記サル、国老島津豊後ヲ呼ンテ、之レヲ示サレ、或ハ琉球ニ於テ、外人処分ノ不当ナルヲ匡シ玉フ(後卷ニ詳記ス)

二十三日

公、堅山武兵衛ヲ阿部侯ノ官邸ニ遣シ、外国処分ノ意見書ヲ呈シ玉フ、而シテ琉球ニ於テ、外人処分、国老等過不及ノ処分アリシヲ閣老諭示ノ趣、高輪邸御側役永江休之丞ヲシテ、齊興公ニ告ケシム(事情多端、後ニ詳記ス)

二十四日

阿部侯、御留守居西筑右衛門ヲ呼ンテ示スニ、前日ノ達書急要アリ、速ニ返納スベシト(事実多端後卷ニ記ス)此時正弘堅山ニ内示シテ、國産ノ正錫数万斤ヲ、幕府ニ贖上グベシト令ス(事実後卷ニ記ス)當時錫・銅ノ価格非常ニ高騰、國産ノ錫ハ純良ニシテ、其価貴ク、利益尤モ多シ、得ル処ノ金壹千兩ヲ、齊興公ニ献シ玉フ此日前ニ所賜ノ叙任口宣、御記録奉行汾陽彦次郎、護

シテ鹿兒島ニ到ル(式事先規ノ如シ)

此日前ニ令セラレタル砲術勉勵、或ハ犬追物場ニ於テ操練ヲ開キタルヲ賞シ玉フ(賞書後卷ニ詳記ス)

幕府米國ト仮定約ノコトヲ發布ス、国老島津石見伝達ス(達書後卷ニ記ス)

六月

朝廷ニ刀劍大小ヲ内獻シ玉フ、近衛忠憲公伝獻セラレシト、皇居炎上ノ際、御劍焼亡セシ故、密ニ宸翰ヲ以テ、近衛忠憲公ニ伝シメ、進獻ヲ促シ玉シニ依レリト(御劍獻呈ノ部ニ詳記ス)

七日

近衛家ノ姫君(信姫)世子虎壽丸君ニ結婚ノ御願書、御先手渡邊下總守ヲ以テ、呈出シ玉フ(近衛家日記參看) 關老松平和泉守之レヲ受ク、

十三日

三番・六番二組ノ操練ヲ天保山ニ催ス、国老等之ニ臨ム、

十四日

畿内大震、二十四日ニ至リ不熄(事實後葉ニ記ス)

十五日

大坂御留守居飛脚ヲ以テ、五畿内大地震ノ概況ヲ報ス、京都ハ別条ナク、大坂邸モ異儀ナシト、震動ノ尤モ甚シカリシハ、伊勢・伊賀・大和・奈良ノ近傍、大和ハ家屋ノ壞倒多ク、圧死或ハ負傷者モ多ト云(事實後葉ニ詳記ス)

同月十三日、御軍役方筆者堀與左衛門琉球ヨリ帰着ス、滯留英佛人ノ情況ヲ具申ノ為メナリ(事實後葉ニ詳記ス) 此日大坂滯留ノ守衛兵ニ帰魔ヲ命セラル(洛中其他静謐ナルカ故ナリ)

此日御記録奉行江田五郎兵衛・新番役伊東善兵衛、御判物ヲ宰領シ江戸ニ行ク、佐土原藩ノ御判物モ付従ス、

二十五日

一番・四番兩組ノ操練ヲ天保山ニ催ス、御家老・若年寄・大目付臨場ス、

二十六日

近衛忠房公密賜ノ宸翰又ハ同公ノ内翰ヲ原田才輔、及ヒ得淨院ノ書ヲ豎山武兵衛ニ致ス、公之レヲ豎山等ニ拝見ヲ允サレシト云フ(事實後卷ニ記ス)

二十七日

二番・五番二組、操練ヲ天保山ニ催ス、国老等臨場ス、



此日新式砲隊ノ運動ヲ試ム、田原直助之レヲ揮指ス（前記和蘭人テ一ハンマーネンヨリ伝習スル所ナリ）

二十八日

堀與左衛門江戸ニ向テ発ス、昼夜兼行ス、米艦琉球ニ於テ告ル処ノ趣ハ、江戸海ニ入り、通商条約ヲ請ヒ、若シ允サ、ルニ於テハ、戦端ヲ開カン云々ノ事実ヲ告ケシム故ニ急行ス、

此日世子虎壽公、読書習字初ノ式ヲ行ヒ玉フ、補傳中山次左衛門侍ス、

晦日

三番・六番二組操練ヲ天保山ニ催ス、此日モ砲隊運動ヲ試ム、国老等臨場、前日ノ如シ、

七月

朔日

牛根郷海浜ニ於テ、疏大砲船二艘ノ製造起工式ヲ行ハシム、一ツハ二十四間、一ツハ廿間、御側役三原藤五郎、御船奉行長崎勘助・石原龍介・橋口左衛門、大砲鑄造場懸御徒目付直助等担当ス（製造ノ事実後巻造船ノ部ニ詳記ス）

這月、日御束帯御登營、及ヒ正式ノ鹵簿ニ左折烏帽子

ヲ用フヘキ旨ヲ令シ玉フ（布達後巻ニ記ス）

十一日

奥御小姓伊集院藤九郎ヲ、御小納戸役ニ進ム、

十七日

疏大砲船二艘、龍骨就ルヲ告ク、

二十五日

櫻島赤水村洗出ノ海浜ニ於テ、砲術操練ヲ催ス、国老等臨ミ、大砲遠撃ヲ試タリ（同所ニ土堤三ヶ所ヲ築ク、遠中近ノ差アリ、洋艦大中小ノ尺度ニ基ク）

是ヨリ曩キ、近衛公御父子ノ手ヲ経テ、密勅ヲ奉セラ

レタル御護身ノ刀、國光在銘、御家宝ノ内尤モ貴重ノ品ナリ、堅山武兵衛京都ニ護送シ、近衛家ニ就テ献ス、

（御護身刀奉獻ノ密勅書ニ、添付ノ宸翰アリシト、国事御憂慮

御依頼ノ趣ナリシト云フ、近衛家奥表両日記及ヒ宸翰甲第号

參証スヘシ）

二十九日

世子虎壽丸公、初メテ御淨書、伊呂ノ二大書ナリシト云フ、

此ヨリ前、米国軍艦琉球碇泊中告クルニ、江戸海ニ入り、請フ処ノ条件ヲ幕府ニ告ケ、尋テ長崎奉行ニ報シ、

而シテ堀ハ再ヒ琉球ニ渡リ、親命ノ趣ヲ中山王ニ伝フ  
ヘキ旨ヲ命セラル、以來琉球ニ於テ、各外国ニ對シ、  
下田開港ニ準シ処置スベキ旨ナリキ（琉球外国事件ノ条  
ニ詳ナリ）

是ヨリ先キ、世子公御結婚、近衛家ノ約成リ、幕府モ  
允許セラレシ故ニ、国老末川近江ヲシテ遺納式ヲ行ハ  
シム、

十八日

末川近衛殿ニ抵ル、御広鋪御用人岩正次郎兵衛付従ス

（近衛家三日記參看）

晦日

齊興公特旨ヲ以テ、曩キニ罪スル処ノ

大島ニ

名越左源太

悪石島ニ

山之内作次郎

永良部島ニ

脇岡五郎太

臥蛇島ニ

松元市左衛門

與論島ニ

村野傳之丞

徳之島ニ

島津清太夫

喜界島ニ

和田仁十郎

大島ニ

吉井七郎右衛門

徳之島ニ

新納彌太右衛門

永良部島ニ

近藤三左衛門

〔喜界島ニ〕

大久保次右衛門

〔喜界島ニ〕

山口及右衛門不及

等ノ罪ヲ宥セラレ、召還シ玉フ、

閏七月

朔日

末川近江京都錦小路ノ藩邸ニ至ル、前ニ内献セシ古笙  
一口（太子丸ト唱フ）及ヒ書篋箆一個ヲ、御留守居田尻  
次兵衛及ヒ得洋院ヲシテ、近衛家ニ護送セシメ、右大  
臣忠熙公ニ致サシム、公大ニ喜ヒ玉ヒ、笙ハ樂人ヲシ  
テ監定セシム、樂人一見シテ曰ク、惟レ昔時、聖徳太  
子愛玩シ玉フ処ノ太子丸是ナリ、其後聖護院宮ニ伝ヘ  
タリト云々、笙身ニ鈴虫ヲ画ク、因テ天皇改唱シ玉フ  
ト云々（別卷ニ詳記ス）

而シテ、近衛公伝テ朝廷ニ献シ玉フ、叡感斜ナラサリ  
ント、依テ近衛公田尻ヲ召シテ伝達シ玉フ、末川・田  
尻等飛脚ヲ以テ之レヲ報ス、豎山武兵衛之レヲ上申ス、  
此事ニ預リタルハ、御家老座筆者上野直右衛門・大山  
彦右衛門等凡ソ十四五名ナリキ、此人々京都ヨリ木曾

路ヲ経テ、江戸ニ帰ル (事実後巻ニ記ス)

前月二十五日、比志島彦左衛門等ノ一列、江戸ヨリ京都ニ至ル (献上ノ部ニ詳記ス)

三日

堀與左衛門琉球在留外国人接待等ノ内命ヲ含ンデ、江戸ヲ発シ、帰国ノ途ニ就ク、

八日

近衛忠愍公家人林縫殿 (マヤ) ・松井丹後介 (カヤ) 連名

ノ書ヲ以テ、明九日末川久平等ヲ該邸ニ召サル、近江及ヒ留守居田尻次兵衛參殿、虎壽丸公御結納ノ式ヲ行ハル、献品旧規ノ如シ、而シテ忠愍・忠房二公及ヒ信姫君、奥御書院ニ於テ拝謁、尋テ酒饌ヲ賜フ、信姫君手自ラ兩人ヘ人形及ヒ御菓子ヲ賜フ、而テ得淨院ヲ以テ、主上内賜ノ御菓子ヲ分賜シ玉フ (御結納式ノ部ニ詳記ス)

十五日

英国船四艘長崎ニ来リ、通信貿易ヲ乞フ (四艘共ニ汽船、廣貫在崎、親シク見ル処ノ事実別巻ニ記ス) 長崎奉行岩瀬肥後守之レヲ江戸ニ急報シ、処分ノ指揮ヲ俟ツ、英船ハ高銚島外ニ碇泊シテ、国書奉呈ノ期ヲ待ツ (事実後巻ニ

詳記ス)

十七日

又末川等ヲ近衛家ニ召ス、忠愍公結納ノ品ヲ賜フ (正式)、重ネテ大奥ニ於テ、忠愍・忠房両公御手結納祝歌ヲ玉フ、老女村岡之ヲ伝フ、

松に寄る祝の心を

万代の契をこめて二葉より

行末しるぎ相生の松

末川等拝授シテ退ク、尋テ末川ニ手提重一組、信姫君ハ御菓子簞笥四重ヲ賜、這日又祝酒ヲ賜フ、  
這日末川等ニ、忠愍公ヨリ色紙五枚・紗綾三卷、忠房公ハ羽二重二疋・真綿五把、信姫君ハ縮緬二卷・紗綾二卷ヲ、邸ニ齎シ玉フ、御使者坂戸寛次郎、  
十九日

末川等近衛邸ニ抵リ、昨日ノ恩ヲ謝ス (式事等一切近衛家奥表両日記ニ詳記、参看スベシ)

二十一日

末川ハ使命ヲ竣テ京都ヲ立、帰国ノ途ニ就ク、  
此月十三日、献セントスル処ノ刀ヲ京都ニ達ス、廿三日、原田才輔之レヲ近衛家ニ護送ス、同月三日、忠愍

公之レヲ携ヘテ参内、天覽ニ供セラル(献上ノ部ニ記ス)  
觀感斜ナラスト云フ(小刀波平行安カ作ヲ添フ)

同月七日、原田ハ書ヲ堅山武兵衛ニ贈リ、近衛家ノ御  
伝意ヲ報ス(献上品後巻ニ記ス)

同月十七日、將軍家紅葉山ノ廟ニ詣ス、先規ニ則リ御  
登宮、之レヲ賀セラル、同十八日、閏老久世大和守書  
ヲ以テ之レニ答フ、

二十四日

世子虎壽丸公、昨朝御習書常ノ如クナリシニ、劇然御  
発熱、剩ヘ下痢ヲ催シ、遂ニ本日丑之刻御夭亡、時ニ  
御年六歳(嘉永二年巳酉閏四月二日、江戸邸ニ御誕生)

二十六日

遺骸ヲ大圓寺ニ葬ル(將軍家ニ告ケラレシハ同月二十七日  
ナリ、將軍家日柄ニ依リテナリ、覺法院殿眞空自證大禪童子と  
謚ス、後ニ葦原角久英彦乃命神号ニ改ム)

茲ニ於テ、近衛家ニハ、御小納戸川上郷兵衛ヲ以テ告  
ケ玉フ(近衛家兩日記參看)

八月

朔日

近侍相議シテ、公ノ御健康ヲ目黒ノ不動ニ禱ル、井上

逸作御代拝、祈日一七日間(故アリテナリ、内証記參看)

四日

御中院ノ法会ヲ大圓寺ニ行ヒ玉フ、山口直記御代拝、

五日

川上郷兵衛京都ニ到リ、近衛家ニ參殿、虎壽丸公ノ訃  
ヲ告ク(近衛家兩日記參看)

七日

公御発病、国老島津豊後・御側役堅山武兵衛・同山口  
直記等ヲ始メ二十余人ヲ召シテ、御茶ヲ賜フ、

八日

目黒不動ノ御祈禱畢ル、井上逸作御代拝、及ヒ御簾中  
御代拝老女八十島、

此時暁姫君御虚弱ナル故、重テ不動ニ祈願ス(事実内証  
記ニ記ス)

九日

近衛忠熙公、林縫殿ヲ京都藩邸ニ遣サレ、御留守田尻  
(次兵衛也)  
次郎兵衛ニ就テ、虎壽丸公ノ訃ニ答エ玉フ、

二十六日

御広鋪番頭町田孫七・同横目丸田孫左衛門・家村助之  
丞等、虎壽丸君ノ遺髪ヲ鹿兒島ニ護送ス、此日江戸ヲ

発ス、

二十八日

公御病氣之報、鹿兒島ニ到ル、国人拳テ憂懼、本田加賀守(親徳)ヲシテ、五社ニ禱ル(風説内証記ニ記ス)

是ヨリ前命シ玉ヒシ帖佐鉄山ニ、鋼製ヲ開カシメ玉フ、石見国鉄工善九郎・金右衛門ノ兩人下魔ス、

此月公又新納駿河ニ命シテ、士氣振作・風俗改良・文武精勵ヲ訓諭シ玉フ(訓令書後卷ニ記ス)

九月

十日

(安政三年)

来ル辰年、琉球王使ヲ率ヒテ御参府アルベキ旨、御名

代島津兵庫達ス(達書後卷ニ記ス)

十三日

虎壽丸君ノ遺物ヲ、国老其他ニ賜フ、

十六日

故虎壽丸君御抱守中山次左衛門ヲ御納戸奉行ニ進メ、

菊池藤助ヲ御小納戸ニ遷ス、

十八日

魯西軍艦大坂海ニ来ル、彼ノ国書ヲ齎シ来ル、幕府之レヲ論シテ、豆州下田港ニ廻ラス、

二十一日

大番頭島津藏人(久武)ヲ若年寄ニ進メ、島津讚岐公ニ代テ之レヲ達ス、

二十八日

琉大砲船ノ竣工ヲ告ク、昇平丸ト命名ス(構造及ヒ尺度等造船ノ部ニ記ス)

十月

五日

故虎壽丸君ノ御遺髪自江戸抵ル、福昌寺ニ葬ル(葬祭式ハ後卷ニ記ス)

十三日

將軍代替ニ付キ、先規ノ如ク、御領国御判物ヲ授セラ  
ル、在勤若年寄島津伯耆・御留守居半田嘉藤次(歳典)・  
御記録奉行江田五郎左衛門(國幹)等、護シテ本多中務  
大夫(忠氏)ニ就テ、更ニ下附ヲ請フ、

二十五日

砲術操練ヲ犬追場ニ催ス、国老其他臨場、前ノ如シ、

十一月

四日

辰刻攝・河・泉大地震ノ報到ル、家屋崩壊夥多、加之

炎火起ル、畿内及關東八州・中國等大小震動數回、死傷多シ(事實後卷ニ記ス)

六日

砲術勉強ノ輩二百余名ヲ賞譽ス、国老新納駿河伝達ス、

九日

山川港外ニ、(証説カ)北米利幹ノ軍艦一艘渡來ス、

十日

番頭末川久馬馳テ山川ニ出張ス、尋テ国老新納駿河及ヒ御軍賦役坂本彦五郎・同筆者野村仲左衛門唐通詞等ヲ率ヒテ出張シ、來意ヲ問フ、薪水欠乏之ヲ求メンカ為メナリト、雪風強ク數日碇泊、港ノ内外、指宿等ノ海岸ヲ測量シ、或ハ佐多・小根占ノ地方ニモ、脚舟ヲ以テ乘リ行キ上陸ス、雪降り風浪高キヲ名トシ碇泊ス、

藩庁ハ異心ナキヲ知レリト雖モ、出軍演習ヲ試シムト、(通カ)劇ニ出軍ヲ令シ、上モ下モ両海岸ニ衛兵ヲ出シ、或ハ東西海岸及ヒ長崎援兵ノ諸隊ハ、天保山ニ操練セシム、其物主ニハ島津勘解由(久)・北郷作左衛門(久新)・榊山主殿(久中)・入來院平馬(久)等、隊兵ヲ率ヒテ出張ス、

十三日

島津下總御名代ノ名ヲ以テ、指宿摺ノ濱ニ出張ス、尋テ十四日、大番頭島津隼人(久徴)野戰砲一隊(二隊砲數七百目四門・五百目砲四門)ニ將トシテ指宿ニ出張ス、

隊長ニハ高田猛八郎・四本休次郎等戰士三十六人、又

小松相馬(清)ハ西目海岸物主ニテ、一番・四番二組

ノ兵百九十六人ヲ率ヒテ、同地ニ出張ス、東目海岸物

主北郷鐵五郎(久將)組頭桂内匠(久羅)病氣ニ因リ、

北郷代リテ出張ス、二番・五番二組ノ兵百九十六人ヲ

率ヒテ、同所ニ出軍ス、雪ヲ踏シテ十余里ヲ行軍シタ

リ、大ニ実験之益ヲ得タリ、斯ク演習ノ為メナリシト

雖モ、目前外国船碇泊セルカ故、開戦ノ説ヲ唱ヘタリ、

故ニ壯年ノ輩ハ刀・槍ヲ携ヘテ、私カニ出張シタルモ

ノ多シ(事實後卷ニ記ス)

十八日

米艦ハ薪水ヲ得テ退帆ス、十九日、各隊及ヒ新納駿河

等山川ヲ兎シ帰路ニ就キ、喜入郷ニ舎シ、米艦再來ヲ

慮リ空地ニ舎リ、二十日各帰廳ス(事實後卷ニ記ス)

二十一日

米艦ハ種子島ニ碇泊シ上陸、各所ヲ測量シ、二十二日

去レリト報ス、

此時市來及ヒ中原猶介ハ、職工長坂元與一・山下左衛門・木佐貫源介等数名ヲ率ヒテ、山川ニ出張シ、米艦ニ乗リ入り、構造其他ヲ見タリ、当時蒸氣船製造ノ主務ナレハナリ (見聞記後卷ニ記ス)

二十五日

御軍役掛リ御用人末川久馬 (久長)、長崎奉行ニ事実具申ノ為メ出張ス、

此日寺社奉行島津勲負 (久) 野戦砲隊ノ総物主命セラレ、祇園洲砲台ヲ戍ラシム、

五番組頭

川上右近 (久照)

副頭 当番頭

島山藤十郎 (義權)

町田主馬 (久憲)

当番頭

島津郷十郎 (久徳)

六番組ハ上町築地ヲ守ラシメ、寺社奉行島津相馬 (久平) 都城主大砲隊ヲ率ヒテ都城邸ヲ戍ル、五番組頭伊集院亘 (久意) 島津隼人 (久芳) ハ、新橋及ヒ入來院邸近傍ヲ

戍ル、

六番組頭高橋縫殿 (種徳) ハ、江戸橋及ヒ金蔵下夕堀通ヲ戍ル、

詰衆川上孫左衛門・副惣頭四番組義岡藏人・諏訪數馬

(武盛) ハ、石燈籠通ヲ戍ル、当番頭島津直人之レニ副タリ、

二番組頭菱刈本之介 (隆徳) ・比志島靜馬 (龍惟) ハ、

当番頭川田將監 (佐武) ・島津健、之ニ副タリ、

三番組頭鎌田典膳・当番頭樺山權十郎 (久中) 南林寺近傍海岸ヲ戍ル、

当番頭關山糺 (富カ) ・詰衆島津權五郎 (久響) 之ニ副タリ、

勘定奉行伊勢雅樂 (貞意) 大砲隊ヲ率ヒ、大門口ヲ戍ル

勘定奉行宮之原主計四番組之雜兵ヲ率ヒテ、天保山ヲ

戍ル、

番頭島津勘解由佐志郷ノ兵ヲ率ヒテ、花倉村ヲ戍ル、

末川愛之介養父平馬 (久馬) 二代リ、入來郷ノ兵ヲ率テ磯邸ヲ

戍ル、

島津周防 (忠教、久光旧名) 公子ハ、領地ノ兵ヲ率ヒテ鶴江崎ヲ戍ル、

島津兵庫 (久長) ハ、領地加治木郷ノ兵ヲ率ヒテ、下町木綿織屋近地ヲ戍ル、

島津圖書領地宮之城ノ兵ヲ率ヒテ、御作事方近傍ヲ守

ル、

此日高橋縫殿・町田主馬ニ、各金百兩ヲ賜フテ勤勞ヲ

賞ス、

此月 (マ)

日島津相馬・島津鞆負・伊勢雅樂・宮之原主計

等ハ、酒食ニ耽リ遊惰云々ヲ以テ、謹慎謹責ス (謹責書

後卷ニ記ス)

此月 (マ) 日御軍役惣頭取川上式部(久美) 琉球在番奉行兼

守衛方ヲ兼務セシム (事実後卷琉球ノ部ニ記ス)

十二月

五日

安政元年ト改元布告ス、

六日

四番組頭諏訪數馬(武盛) 原職ヲ以テ、御軍役惣頭取ヲ

兼シム、

九日

御軍賦役福島半次郎及ヒ白尾登五右衛門、志布志郷ノ

兵四拾八人及從卒共百余人、江戸邸守衛ヲ命セラル (

事実後卷ニ記ス)

十三日

琉大砲船竣工ヲ告ク、此日櫻島ヨリ前ノ濱ニ廻航ス、

国老其他搭艦、福山海ニ往来試航ス、這艦長貳拾間、

積石凡ソ二千五百石 (從來米穀ヲ以テ、積石ヲ算ス) 左右

ノ舷ニ大砲十門ヲ備フ (二拾四斤・十二斤・六斤ノ一 (マ) 砲)

二十三日

梵鐘鑄換ノ詔ヲ發シ玉フ (後卷ニ詳記ス)

二十四日

新製ノ砲艦発砲ヲ試ム、国老其外搭艦、試験ヲ覽ル

(廣貫等數名砲手タリ、事実後卷ニ記ス)

二十五日

江戸邸守衛兵福島・白尾等發途ス、

二十六日

改元令江戸ヨリ達シ、即日發布ス、

二十八日

歳暮ノ佳儀、御一門四家其他大身分以下諸士ニマテ登

城、先規ノ如シ、

二 (ママ) 齊彬公文武ヲ奨励シ玉フ (安政四年正月)

学問・武芸出精、士風可致興起トノ趣ハ、近年從 公

儀分テ 御沙汰ノ趣モ有之、於 御当国ハ猶更積年嚴

密被 仰出置、一統奉承知通ニ候、然処寄合以上家柄ノ



面々二男以下之儀ハ、往々家柄ノ向、養子ニモ罷成、

又ハ相応ノ御役ヲモ被 仰付、不容易身柄ニ候故、猶

更士道不相嗜候テ、愚痴文盲ニ候テハ、不相濟事候ニ

付、以来一涯忠孝ニ基キ、士道ヲ弁ヘ、行跡律儀相嗜、

且學問武芸致出精、往々御用立候様可心掛候、尤古来

ヨリノ習俗ニテ、少々學問心掛候ヘハ、一己ノ偏見ニ

致固滞、与党ヲ(文化五年秩父・樺山等ノ党ヲ云) 結ヒ、

却テ御国政ノ妨罷成候者モ有之、以ノ外ノ事候条、屹

ト心得違有之間敷候、

右之通 宰相様(齊興) 御前(正月十五日)へ駿河被召出、御直ニ

奉承知、誠ニ以難有御事候条、家柄ノ面々ハ勿論、

諸一統(主殿カ)深奉汲受、一涯武芸等致出精、律儀相嗜、屹

ト 御趣意相貫、往々御用立候様、可心掛候、此旨

向々へ不洩様可致通達候、

正月(安政四年正月十七日)

伯耆 島津 久福  
登 島津 久包  
駿河 新納 久仰  
伊織 樺山 久成

三 新鑄一朱銀通用布告

此節世上通用ノ為メ、吹立被 仰付候者朱銀ノ儀、来

ル廿四日ヨリ可致通用候、

右ノ趣不洩様可触知者也、

別紙之通、從 公儀被 仰渡候条、不洩様可致通達候、

正月

御家老座印

四 甲寅春御参府並布達

太守様来ル廿一日已刻御発駕安政元年甲寅年正月廿一日 御参勤可被遊

旨被 仰出候条、此旨不洩様可致通達候、

正月

豊後 島津 久宝

布告ノ如ク正月廿一日御発駕、出水筋・九州・中國・東海

道通行セラレ、三月六日江戸芝邸へ着セ玉ヒヌ、御家督後

辛亥初テ御下国、壬子ノ春嘉永五年壬子 御参勤ノ例規ナリシカト

モ、政務多端且海岸防禦、或ハ琉球国異国人処分上ノコト

ニ就テ延期ヲ許可ヲ得玉ヒ、同八月廿三日御発駕、同十月

九日江戸邸ニ着セラレタリ、是レ御家督初メテノ御参府ト

五 参考 黒田家々記抄

安政元年甲寅二月二日

少将様齊博 御旗掛ニテ、於飯塚駅松平薩摩守様齊彬 為御

参府、御領内御通路ニ付、御内々御出会被遊、右ニ付

公儀へ御届無之、

但表向御出会被遊候へハ、前以 公辺御同等有之儀

ニ候へトモ、此節ハ全ク御内用被為在候ニ付、御

行粧等御野掛ニテ、御獵之御唱ニテ、御獵先御行

掛リ、彼方様御旅宿へ御内々御立寄被遊御都合ニ

付、公辺御届ニハ不及旨被 仰出、且彼方様へ

ハ猶御道中筋御近親様方御出会之儀、前後御届等

無之相済候御例モ有之由被 仰進候段、御沙汰

被為在、尤此節御出会之御都合、自然ハ阿部伊勢

守様御老中へモ薩摩守様ヨリ御内話被成候儀モ可

有之ニ付、右御届無之処、於江戸曾テ心配ニ不及

旨被 仰出、自然御留守居中猶懸念モ有之候ハ、

薩摩守様御着府之上相伺候へハ、事々相分リ可申

トノ御沙汰有之候付、本文ノ如シ、

右之趣、二月三日之便江戸へ御下知申入之、

幕府カ諸大名ニ対スル政略ハ、上文ノ如ク、近親ノ間訪問

ノ小事モ許可ヲ得ルニ非ラサレハ、猥ニ面会スルヲ得サル

ノ成規ナリ、実ニ抑圧ト謂サルヲ得サルナリ、然リト雖、

法繁ナレハ必ス潜ルノ弊生スルハ、古今其例少カラス、則

チ福岡侯ハ狩獵ニ装ヒ、面接シ玉ヒシヲ以テ知ルヘキナリ、

六 川路左衛門尉等魯西亜使節ト応接始末

十二月三日、魯西亜使節ト伊豆下田港ニ於テ応接ノ

始末

第一商交易ヲ相願ヒ、第二国境ヲ定メ、此二条ノ為メ

罷越、然ル処左衛門尉(川路)云、通商ノ儀ハ、先々米

利堅ト結ヒ通リニ、約定丈ケハ差免ヘク候、境界ノ儀

ハ、エトローフ以西ハ我所屬ト定メ、ウルツフ全島北

ノ方クルリ諸島ハ魯ニ屬ベシ、唐太島ニ至リテハ、是

迄ノ通日本ト魯国トノ間ニ於テ分タス、尤モ日本人并

蝦夷アイノ、住居シタル地ハ、日本所屬タルヘクト申

立候へトモ、人種雜居ニテハ、経界不詳カト申シ行形

ニ致シ置候、

卯年ニハ、英人セームス、クシユンコタンへ上陸ノ節、

唐太ノ様子相尋候ニ付、勝之助答候ニハ、一昨年魯人

無沙汰ニ、クシユンコタンへ陣營ヲ取リ立置候へトモ、

談判之后、魯人立払候、猶経界ノ儀ハ、五十度位ト相

答フ、セームス曰、唐太ハ魯国何故ニ取リタルヤ、是

ノ先キハ、御国ノ属島ニ候哉ト問フ、勝之助云、半島

ヨリ北方ハ、人種相變リ候由ニ対フ、セームス曰、ウ

ルツプモ魯領ト相成候儀ニ承ル、何ゾ代リ差出シ候哉  
ト問フ、此方ニハ右様ノ儀無之ト答候ヘトモ、セーム  
ス云、御損失ノ儀、歎カシク存候ト申候事、

七 魯西亞使節へ賜品ノ手続

朝四時役々一同福泉寺へ相揃候事、

一 五半時頃魯船へ為案内、下田奉行・組与力・御小人目  
付差遣、直ニ使節ヲ誘引致、休息所迄相越候事、

一支度整次第、休息所為案内、下田奉行・組与力・御小  
人目付差遣、応接所へ誘引致候事、

一 玄關上迄中村為彌出迎、扣所へ為相扣候事、

一 被下物飾付相濟候上、為彌使節ヲ誘引致シ、応接所へ  
罷越、役々出席立ナカラ被下物之儀、肥前守達之、

先達テ長崎表ニ於テ被差出候献上物、帰府之上言上  
及フ処、御受納相成候、依之為返物目録之通被下之、

一 魯人御礼申上候テ、座ニ付候様肥前守達之、此方モ座  
ニ付、御品ハ扣所迄引之、役々一ト通り挨拶有之、掛

合之料理被下候旨、肥前守申達、同人并左衛門尉計リ  
相残り、外役々扣所へ引、

但支配向ハ、刀ヲ持チ横座ニ支居候事、

朱書

魯人御礼申上退去、此方役々モ一旦退座、御品魯人扣  
所へ為扣出置候テ、役々出席着座、魯人モ罷越候テ、  
イスへ掛ル、但イス持參、

右差掛リ手続書朱書之通直ル、

一 料理向差出、肥前守・左衛門尉対食、畢テ役々再ヒ出  
席、肥前守挨拶之上、為彌使節ヲ扣へ所ニ誘引致、退  
散為致候事、

一 魯人退散畢テ、役々一同退散之事、

一 上陸場所・休息所之三ヶ所、御固メ差出候事、

下田港見分致シ候処、手狭ニ有之、殊ニ冬之氣候ニ至  
リ、大軍艦ノ為メ不安心之場所ト存候、依之魯西亞國  
之全權兼テ承知罷在候江戸港へ罷越、日本政府ニヲヒ  
テ、全權之御方々へ取結之条約致度希候、

右全權之命ヲ請テ

千八百五十四年十二月廿一日

カビテイインロイテナント

魯西亞國フレガット船デイヤナ船  
号ボスシート

右之通和解仕候、以上、

堀 達之助印

志筑辰一郎印

八 参考 安田助左衛門警衛在府日記抄(軍賦)

役警衛方)

嘉永七年

正月

十二日

一伊豆大島沖へ、異国船追々相見得候注進有之、則ヨリ乗切等(見届ノ為メ騎行)被差出、且又竹下清右衛門・深見休八(警衛方報知役) 諸見聞ノ為、浦賀へ被差出候

(竹下・深見ノ二名ハ警衛員ノ中ニ在テ、事情探聞方ナリ)

一北阿墨利加合衆国、去年(七月) 渡来ノ船ニテ、蒸気船

三艘・フレカット三艘ニテ、コルヘット一艘先鋒船ニ

テ、小芝沖迄乗り入り候トコロ、諸船モ追々乗り入り

候段、諸所ヨリ注進有之候、

一林大學頭殿・井戸對馬守殿(寛弘、町奉行)・鶴殿民部少輔殿・松崎滿

太郎、右イツレモ御時服拜領等被仰付、応接旁トシテ

浦賀表へ被差出候、

一異船浦賀へ乗戻リ候様、御達相成候へ共、不聞入旁難

題筋申掛候由、

一御殿山

(青葉、金沢藩主)  
松平加賀守

高輪刃

芝刃

生変鶴見刃

深川洲崎

鐵砲洲佃島

右之通、正月十七日夜御固被仰出候、

一異人へ応接有之候得共、色々苦情申立候処ヨリ、江川太郎左衛門へ、異船万一江戸海へ乗入候へ、其方早速差越、精一ハイ(必至ノ方言) 申諭候様、正月廿三日、御達相成候、

二月

朔日

海岸屋敷有之面々人数差出可申、尤モ不事立様、穩便

ニ取計候様、同夜九ツ時分被仰渡、高輪御屋敷へ島津

右門(久福)殿、田町御屋敷へ島津隼人(久芳)夫々一

手ノ人数被召附、大砲人数モ被相添、同夜九ツ時分出

張被仰付候(二人共ニ番頭ヲ以テ在邸ス、予メ警衛ノ備ヲナ

シタリ)

三日

(五頭、勘定奉行)  
松平河内守・江川太郎左衛門神奈川へ差越、井戸對馬

(音民、津山藩主)  
松平越後守

(藤永、福井藩主)  
松平越前守

(慶應、明石藩主)  
松平兵部大輔

(定款、桑名藩主)  
松平越中守

(忠順、姫路藩主)  
酒井雅樂

守ナドへ御用談、大議論ノ由、帰着ノ上、前中納言様  
(齊昭公) 并ニ御老中方ニモ、直ニ御対願(將軍家)

十五日

異人二百人計横濱へ上陸、蒸気車其他献買物差上候、  
且今日異人ノ内二人、是非江戸へ可差越申候テ、大師  
河原マテ強義ニヲシ通シ参リ候へトモ、渡船取揚候付、  
無是非罷帰リ候由、

廿六日

蒸気船一艘致出帆候、和議相整候注進トシテ、本国へ  
差返候由(ペルリー紀行対照、琉球へ寄港、右ハ第三番目  
ノ船將兵ヲ不用、無事ニ和議ヲ取組候テハ、日本心服  
致ス国ニテ無之候間、兵端ヲ開キ、武威ヲ示シ、其上  
和議ヲ用候へハ、後來迄和議能相整可申致建議、無事  
ノ取計ニ合点不致、先日大師河原迄差越候異人ハ、右  
ノ者ノ服心ニテ、無体ニ江戸迄踏通候へ、何トカ事ヲ  
可引出トノ考へニテ遣候由、夫故都督ヨリ本国へノ使  
節申付、為致帰帆候由(事情誤レリ、合同舶入相記參看)  
一下田へ商館ヲ立、漂民撫育等ノ儀モ条約相立、三月十  
三日異船不残出帆、下田港へ致廻着、六月朔日下田致  
出帆候、

右ハ大頭迄留置候、委細ハ墨船再渡記略ニ有之、

一金千匹

安田助左衛門

右ハ爰許御手当ノ御兵具取シラへニ付キ、掛リ被仰  
付置候処、数日骨折致精勤、依之右之通り御内々ヨ  
リ被下候事、

右ノ通り、寅三月廿一日豊後殿(島津久寛)ヨリ被仰  
渡候、

一御当地ニテ、御内用計ヲ以テ大砲鑄製被仰付候付、右  
掛豊後殿ヨリ被仰付候、寅六月田町別邸ニ工場ヲ設ケ、  
松代藩佐久間修理ヲシテ図形ヲ出サシメ、百五斤ホム  
カノン一門ヲ鑄造ス、

一御銀式枚

右異国船渡来ニ付、高輪・田町へ人数繰出方致骨折  
候付、頂戴被仰付候事、

一御銀一枚

右ハ田町御屋敷御台場御築立(江川太郎左衛門・佐久間  
修理ニ指揮セシメタリ)ニ付掛被仰付、発起之儀ニテ骨  
折致精勤候付、右ノ通り御内々被下候旨、寅四月豊  
後殿ヨリ被仰渡候、

九 阿部伊勢守外国船渡来ノ節家士注意スヘ

キ訓令

近来異国船度々近海ニ渡来、其情態・挙動不容易儀モ相見候ニ付、於  
公边防禦・警衛筋之儀夫々被 仰出モ有之、當時自分ニ於テハ重御役儀相勤居、殊ニ海防掛之儀ニ候ヘハ、末々迄別テ軍務之嗜好ニ無之テハ不成事ニ候処、一統相勵、武器用意追々相整候段令満足候、然処当夏異船浦賀表ニ渡来之節ノ挙動一同承知之通候処、先以無事退帆ハ致候得共、今般從 公儀被 仰出モ有之通、猶再度渡来之節ハ如何様之形勢ニ可相成モ難計、万一彼不法之狼籍相働候欵、或ハ来艦之模様ニ寄候テハ、急速出張諸藩之指揮致シ候儀モ可有之、其節ニ至候テハ、家中之者共平生之覚悟ニ有之儀別段申聞ニ不及候得共、上下一致ニ相成、昇平之 御厚恩ヲ奉報候ハ此時ト存込、何レモ祛身命、汚名ヲ末代ニ不残様弥以勇義之心取守リ候儀肝要ニ候、依テ平生之心掛輕薄ニ流レ、文武之二途不振候テハ、自然取建引立方申付候儀ニ有之条、一統格別致出精、馬前之忠功諸藩ヨリ拔群

ニ有之度事ニ候、勿論働ノ甲乙ニ寄、恩賞之沙汰ニ可及、尤功名ハ顯レ候共、疵所等ニテ勤仕致シ難キモノ有之ニ於テハ、恩賞申付候上生涯扶持方差遣可申、或ハ討死ヲ遂候ニ於テハ子孫ニ宛行、若子孫無之ニ於テハ養子申付、跡目無相違為取恩賞同前可申付候、將又供ニ召連候者エハ其節夫々手当差遣、并妻子扶助之儀モ兼テ申付置、相当取扱可遣之条、右等ニ無心置功靜ヲ立可申、扱又出張之節ハ、人氣騒立候折柄ニ候得ハ、蹟之儀別テ大切之事ニ候間、留守ニ差置候モノ共ニモ右等ノ場合厚ク相心得、兼々心掛居、其節ニハ銘々定置持場嚴重ニ相守、万端別テ入念取締方致シ、火之元等迄モ厚ク心付可申勿論之事ニ候、若万一心得違等閑之勤方致シ候モノ有之ニ於テハ、無用捨可及嚴重之沙汰旨、兼テ可令承知者也、

十月 日

一〇 夢々物語（脇坂家藏書）

夢々物語ト申モノ外々ニテ手ニ入候ニ付、写取奉差上候、以上、  
〔政憲、大目付格西丸留守居〕  
筒井肥前守様魯西亜ホウチヤチンヘ之御応対振ハ、グ

ラリト打替り御下手ニ御附、誠ニ極御丁寧之御会釈ニテ候へ共、御意外之御問答有之、異人モ御老年トハ申且思召切テノ御掛合ニ付、日本国ノ忠臣ト大ニ感服ニテ、一ト先引取候義ニ相成候由、右応接中蝦夷地属島ノ訳柄、先方ヨリハ大日本往古ノ旧記等精密ニ申出シ候処、流石ニ川路・古賀御兩人モ御立派ノ御答ニ候へ共、取分簡并様ニテ御引取、逸々無御滞御答御座候テ、殊ノ外御見事ノ由、尤魯西亜船へ御乗込ニテノ御問答ノ由ニ御座候、

但俄羅斯書翰之中ニ疆界ヲ定度ト申義ハ、何モ日本ノ地方東北ノ界ヲ建ルト申訳ニモ無之、全ク蝦夷地属嶋ノ内ニテ、年々土地ノモノ鮭猟之時節ニハ小屋ヲモ建、人跡モ御座候得共、其余ハ無人島ニ相成居候、右ハ兼テ外夷何レモ心差居候ニ付、万一掠奪被致候へハ、日本へハ勿論、魯西亜へモ足溜リニ相成候間、日本ニテ属地ニ無之ト申候ハ、彼ヨリ為相守可申、又日本持ニ候へハ、警衛向致シ可然トカノ意味之由モ承り候、  
他ノ御留守役相勤候モノヨリ承り申候、(正弘 榑山藩主)虚実ハ如何可有之哉、其俚奉申上候、先月中旬比ノ由、阿部伊勢守

様御役宅へ(黒田奇徳、福岡藩主)・(鍋島齊正、佐賀藩主)松平美濃守様・松平肥前守様御兩家ヨリ御使者ニテ、直ニ御目通り相願度義申込、何様ノ儀ニ候哉、公用人共承り可申旨相答候処、公用人衆へハ難申達、万一御目通出来兼候ハ、重役ノ衆へ面会致シ度トノ事ニテ、(会津、熊本藩主)・(奥平昌服、中津藩主)・(会津、肥後守義)・(会津、津藩主)・(会津、松平)肥後守義ハ、三本道具御免ニ相成候、右ハ全ク御固場ノ事柄ニ付被 仰出候由、承知被致候、御固場ト申御趣意ニ候へハ、兩家ハ古来ヨリ御奉公筋出精相勤居候、必竟御目近キ場所相守候故、右様被 仰付候欵、若又賄賂筋ニテ被仰出候義ニ有之候ハ、不苦、其段承知イタシ度トノ事ニ御座候、

但鍋島家ノ噂ハ不承、黒田家ニテ御家中向モ内実ハ不服ノ由ニテ御座候、  
右之通、外々ニテ承り込候ニ付奉申上候、何卒御聞流ニ奉願上候、以上、  
三月三日  
一一 桑名侯通商貿易ニ付上書(脇坂家蔵書)  
太平打統キ、武事衰弱ノ時ニ候間、今般亞米利加国之要求一切已来相断候ハ、忽チ兵端ヲ開キ、争戦ニ及

ヒ、國家ノ安危存亡ニ拘リ候事ニ付、御容易ノ可否ニ難被遊事ハ勿論ニ候得共、今度持渡ル國書等頗蔑却ニ相見候、神武開國以來夷狄ノ凌辱曾テ無之、既弘安ノ比、蒙古入寇ノ時、北條時宗陪臣ノ分トシテ、其威万国迄モ相輝候、時宗ニ引比候得ハ、甚以憚入奉存候得共、至大至極之御職掌ニ相当候事ニ候得ハ、御國恥ヲ被為思

御國体ヲモ被為失、通商・通信御許容ノ筋ハ被討御職掌決テ有之間敷ト奉存候、万々一苟且ニモ思慮ニ陥リ、國家安全サヘ有之候得ハ權時ニ宜候ト、一先夷賊之意ニ順適シ、通商交易ノ場迄モ望ノ俛ニ被任、一旦ノ患ヲ緩メ、其内ニハ武備相整、国内充実之時ニ至、通商御停被成、交易モ御取戻シ可然抔ト申義モ出来可申義、如何ニモ老練遠慮ニ聞ヘ可申候得共、突ハ天下ノ大事ヲ誤ルノ極ニテ、始終永安ノ見込有之事ニハ有之間敷、一旦通商ヲ許シ、無事平穩ノ御取扱ニ相成候テハ、人々目前ノ安ヲ偷シ、弥遊惰衰弱ニ流、何程ノ御世話御座候テモ、<sup>〔商カ〕</sup>通者御停止、交易御取戻ノ義ハ、決テ相叶申間敷、乍去夫ハ兎モアレ、通商御制禁ノ義ハ、建国以來御國法、九州大名今ニ至リ、右ノ御國法急度相守

罷在、大平無事之内ニモ、夫々海備ニ心身ヲ相用候儀ニテ、近年尚又海辺手当ノ儀御沙汰有之、外夷ハ被討御國威不相失御主意、度々被仰出モ有之処、<sup>〔各カ〕</sup>亞墨利加恐嚇之文言ヨリ、御職掌之美難相立、天下後世如何相議候半、無此上御恥辱美以奉恐入候、殊更今度御國法ヲ被為任、亞墨利加通商御許容ノ趣ニ候ハ、魯西亜・<sup>〔各カ〕</sup>諸尼利亞ヲ始西洋諸蕃、黙々罷在儀ハ曾テ有之間敷、只今之夷船渡来ノ根元、<sup>〔各カ〕</sup>諸尼利亞等素ヨリ同夷類ノ國ニテ、但ニ申合其授ヲ請、<sup>〔各カ〕</sup>罷越候事モ難量、左候得ハ此後諸蕃名難題ケ間敷義申懸候半モ不可知、是ヲ拒ミ候ハ、兵端ヲ生シ、其意ニ從ヒ候ハ、種々凌辱ヲ受、国力モ尽果可申、左候ハ、諸蕃入込来、号令不行届、清國之大邦ニテモ其害不少、況日本ノ狹隘、諸蕃御引請可相成地所モ不相見、乃至御引請ニ相成候テモ、彼是御差障筋出来候儀ハ顯然ノ義ニ付、日本地方ヘ御引請ノ交易ハ、誠拙策ノ至ニ候、夫等ノ処過量仕候テハ、一旦ノ御許容永世大患ノ基ニ相成、中々一日御安心ノ場ハ決テ有之間敷候、且御國法ヲ被為守、交易筋御断ニ相成候ハ、定テ兵船差向、兩國戰鬪ニ及ヒ可申、南海諸島等被掠奪候義モ可有之候得共、兵端



彼ヨリ開候義ニ御座候へハ、所謂有名ノ師ニテ、直在于我ト申者故、他日恢復ノ功モ易得候、然ル処、一旦ノ御許容ノ上ニテ、他日兵力ヲ以御取戻ニ相成候得ハ、曲在于我ノ筋合ニテ、必勝ノ期有之間敷候、且戦ハ危事、生民ノ死生・社稷ノ存亡係リ候事ニテ、不容易儀ハ勿論ノ儀ニ候得ハ、是等ハ御下知御処置何程モ可有之、人事ヲ被極尽候上ノ義ハ、天命ノ然ラシムル処、此時急ニ至テハ、乍恐是迄ノ御厄運不及是非、一筋ニ御決断ノ外無余儀候、彼書中劫制ノ意ヲ含ミ、兩國和平ノ意押立候様ニ相見候ニ付、素ヨリ兵端我ヨリ求メテ相開キ候ニテ、曾テ不及事ニ付、随分御答カタモ彼書面ニ被応、御仕向被成可然候、就テハ先年魯西亜并其余通信相望候処、ケ様ノ御答被及候処、今更其國々新ニ通信交易イタシ候ハ、魯西亜其外他國へ被為對御信義不相立、素ヨリ時勢ノ变革有之義ニ候得共、數百年ノ祖法御改革ニ相成候段、是又御本意不相成事ニ付御断ニ被及、其書中事件ノ内、漂民恤ノ義ハ、申旨ニ寄御取扱ノ品有之旨、被仰遣方モ可然哉、此一事是迄ノ振合ニ相違ヒ、且此後數々渡来可致事ニテ、御手数數ニハ相成候得共、是等ノ義ハ少シク相緩メ被成

候テモ、却テ夷情ヲ探リ知、又彼カ長所船艦火技ノ術ヲ奪ヒ、戦ノ所用ニ相成候一助ニ有之候、右御書取之趣ニ付、愚見御達シ申候通御取計可被下候、猶又今度浦賀表ニテ書簡受取候儀、全ク一時権道ノ趣余儀モ無御座候、乍去長崎表ハ外国御引請ノ御場所、富津ハ江府第一ノ御要害ノ段ハ、天下一同相心得罷在候事ニテ、今度浦賀ニテ國書御受取、富津内海へ乗入、測量自由ニ致シ候テモ御差構無之、是カ為ニ天下ノ疑心モ生シ、且ハ海外諸蕃へ相聞へ候処モ、如何可有之儀、退去候事ニハ候得共、急御思量ヲ加ラレ、益後ノ御所置御座候様、奉仰望候事ニ御座候、以上、

月 日

(定款、簽名藩主)  
松平越中守

二 魯西亜船修理ニ付職工差出方ニ付水戸殿  
伺書

魯西亜船破損ニ付、於豆州戸田浦修復被仰付候由、右ニ付テハ、石川島大船製造へ被相掛置候者共指遣、魯西亜船修復之模様見聞為致、公辺ヨリ御貸被遣候職人へ相交為相働候ハ、向後大船製造心得ニ可相成被存

候間、不苦候ハ、水戸殿領分ヨリ石川島へ相詰居候  
船大工四五人へ士分兩人為附添、諸事手輕之仕向ニテ  
戸田浦へ被差遣度、御開濟ニ相成候ハ、於彼地誰之  
差図ヲ為得可然哉、宜御差図御座候様被致度、此段御  
自談候様被申付候、  
(相カ)

十一月廿九日

御附札

書面之通被成候様可申候、委細之義ハ、(政平、勘定奉行)石河土佐  
(近頃、勘定奉行)守・松平河内守可承合候、

### 一三 下田港魯人遭難スクーネル船新製始末

安政前後、歐州ノ各国、我邦ニ到リ、交易和親ヲ望ムコト  
虚歳ナシ、此際歐州強國連衡シテ、魯國ニ逼ル、此故ヲ以  
テ、英佛兩國軍艦ヲ四方ニ派出シ、魯國ノ船舶ヲ追捕セン  
トス、同元甲寅年七月、英國軍艦長崎ニ入津シ、書ヲ全地  
鎮台へ出シ、其理由ヲ告ク、此文ヲ訳スルニ云ク、

長崎ノ地長タル御奉行へ、英吉利イルランド・スコツ  
トランド之総名ブリタニヤ女王王ビクトリア之趣意ヲ以  
テ、衆議一致シテ、彼ノ魯西亜ヨリ歐羅巴ヲ押領スル  
手段アルヲ以テ、歐羅巴ノ為メ防禦セント欲シテ、魯

西亜國ニ、此度軍ヲ発シ候事柄トモ告知セル書面差上  
申候、此段御承知可被下候、

此軍ニ付テハ、前文ノ次第有之相始候事ニ候、数多ノ  
軍勢、既ニ合戦ニ差出申候、

魯西亜ノ諸勢策尽果、不得止事其自己ノ湊ニ引返潜マ  
リ居候、

魯西亜國ノ諸衙数箇所手ニ入レ、或ハ荒廃セシメ、將  
又魯西亜ノ内、トルコニ境界セシ所ニ於テハ、即トル  
コニ魯西亜ノ軍勢入込候ニ付、伐退候処、散々ノ敗走  
ニテ、退去ニ及候、

右之通之趣意ニ有之候間、今般決議イタシ、魯西亜ノ  
船・皆ハ勿論、其退方ノ商館ニ至ルマテ、手ニ入候欝  
滅却致シ候心得ニ候処、魯西亜國ハ、漸々其境界ヲ広  
メ、サガレン旧名カラフトヲ令攻、北蝦夷及蝦夷ノ千  
島ニモ及ホシ、順テ日本ニモ志アル事ハ的ニ顯然ノ事  
ニ候、大ブリタニヤ女王ノ趣意ニテ、海軍ノ大將トシ  
テ、私儀東方ノ海上ニ発軍ノ命有之、即此一手ニ船勢  
只今此地ニ罷出、猶右一件ノ為メ、外ニモ船勢出懸候  
義ニ候得ハ、究メテ度々日本諸港へ参リ候義可有之、  
勿論是ハ魯西亜ノ軍船、或ハ右魯西亜奪取候船有之時

ニ、是ヲ防キ候為ニ候、勿論右等ノ為メ、御当国ノ湊  
へ罷出候義モ有之候事ニテ、大ブリダニヤ国ノミノ趣  
意ニモ無之、同国一致候向キ一同ノ趣意ニ候、此儀入  
御聞置候、

右様ノ次第ニ付、余義ナキ情合御酌合セ、猶御奉行御  
勘考被下、御当国港等ニ此度ノ一件、一味ノ者罷出候  
義、御免許御座候様所希候、

右之訳合ニ御座候間、可然御含ミ、都合能キ様相整へ、  
万端御差図被成下、差支無之様相成、当長崎港ハ勿論、  
日本国領ノ港及ヒ其他ノ場所へ罷出候義、相叶候様仕  
度心願ニ御座候、

ブリタニヤ女王ノ船ウインセストル

曆数千八百五十四年九月七日<sup>甲寅</sup>七月十五日

大将スコートベイナクト

ヤーナ、スライルレーキ

此訳文ニ抛リテ見ルトキハ、歐魯雄ヲ争ヒ、互ヒニ隙ニ投  
セントテ相窺フノ勢亮然タリ、此後我邦港湾ニ抛錨スルノ  
所以ナリト知ルヘシ、

一四 外国人日本通商之企アメリカ人日本志望  
ノ事ヲ載タル公頭之造牒記

我カ日本ニ有之ル時、ヘルミル<sup>名ノ共和政治ヨリ</sup>名ノ共和政治ヨリ  
(嘉永三庚戌) 第一月八日、ワスシンクトン<sup>ノ都府</sup>ノ都府  
発シタル一翰ヲ得タリ、将又之レニ附属ノ書アリ、是  
レ即チ、彼地執事衆議ノ時ニ告ケシ説ニシテ、既ニ日  
本ノ事ニ携ハリシ議ナリ、蘭語ニ訳シ左ニ出ス、

一風聞ハ此ノ国ニ於テ、公説流布ノ具ナリ、漂民等日本  
ニ於テ、非常ノ応接ニ逢ヒシ説専ラニシテ、速ニ共和  
政治ノ軍勢ヲ江戸ニ発向シ、日本政府ヲシテ、法律正  
整ノ人民ノ制度ニ倣シメ、アメリカ通商ノ為メ、其湊  
港ヲ開キ、且ツサンフランシスコ<sup>北アメリカノ地名</sup>ノ北アメリカノ地名ヨリ、上海・  
廣東ニ通路スヘキ蒸氣船ノ為メ、松前・對馬・琉球ノ  
地ニ石炭場ヲ設ル趣向ヲ促シ、若シ其倍判ヲ「シヨ、  
グンス」<sup>乍恐公方様之御事カ</sup>方及ヒ執政拒ニライテハ、日本政府  
承伏ニ及フマテハ、其都府ニ「ボンベン」及ヒ砲丸ヲ  
放発シ、國中ノ湊港塞閉シ、恨ヲ日本ニ晴サン、此意  
頻リニ止サルヘキナリ、然ルニ法度ニ於テ、此発向全  
ク索ルニ道ナシ、衆会館ニテ得ルヤウニスヘシ、

一我等当今諸説ニ因リ、不日大ブリタニヤ・フランス兩

国日本征戦ニ加勢スヘシ、素ヨリ日本無量ノ産物ヲ保チ、土地豊饒ニシテ、交易ニ莫大ノ利益アル諸品土産スル、帝國ノ政府ヲシテ鎖國ノ法ヲ停トメ、政務ヲ法律正整シタル諸民ノ法ニ、改革セシメン趣意ナリ、思フニ日本ノ為メニ大事ナリ、汝日本ニ朋友モアラハ、告知シテ可ナランカ但是ハアメリカ人ノ文ナリ

一日本ハ独立ニシテ、一人其姓偏匿ノ質アリ、此國曆數千六百三十年(寛永七庚午)來、唐・和蘭ノ外々民ノ貿易ヲ断絶セリ、然リト雖モ、暴策或ハ時勢ニ仍テ、世上一般盛ナル貿易ノ志念ヲ以テ、其偏匿ノ意ヲ折リシノ期ニ至ラント、西方ニ於テ、フリタニヤノ盛ナル如ク、必ス一度ハ東方是レニ同シク、威ヲ振フノ國トナラン、日本語ハ文字ノ連綴數多ク、仮名ハ四十八字ヲ數フ、語音靜清ニシテ、東アジア洲他邦ノ部數ニ非サルナリ、扱日本人ハ、自國ノ文字備リ其類尤多ク、学校有之、若輩ノ男女賤貴始學ノ教示ヲ受ケ、大学館ニハ高貴ノ學術測量(天)文地理、アジア・エウロツハ洲ノ名タル國語ノ學識アル、又江戸ニ書庫アリ、世人ノ説カ此書庫ニ書冊(不明)數十五万備有トイヘリ、將日本人ハ、都テ學文・法律ニ長シタル事唐人ニ勝リ、又諸件ニ頗

ル秀ルノ性アリ、

一此國ノ貿易・航海ヲ營ムノ輩ハ、外民ト交親ノ嚴禁緩綽ナランコトヲ庶幾スルノ意甚シク、蓋シ外民ハ、当今唐・和蘭人長崎ニ來着スル而已ナリ、雖然國政法度ノ擾乱ヲ怖畏シテ、鎖國ノ法弥嚴ナリ、

一九州薩摩領鹿兒島ノ商民「ヤバキヤン」海ヲ經、琉球船上ニオヒテハユンシャン人ト貿易ス(琉球商人福州ニ於テ買入、持渡品ナリ)、其売物ニアメリカ産ノ木綿等有力也、此ノ貿易世人ノ説ニ、薩摩國主ノ免許ニ仍テ遂ルト云ヘリ、

但シ其國主日本帝族ニシテ、琉球及鹿兒島ノ大主也、扱日本政府ニ於テ禁ナリトイヘトモ、其國屬地ノ商民世人欲スル意ノ如ク、密ニ唐及ヒオロシヤ人ト貿易ス、一日本國中大都會ノ市店ニハ、農工ノ諸産物アリテ、遠近ノ人民群集スル、國中ノ商業・農作、江戸・京都・大坂・下ノ關・鹿兒島・津輕カサンカル島名・小倉・長崎・土佐・松前ノ市街ニヲイテ、商賈之品物ハ値牒ヲ作ルモアリ、又産業ヲ励ムノ法令アリ、

一大坂ハ外國産物ノ大市ナリ、此ノ街民生頗ル夥シク、右地淀川口ニアリテ、住民商業繁榮ヲ以テ、他所ニ勝

ル物ナリ、

一 要用品物・水等ノ欠乏、或ハ烈風強雨ノ時ニ当リ、鯨魚民商賈輩不得止シテ屢々日本港内ニ来リ、破船ノ患ヲ避ルコトアリ、只和蘭・唐人ニ限リテ、長崎港内ニ其館ヲ設クト、其他日本ニ来ル外民災厄ニ逢ヒ、不得止シテ其期ニ及シ者モ、忽チ困囚セラレ、而シテ番兵ノ警固有リテ、長崎ノ津ニ送ラル、其地ニ於テ、再回

圍セラレ、日々ニ与フル所ノ食物ハ、僅ニ米・魚・水而已、加之幾多無怒ノ恥ヲ受ケ、既ニ絵板ヲ踏セ、是ニ吐唾セシメリ、実ニ艱難ニ逢ヒシ我カ究民如斯暴戻ニ接トセラレ、如何シテ尺時モ思フヘケンヤ、

一 斯ル小西止精ヲ以テ、我カ政府須臾モ堪ルコトヲ得ス、日本シヨウグン前記書翰ヲ送り、以テ其政府ニ、我民鯨魚航海商通ヲ営ムモノ、為メ、患ヲ除ンコトヲ乞ヒ、暴風強雨ノ時其港内ニ来リ、危難ヲ凌クコトヲ得、欠乏諸品ヲ當時ノ価ヲ以テ購ヒ、將破船ノ時ハ、其接過

賓客之饗応アリテ、急速咬啣本ノマ吧注ノ共和政治コンシユル直ニ弁スヘシ、

一 此道理正実ノ冀望、若シシヨウグン拒ムニ於テハ、我

政府、簾直ノ旨趣ニ基キ、人倫儉適ノ誉光ヲ輝シ、日本政府ニ対シ強威ヲ振ヒ、此冀望ノ道ヲ開カン、蓋シ江戸港・松前津ノ関鎖開クニ、僅ニ隻ノブレガット艦ヲ以テ事足ルヘシ、而シテ驕奢ノ日本政府ヲシテ、速ニ我本意ニ伏従スルニ至ラシメン、

一 地理ニヨレハ日本ハ島ナリ、濠港碇場最モ良シ、住民満々トシテ、頗ル勉勵農性アリ、其人丁五千万ニ過スヘシ、国産無量ニシテ、貿易品物界際ナシ、王侯・貴人聡明英智、実ニ国民ノ博識工財志望最モ甚シ、爰ヲ以テ他アジャ人ニ比スレハ、其才遙ニ勝リ、此国偏屈之政度賢良之緩改ニ因リ、天然人作無量ノ有益ヲ以テ、共和政治ト貿易ノ因ヲ結ヒ大幸ヲ得ヘシ、蓋シ其国ノ權威及ヒ宗門ニ聊損害ナシ、

一 日本・アメリカカ両国ノ交接意ノ如ク整ヒ、唐国ニアメリカ蒸氣船通路ノ企、蝦夷都府サンガル名島ノ海門ヲ接スル松前及ヒ對馬ノ屬島フユンフユン名島ノ港ニ、石炭場ヲ設ケ、以テ成就スルニ於テハ、日本人ノ為メ其政務商業ニ易有事夥シ、而シテ日本人蒸氣船製作運用、当今發明改革シタル陸戰海軍ノ法則ヲ現在修学スヘシ、是則チ日本人ノ性強勇ナルニ因リ、其政府ヲシテ外民

ノ襲来ヲ防キ、国家ノ危難ヲ除キ、東方第一ノ水師強盛、通商繁榮ノ国タラシムル要務成ルヘシ、所々我蒸氣船來着ノ便宜ニ因リ、其政府ニ外国諸州ノ政事・商法・學術ノ告知速ナル事、咬啮吧ヨリ發スル蘭船、乍浦ヨリ來ル唐船ニ勝ルヘシ、

一使節賢良ニシテ、事ヲ遂ルニ何ノ難キコトカ有ラン、只世法頭領タルシヨグン、神領頭領タルミカドラシテ、此意ヲ明語セシムルノミニアリ、我主意日本宗門・政事ニ關係スルノ念ナク、日本ヲ和順シ、双方有益ノ貿易ヲ庶幾スル而已ニシテ、其国家城郭・商館所領ニ望ミナク、又国ヲ攻拔スル意更ニナシ、只我民日本通商ヲ免ル、ニ於テハ、其法度ヲ守ルニ甚タ慎ミ、貿易ノ運上ヲ納メ、其宗門・政事ニ關係スルヲ嚴禁シ、是レヲ日本国政府免許ヲ、速ニ共和政府ノ使節江戸ニ至リ、通商ノ条目ヲ定ムヘシ、但シ日本政府ノ其港内ニ於テ、アメリカ通商安全ヲ計ル所ニ從フヘシ、將又日本国民彼ノ港内ニ來リ、貿易スルモノアラハ、是レヲ衛護スルノ誓約ヲ立テ、日本・共和政治兩國ノ和親ヲシテ、不易ナラシメン但シ公願告  
牒ノ説ナリ

一カリホルニヤ地名・オレゴン同上ノ海岸廣大ニシテ、アメ

リカ洲益々盛ナリ、我民、印度・唐国海辺通航船弥増シ、南海ノ通商鯨魚繁榮シ、去年日本及ヒ其所領之海岸、蝦夷・オホツカ地名ノ渚、カムシカツトカ地名・ベヒリンクスタラード同上及ヒ氷海ヲ通航スルニ至レリ、此辺発向ノ船數凡千二百個、水主・人丁三万五千ニ過ヌヲ以テ、我民通航海ヲ司リ、海上ノ權柄大ブリタニヤノ手ヨリ我国ニ譲リ、治平ニシテ元ヲ掌握スルノ期アラン、

一使節日本発向ノ時、シヨグンニ贈物ヲ致スノ説アリ、左ニ記ス、

一アメリカ海岸及ヒ都府ノ地図、フレント国ヨリ遣ハシタル使節ノ事ニ拘ル政録、アタラ洋南太平洋蒸氣航路ノ誓約記録、轍道漕路マガマテイーセテレガラフ磁石ノ氣ヲ以テ事ヲノ図稿、但シオレゴン地名・カリホルニヤ同上大洋接合ニ拘ルモノナリ、アメリカ洲海岸蒸氣船ノ図識・アメリカ陸戰海軍ノ絵図、大工道具一式・治療道具一式、全完之外治内療書・究理書・測量・天文・航海・兵學書、工農之品物、草木・煙草・綿ノ種苗、農作・坑業・轍路ニ拘ハリタルアメリカノ日録、(マニ)ネフヨロク地名・ポストン同上等ノ雜記、其地商売品物值録、フ

レンデント<sup>国</sup>及ヒ長官ノ画像、但シダケウロ<sup>写真鏡ヲ以テ</sup>写シタルモノナリ、丁数一千八百四十九年（嘉永二己酉年）アメリカ属国産ノ様式マグネテイーセテレカラ一<sup>前</sup>フ<sup>記</sup>スノ<sup>二</sup>国識ナリ、

一 此数品索ニ応シ、東印度備一手ノ軍艦ヲ以テ、唐国詰ノ水師執権長崎ニ贈ルヘシ、思フニ此贈物悉ク受納スヘシ、是レ我政府ヨリ日本政府ニ贈ル、厚ク共和政治ノ地理図・語・農工商、<sup>（不明）</sup>業國中豊饒強盛、法律至整ノ告知ニシテ、日本港湊ヲアメリカ通商ノ為メ開キ、日本ニ幾許ノ益有<sup>（但記録中ノ語ナリ）</sup>ンコトヲ示サンカ為メナリ

一 黄金豊饒ノカリホルニヤ<sup>地名</sup>益々<sup>（但記録中ノ語ナリ）</sup>発興スルヲ以テ、丁数千八百五十年（嘉永三庚戌年）此品アメリカ洲ニ於テ、ベルミノ旨意ヲ專ラトシ、既ニ千八百五十一年（嘉永四辛亥年）ノ秋、日本発向ノ企有ルヲ聞ケリ、丁数千八百五十二年（嘉永五壬子年）第二月ニ、ネフヨロク<sup>地名</sup>ノ告牒ヲ左ニ記ス、

一 近来海軍ノ威勢益々盛ナルヲ以テ、政意ヲ決シ、強勇海軍アメリカ洲東方ノ海岸ニライテ、我カ商法ノ憂患防禦ノ為メ<sup>（供カ）</sup>発向スルノ説ヲモツテ、誌記スルモ夥シ、一 此発向ニ共タル海軍大勢ナル事、心得常ナラス、且ツ

我カ水師ノ將士ノ名譽提督<sup>（人名）</sup>ペルリ人、東印度備一手ノ海軍將ノ任ニ当レリ、是レ必ス趣意アラシ、或ル説ニ、此船装闘争ノ萌有ルトナリ、將タ世人一般帝王タル日本ヲ襲ノ企ト思ヘリ、我輩是ヲ伺フニ、和親ノ旨意有説ヲ聞キ甚快シ、

一 我思フ所又如斯ク万民ノ為メ志望ヲ懷キ、是ヲ遂ントノ意アル時ハ、礼義温和ヲ旨トソスヘシ、次ニ著ス所ノ共和政治司ノフイルモール<sup>（人名）</sup>ノ書翰ノ意、唯タ通商ノ事ヲ述ルノミニシ、他事更ニナク、雖然モ其勢威強シタルハ、志望ヲ遂ケ、日本ヲシテ好良ノ政府ニ伏セシムルノ計策ナリ、

一 日本ハ法律至整ノ制度ヲ知ラス、数百ノアメリカ鯨魚船、毎年サンカル<sup>（地名）</sup>ノ海門ヲ通帆シ、或ハ暴風ニ逢ヒ、其旅店ナキ海岸ニ漂着スルモノアレハ、是ヲ殺害ス、実ニ災厄ニ罹リシ船ニ慈悲ナク、港ニ至レハ、破損補理スルノ免恕アルヘキニ然ラス、反テ海上追逐ケ、是ヲ最期ニ至ラシム、期スル所為有事已ニ久シ、然シテアメリカ鯨魚益々盛ニ成ルニヨリ、其暴戻無恕ノ土地ニ至リ、艱難ニ逢フ事弥々多シ、爰ヲ以テ我政府思慮ヲ廻ラシ、日本人ヲシテ其政度ヲ外民ノ為メ、改革セ

シムル発起有リ、下文略ス、

此旨趣ヲ以テ、提督ベルリ名撰ハレ発向、惣勢ノ機量備ハラサレハ、其任ニ当リ難シ、ベルリノ行フ処屢其機量頭ハル、爰ヲ以テ、ベルリ名前ニ命令ヲ受ケテ、快然タル地中海巡行ヲ発セラレ、今万民ノ安危東方ニ於テ、アメリカ通商ノ興廢ヲ決テ、大任ニ臨メリ、是ニ供スル蒸氣船ハ、軍艦「シユクヘンネ」船・「ミスツビ」上其他「フレガツト」船・運送船等ニシテ、其「シユスクヘンネ」船記捨船成ルヘシ、一説ニ陸軍ノ予備アリト、往昔ノ憂患ヲ報ヒ、当今日本滞在スルアメリカ水主ヲ回帰セシムルニ、緊要タル兵器ヲ備フト聞ケリ、

一我土歡喜ニ絶サルハ、今政府緊要奢リヲ発スルノ期ニ臨メリ、只費ス所ハ、遠境ニ赴ク蒸氣船適用タル石炭ノミナリ、且此兵勢其手ヲ他邦ニ備タル内ヨリ出スハ、智謀ノ致ス所ナリ、

一此ノ旨趣、只アメリカ洲ノ為メ而已ニ非ス、万国諸州ノ幸福ト成ラン事、実ニ歡喜ノ至リナリ、等等聞ク所ヲ以テスルニ、提督ベルリ日本ヲシテ、往事我等ニナセシ暴戻ヲ償ハシメ、今困囚ト成テ其地ニアルアメリカ

カ人ヲ免サン為メ、当獄中ニアル外民ヲ悉ク回帰セシメシムルナリ、此輩都テ天災ニ罹リ、日本海岸ニ漂着セシモノナレハ、獄中ニ戒メラル、故ナキヲ以テナリ、將タ又提督ベルリノ志ス所、万国諸民ヲシテ、日後暴風ノ時日本港内ニ至リ、危難ヲ凌クヲ、破損ヲ補ヒ、必用ノ品物ヲ購ヒ、賓客ノ饗応アルノ証明セシメン為メ、是正シク良丸殺害セラレシト、表裏ノ差也下略

#### 一五 英吉利船渡来及魯土戦争ニ付長崎風説

イギリス船来早春渡来可致トノ儀、猶探索仕候処、ヲランダ本国ヨリカビタンヘ向ケ、使節差越候由ニテ、蒸氣船一隻去月二十八日長崎ヘ来着、右蘭船ヨリ申立候哉之趣形ノ無キ事ニモ無之、其向キニテ承リ申候、且ツ又トルコ国ハ、ヲロシヤ国ト大合戦初マリ、イギリス・フランス国ヨリ、トルコ国ノ方ヘ加勢、ヲロシヤ国ヘハヲランダ国ヨリ加勢有之候風説之由、先達テモ御座候、然ラハ此度渡来ノ蘭人ヨリ申立候ニハ、ヲロシヤ船四艘イギリス焼打ニ逢ヒ候杯トモ申ス風説ニ御座候間、実説ハ相分リ兼申候、



一六 英吉利船四艘渡来長崎奉行達書

長崎報告

(忠精 島原藩主)

松平主殿頭長崎詰ノ家来ヨリ、去ル十五日呼出シ、

長崎奉行ニテ相達シ、昨二十五日此表主殿頭屋敷へ

飛脚来着ノ書面、

長崎奉行ヨリ達書之写

今十五日異国船四艘渡来ニ付、相糺シ候処、イギリス  
国ノ船ニテ、伊王崎内手へ汐繋リ致シ居、奉行へノ書  
翰差出シ、疑ハシキ儀モ相聞キ不申候、江戸へノ注進  
ハ明日可申上候、

閏七月十五日

右之趣、長崎奉行水野筑後守ヨリ御届并書翰共、今日

致到着候、

十七 米艦下田港ニ死人ヲ乗セ来泊ノ報

アメリカ船一隻下田港へ渡来、死人ヲ乗リ組セ参リ候  
由、下田奉行ヨリ只今申上ニ相成候由、委細ノ儀ハ相  
分リ不申候、

閏七月二十六日

十八 和蘭軍艦将官ノ差出シタル風説書

此度渡来ノ蒸氣船主役ヨリ風聞ノ趣ニ付、カピタン

承リ申上候横文字和解

寅七月晦日

長崎奉行

(忠篤)  
水野筑後守様へ

此度渡来ノ阿蘭陀蒸氣船スームピング<sub>船</sub>ヲ以テ、別段  
風説申上候程ノ儀ハ無之、乍去此度渡来之節石炭求候  
為メ、八日程唐国香港ニ滞船仕候節、於同所右船將次官  
グ、フアヒユス<sub>名</sub>人承候儀有之、則左之通奉入御聞候、

第一、唐国一揆ノ戦争弥相募リ申候、

第二、於香港承ハリ候ニハ、曆数千八百五十五年<sub>来卯年</sub>  
<sub>ニ相当</sub>

<sub>リ申</sub>日本へ向ケ、エケレス国ノ政府ヨリ使節差越候様、  
決定仕候趣ニ御座候、

第三、唐国香港ニハ、魯西亞船一切罷在不申候、

右之通謹テ奉申上候、

カピタン

(ル脱カ)  
トシクル、キユシユス

右之通和解差上申候、已上、

寅七月晦日

西 吉兵衛印  
榎林榮右衛門印  
〔榮七郎カ〕

一九 同〔和蘭軍艦將官ノ差出シタル風説書〕

長崎御奉行所御筋々へノ封書横文字和解

寅閏七月朔日

内密

長崎御奉行

水野筑後守様へ

阿陀蘭カヒタン私儀謹テ申上候儀ニ付有之、則左之

通御座候、

一 船將次官グ、フアピユス名人指揮ニテ、和蘭国ノ蒸氣船ス

トム〔カ〕ヒング名船儀、和蘭国王ノ命ニテ咬嚼吧都督職ヲ以

テ申付ケ、此度長崎へ差越シ候趣意ハ、先達テ私儀ヨ

リ当六月六日申上候通り之儀ニテ、則チ其為メ此度渡

来仕候儀ニ御座候間、御含置被下可然様奉希上候、

一 和蘭国王父ノ儀モ、日本国帝ニ対シ通信ノ徵ヲ顕シ、

日本帝家ノ徳沢ニ浴セント欲シテ、申立候事共モ有之、

右父代同様弥以テ不相替様有之度、当和蘭国王モ奉希

候、

一 日本高政府ニライテ、既ニ御承知ニ相成リ居候事ト奉

存候得トモ、申上候ハ、近世ノ發明ニテ、最大弁理ノ工

風ヲ以テ、今專ハラ歐羅巴・亜米利加既ニ印度マデモ、

頻リニ合図ノ趣向出来、遠隔ノ国土モ恰カモナキカ如

キ工合ニ、即時ニ事ヲ通シ、至極駈引勝手宜敷相成候

事ニ御座候、

一 右發明ノ儀ニ付テハ、追々ノ別段風説ニ既ニ申上置候

通ノ儀ニテ、海底ヲ経、遠隔ノ国々へ急速ニ事通シ候

事相叶候儀ニ御座候、

一 エレキテルマグネテイセテレガラーフ

此發明ノ物ト申候ハ、則エレキトロ、マグネテイセ、

テレガラーフ合図ノ品々ノ名ニ御座候、

一 和蘭国王此珍敷發明、無量ノ弁利ト奉存候ニ付、日本

惣国中ノ御為ニモ相成様仕度、日本政府ニライテモ此

發明ヲ以テ、惣国民ノ幸福ノ為メ、御用ヒニ相成様可

有御座哉ニ奉存候、

一 右之次第ニ御座候間、右エレキトロ、マグネテイーセ、

テレガラーフヲ日本国帝ニ奉献度奉存候、

一 右之仕合ニ御座候間、和蘭国王ノ命ヲ下シ、阿陀蘭カ

ヒタンヲ以テ、右エレキトロ、マグネテイーセ、テレ  
ガラーフラ、日本国帝ニ和蘭王ノ趣意ヲ述ベ、献上仕候  
様、申付越候儀ニ御座候、

一右之通彼方ヨリ申付越候儀ニ付、何卒夫々御手教被成  
下、言上被成下候様奉願候、猶ホ右ニ付申上候儀左之  
通御座候、

船將次官〔ア脱カ〕グ、フビユス〔ア脱カ〕人事、和蘭国王蒸氣船スームヒ

ング〔船号〕ヲ以テ、右エレキトロ、マグネテイーセ、テ

レカラーフラ爰許迄持届候、右一式十八箱ニ入付有  
之候、尚右組立方其外書記附属仕候、尚和蘭国王ウ  
イルレムデデル〔人名〕チ名ノ趣意ヲ奉述、阿蘭陀カビタン

ヨリ日本国帝ニ献上仕候様、申付越候義ニ御座候、

一右之趣彼国ヨリ申付越候儀ニ付、何卒可然様御合被成  
下、右エレキトロ、マグネテイーセ、テレガラーフ日  
本国高政府ニライテ、御用弁ニ相立候様奉希候、

右之品ハ和蘭国杯ニテハ、此筈明天幸ト頻リニ調宝仕  
候物ニ御座候間、於当国モ何卒御為ニ相成候様仕度奉  
存候、

右条々謹テ奉申上候、

カビタン

右之通和解差上申候、以上、

寅閏七月晦日〔朔カ〕

ト〔クル脱カ〕ン、キユルシユス

西 吉兵衛〔印〕

榎林榮七郎〔印〕  
〔大日本古文書〔幕末外国關係文書〕にて校訂〕

二〇 同〔和蘭軍艦將官ノ差出シタル風説書〕

長崎御奉行所へ封書横文字和解

寅七月朔日〔朔カ〕

内密

長崎御奉行

水野筑後守様へ

昨日大通辞西吉兵衛殿ヲ以、御問合ニ相成候一件、  
左ニ御答申上候、

一和蘭国有之蒸氣船スームピング〔船号〕主役船將次官〔フ  
アビユスカ〕グ、フ

エス儀、和蘭国ノ命ヲ請候ハ、自然日本高政府ニテ長  
崎港ニ当蒸氣船罷在候上、日本ノ御為ニ相成候義ニ付、  
御伝申上候様之儀、御沙汰ニモ相成候ハ、可相成丈  
心ヲ尽シ、御用相勤候様申付リ居申候、

右之次第ニ御座候間、右主役ヨリ私儀ニ申聞、何致御

伝達申上候様之儀ニ候ハ、夫等之事ニ携リ候日本之御士・御役人・御兵卒・細工人・職人・航海之輩、其外右等之事ニ携リ候人物、長崎御奉行ヨリ御差図ニ相成候ハ、其御方人々江彼是伝授仕、船打建方、歐羅巴船指揮之工合、蒸氣仕掛方、鉄製鍛軋盤之工合、大小砲ヲ以調練等、逸々口伝申度奉存候、右之段被為聞召分、功者之通辞衆相応之人数右懸リニ相成候ハ、必都合能主役及ヒ其他士官、或ハ乗組人数之内ヨリ御伝申上候ニ付、弁利能可有之奉存候、

右之趣謹テ奉申上候、

カヒタン

トシクル、キユルシユス

右之通和解差上申候、以上、

寅閏七月朔日

西 吉兵衛印

檜林榮七郎印

(大日本古文書(幕末外国關係文書)にて校訂)

〔表紙〕

齊彬公史料

市來四郎編  
安政元年

目錄

正月三日齊彬公水戸侯ニ御贈翰

綿火薬ヲ贈ル件

反射炉試験ノ件

大船製造ノ件

正月二十四日齊彬公水戸侯ニ御贈翰

綿火薬製造ノ件

蓮根砲及六挺砲ヲ贈ル件

琉球ニ於テ貿易嫌疑ノ件

三月十九日齊彬公水戸侯ニ御贈翰

亞船來泊下田ノ地所ヲ貸渡シタルヤニ付意見

琉球ノ外人ニ関シ家老座記録供覽ノ件

六挺銃ヲ贈ル件

四月十二日齊彬公水戸侯ニ御贈翰

異船來泊ニ付林大學頭処置ニ対スル意見并ニ琉球ニ

関スル件

大砲雛形製造ノ件

皇居炎上御節儉ニ付意見

佐久間修理挙動ノ件

四月二十七日齊彬公水戸侯ニ御贈翰

琉球及天璋院殿縁組ノ件

下田滯在外人挙動ノ件

越前侯御帰国云々ノ件

鑄鉄ニ付竹下清右衛門差遣及肥前藩力武彌右衛門鑄

鉄驗評ノ件

琉大砲船製造ノ件

御所向御加費ノ件

海防意見提出云々ノ件

五月八日水戸侯齊彬公ニ御答翰

鑄鉄ニ付竹下清右衛門招聘ノ件

琉球ニ関スル記録返戻ノ件

〔五月十二日ノ號〕  
六月二十三日齊彬公水戸侯ニ御贈翰

鑄鉄ニ付竹下清右衛門差遣ノ件

琉球ニ関スル記録水戸侯ヨリ返戻ノ件

日本軍船製造并ニ琉球ニ関シ談話ノ件

〔二百三十ノ號〕  
六月十三日水戸侯齊彬公ニ御答翰

琉球ニ関スル記録返戻及阿部侯内意云々ノ件

四月十三日齊彬公尾張侯ニ御贈翰

皇居炎上御造營ノ件

越前侯御帰国差止云々ノ件

阿部・牧野両侯引入云々ノ件

七月二十三日齊彬公阿部侯ニ御贈翰

皇居御造營ノ件

門閥家ノ奨励訓示書

洋式砲術軍備之根本ニ定メラル旨御親書

海陸軍拡張ニ付節儉並風俗矯正ノ御親書

砲術操練勉勵御褒詞布達

〔脱カ〕  
〔島津齊彬手製茶碗ボムベン（白砲）并題函和歌〕

〔脱カ〕  
〔高島秋帆（四郎太夫）カ爆弾擬似ノ茶釜ノ図ニ題歌〕

考証 市來廣貫建言

田原・磯永・市來ノ三名ニ砲術指南役ヲ命シ玉フ  
洋式騎兵創設

諸士風俗矯正及ヒ學問ノ方針ヲ訓諭シ玉フ

出水・高尾野二郷ニ水田開墾ヲ命シ玉フ

齊彬公御東上ノ途ニ米艦入相ノ報ニ接ス

改元詔

梵鐘大小砲銃鑄換詔

齊彬公島津豊後へ賜書第一

全上第二

参考 福岡侯川路左衛門尉へ与ル書

参考 宇宿彦右衛門書牘（江戸ノ形勢）

二 正月三日 齊彬公水戸侯ニ御贈翰

綿火薬ヲ贈ル件

反射炉試験ノ件

大船製造ノ件

新春ノ御慶目出度奉申上候、先以益御機嫌能被遊御超

歳、恐悦御儀奉存上候、年始ノ御祝儀御内々奉申上度、

如斯御座候、恐惶謹言、

正月三日

松平薩摩守

齊彬花押

上

猶々、余寒折角被遊御厭候様奉存候、以上

〔別紙〕

一 別紙申上候、綿葉 (シキートカツトンスハシキトホールト唱フ) モ弥宜敷様子ニ相成候、今日差上候考ノ処、少々乾兼候間、後日差上候様可仕候 (化学書中ニ付数十回ノ試験ヲ經テ成功ス)

一 「スチールチースヘルド、アルチルレリー」之内ニ、

五挺ツ、キ「モルチール」相見得申候間、当時色々工夫申付置候反射炉モ、此間鳥渡試モ為仕候処、鉄忽チ溶解仕候事ニ御座候、高竈モ近々成就仕候間、其上鑄立可仕ト奉存候 (反射炉・高竈建設及試験ノ事実ハ、嘉永四年ノ部ニ詳記ス)

一 大船造立、諸家ヨリ差出候事ニ御座候ヤ、当惑仕候向多キヤニ承リ候間、加様ニ製造ト申儀被仰渡候ハ、早目ニ出来可申哉ト乍恐奉存候間、御内々申上候、内々ハ方々ヨリ如何製造ト申義、問合モ有之候得共、未タ御差図無之間、不相知段、返答モ申遣シ候事ニ御座

候、極御内々奉申上候、以上、

正月三日

(願聖公年譜ならびに照國公文書にて校訂)

二二 正月二十四日 齊彬公水戸侯ニ御贈翰 (嘉

永六年)

綿火薬製造ノ件

蓮根砲及六挺砲ヲ贈ル件

琉球ニ於テ貿易嫌疑ノ件

○この文書は、「鹿児島史料齊彬公史料」第一巻の第四六四号文書の嘉永六年正月二十四日付島津齊彬書翰と重複により略す。

二三 三月十九日 齊彬公水戸侯ニ御贈翰

亞船来泊下田ノ地所ヲ貸渡シタルヤニ付意見

琉球ノ外人ニ関シ家老座記録供覧ノ件

六挺銃ヲ贈ル件

insin

一 筆啓上仕候、先以益御機嫌能被遊御座、恐悦奉存候、然ハ此節參勤ノ御礼モ無滞相濟、難有奉存候、參府仕候ニ付、御機嫌伺申上度、御内々奉申上候、且又国産錫 (當時、谷山産ノ錫、幕府其他各藩大砲鑄造ノ料ニ所望セリ、其事実ハ鉾山御拡張ノ部ニ記ス) 呈書ノ印迄進上仕候、近日罷出万々可奉申上候、恐惶頓首、

三月十九日

薩摩守

猶々不順ノ氣時、折角御厭被遊候様奉存候、以上、

〔別紙〕

別啓仕候、巫奴ノ義未タ不残退帆不仕候ヨシ、世評ニ  
ハ下田ニ地所拝借被仰付候哉ニ専ラ申候、乍恐余リ寛  
ニ過候御所置如何ノ事カト恐入奉存候、乍然過去ノ儀  
ハ致カタモ無御座候得共、以来ノ御所置誠ニ一大事ノ  
御場合、弥武備嚴重ノ命令急度不被仰出候テハ、益人  
氣衰弊ノ基、乍恐

御国威モ是迄ト奉歎息候、何卒御英断ノ御所置偏ニ奉  
希候、市ケ谷(尾州候)モ御参府ノ義、此機会ヲ失ヒ候  
テハ、猶更以ノ外ト奉存候間、宜敷御明断ノ程、乍恐  
奉願上候、

一 琉球ノ義、以安道(城坊主、〔柳川カ〕安道)申上候、当公(水戸当公)へ相願候処、御承知ニ相成難有奉存候、両三日  
中ニ安道ヨリ細事可申上候、最家老方帳面ノ尽入御覽  
ニ候間、御覽済ニ候得ハ御下ケ奉願候、十ヶ年程ノ事  
ユヘ、一同ニハ不差上、四五度ニ差上候様可仕候、右  
ニテ思召モ相願度、御不審ノ義ハ何ケ度モ御尋被下候  
様奉希候、尤閣老へモ不申達分(琉球外国処分中、幕府ハ

表面ニ届出サル事情モ寡カラサルヲ云フ)迄モ無残差出候  
間、宜敷御含奉願上候、

一 御目通ノ義モ、近日中連阿彌迄相願候様可仕候間、何  
卒御序ノ節、寛々御目通奉願度候、此段御内々奉申上  
候、猶委細安道ヨリ可申上候、

一 六挺砲漸々出来候間、乍不出来進上仕候(六挺銃進呈ノ  
事実ハ、集成館ノ条ニ詳記ス)、是ハ四五年跡、中山へゼ  
ルマニヤ船渡来ノ節、薪水等遣候返礼ニ国元(王カ)へ贈物ノ  
内ニ御座候テ、中山王ヨリ内々到来仕候筒ノ写ニ御座  
候、

一 其外申上度義モ候得共、御目通ノ節、万事申上度奉存  
候、以上、

三月十九日

〔三行〕

右ニ対シ水戸侯ノ御返翰

芳翰両通披見、乍略義一決ニテ及御答候、先以今般御  
道中御恙ナク御参府、且御礼無滞御済、重々目出度存  
候、

一 墨夷御所置云々来論一々御最ニ御座候、愚老モ海防御  
用ニテ、登營ノ義ハ御免相願、此節引籠居候間、今更



御細答不申候、

廟堂ノ事ハ姑クサン置、大小名ニ一家ツ、モ、正論多ク相成候得ハ、詰リ 神国ノ正気振ヒ可申候間、貴兄 杯為天下御努力相祈申候、

一 琉球ノ事、安道ヲ以御示ニ可相成旨、委曲承知イタシ候、帳面等一覽イタシ候迎モ、格別ノ了管<sup>(備カ)</sup>モ有之間敷候得共、イッレ一覽可致候、

一 弊館へ御出ノ事承知イタシ候処、前件願ノ趣、イマタ御沙汰無之、引籠中ハ拜面モ遠慮イタシ候間、イッレ是ヨリ御左右可申候、

一 六挺銃御投惠不堪感謝候、先年拝受ノ八挺銃一同永ク珍藏可致候、過日ハ南無阿彌へ御直答ノ趣、段々入御念候御事、御厚意不浅令感荷候、先ハ御答迄、草々也、

三月念三日

薩州殿

水戸隠士

錫三百斤・鯛一折目録ニテサシ出シ、錫ハ明朝相廻候由申来候故、考候処、昨年阿部勢州ヨリ、古法眼元信ノ掛物<sup>(禮)</sup>但出来モ至テ美事贈リ候ヲ返シ候へハ、比度ノ錫モ、

當時天下直段甚タシク引上リ、品少キ折柄、且ハ海防御用未御免ニモ不相成、旁賄賂臭ク受候モ如何故早速断申候処、何共恐入候、左候ハ任仰相止可申、全ク近頃領分ヨリ多出獻上モ致候処、右献残ニ付、指上候事ニ候、又御用ノ節ハ、イッ成共被仰越候様云々申聞ヨシ、南無阿彌ヨリ申出候ニ付、如本文申遣候、

〔島津家書翰集ならびに照國公文書にて校訂〕

二四 四月十二日 齊彬公水戸侯ニ御贈翰

異船来泊ニ付林大學頭処置ニ対スル意見并ニ

琉球ニ関スル件

大砲雛形製造ノ件

皇居炎上御節儉ニ付意見

佐久間修理挙動ノ件

京地炎上誠ニ驚入、奉言語絶候、私方ニモ、

近衛殿ハンメ御類焼モ無之候、先安心ニハ御座候得共、

誠ニ以恐入候次第ニ奉存候、

一 昨日異船沙汰有之候処、亜船ノ内下田出帆ノ船ノヨシ、

只今承り候、乍然其内ニハ魯船渡来可仕ト奉存候、先

ハ御請奉申上候、頓首、

四月十二日

薩摩守

極密被仰下候趣奉畏候、又々京地御大變（御所炎上）ト申何トモ申上様モ無之、恐入候事ニ御座候、昨今承候得ハ、又々異船モ相見得候ヨシニ御座候、林大（林大學頭）ノ所置、誠ニ天下ノ罪人ト奉存候、是迄委曲ノ義不承候処、八日ニ筒井（紀伊守）事參リ、辰（阿部）ヨリ申聞候様ニトノ事ニテ、応接ノ大意モ承知仕、誠ニ驚入候次第ニ奉存候、何トモ申様モ無之候間、過去ハ致方モ無之候間、後來ノ御手当心ユルミ無之、諸人進立候様御所置專一ト存候間、辰ヘモ可申上旨返答仕候、定テ魯吏<sup>（奥カ）</sup>ヘモ前条ノ趣ニテハ、相濟セノ外ハ無之カト、扱々残念ニ奉存候、如命イキリス・フランソスモ多分今明年ニハ可參、先頃差上候書面ノ通ニ御座候間、無相違渡來可仕ト奉存候、申上候テモ無甲斐事ナカラモ、家督後時々琉球ノ義、内々帳面モ阿闍ヘ為心得申上置候得共、是迄ハ頼ト打捨ニ相成居申候、此間差上候書面道中ヨリ差出候節、始テ心附候哉、丁寧ニ返事遣、尚又以後無手披申上候様ニトノ事ニテ御座候、今少シ

早ク心付候得ハ、是程迄ニハ相成間敷処、扱々残念ニ奉存候、当地此次第二相成候ニ付テハ、琉球以後如何可相成哉、乍小国モ是迄兎哉角ト申凌キ、交易等モ不仕処、以後ハ異人別テ押付ノ義可有之哉ト、甚々残念ニモ有之、且ハ琉球ヘ此節ノ御所置為候モ、実ハ残念至極ニ奉存候、何分委細申上候テ、尊慮モ何度候得共、筆紙ニ申上兼候間、如尊命、湯安ヲ以テ申上候様可仕候、

一 大砲雛形（此ノ製式今ヤ知ルヲ得ス）ノ義モ、難有奉存候、昨夜龍土（伊達宗城公）ヨリモ申遣候、此節ノ品未タ手ニ入不申候、兩人ニテ雛形一ツ、拵候筈ニテ、ボンベノ方<sup>（昨カ）</sup>ハ此夜私方ヘ相廻シ申候、

一 湯（湯川安道）ノ事云々、難有奉存候、急ハ不仕候間、何時迄モ御留ニテ、御返シ奉願候、

一 京地ノ義ニ付、薄々承候趣モ御座候間、愚存御内々左ニ申上候、

一 先比伏見通行、近衛殿ヘ參殿モ仕候事ニテ、彼地ニテ承知仕候得ハ、五ケ年御節儉被仰出候付テハ、於御所モ敵數御儉約ニテ、年々兩三度ノ乱舞（舞楽ノ通唱、乱舞ハサツト唱フ）迄モ御止メニ相成、其外別テ御不自

由(御用途不足ヲ云フ)ノ様ニモ相伺候、右ハ全ク關東御存ノ義ニモ不被為在、全ク御附(所司代・其他幕吏ヲ云フ)ノ面々御奉公振ニ、嚴重ニ仕候哉ト、専ラ伝承仕候、右ノ通海岸御手当ニ付、格別ノ御節儉被仰出候モ、当前ノ事ニハ御座候得共、御所向ノ義ハ、右様ニ不相成候テモ宜敷哉ニモ奉存候、其上タトヘ格別御儉約ニ相成候トモ、御手当ノ御一助ニ相成候程ノ事ハ、御座有間敷哉ニ乍恐奉存候、其上京地ノ人氣ニモ掛リ、諸国ヘノ響合モ有之、恐多キ事ニ候得共、御不徳(將軍家)ノ基ヒニモ有之候哉ト奉存候、此節ノ天災モ、右様ノ処ヨリ、却テ災ヲ生シ候道理カトモ奉存候間、甚恐入候何卒(共脱カ)

神祖ノ御規定ノ通ニ、被成進 御造宮、万事御不自由無之御所置御座候ハ、益天下大平ノ基カト奉存候、加様ノ義申上恐入候得共、御内々奉申上候、一大隅(齊興公)ヘ御伝言難有奉存候、早速申聞候様可仕候、當時ハ高輪住居ニテ、御使等頂キ候テモ、一々申聞ハ不仕、先ッ安心ノ姿ニ御座候、厚思召ノ義難有奉存候、一佐久間(修理)ノ義、実ニ可惜事ニ候得共、鹿忽ノ振舞

ハ恐入候事ニ奉存候、憤激ノ余リ、前後ノ弁シ無之取計ト、実ハ可敷事ニ御座候、(佐久間米艦ニ乗込マムトシテ就ラス、事別卷ニ記スカ如シ)

一 其外色々申上候義モ御座候、近日中以安(湯川安道)申上候様可仕候、先ハ御別紙ノ御請迄、早々奉申上候、頓首再拜、

卯月十二日

(島津家書翰集ならびに照田公文書にて校訂)

二五 四月二十七日 齊彬公水戸侯ニ御贈翰

琉球及天璋院殿縁組ノ件

下田滯在外人挙動ノ件

越前侯御帰国云々ノ件

鑄鉄ニ付竹下清右衛門差遣及肥前藩力武彌右

衛門鑄鉄驗評ノ件

琉大砲船製造ノ件

御所向御加費ノ件

海防意見提出云々ノ件

(二五の一)  
書添奉申上候(御本書逸ス)、此間以安道御内々琉球一条申上候処、御懇ノ御返答相同難有奉存候、御覽濟追々引替差上候様可仕候、且又以同人御縁辺一条(天璋院

殿〔モカカ〕ノ儀申上候処、是又御承知ノ旨、委細同人ヨリ相伺、

重疊難有奉存候、願通相調候得共〔ハカ〕、領國中琉球迄モ人

氣格別ニ相成、殊ニ浮説ノ憂モ少ク、十分ニ手当モ出

来、御奉公心置ナク相勤度心願ニ御座候間、猶又宜敷

御勘考奉願上候、御礼旁此段奉申上候、

一 下田モ〔米国人下田ニ於テ、自由働キ云々〕余リ自由相働

候ヨシニテ、鵜殿〔長船〕（民部少輔）ハシメモ罷越候ヨシ、急

度規定相立候様致度事ト奉存候、

一 越前守〔福井公〕御差止メ〔御帰国御差停メヲ云〕ノ義、

不相調発足ノ儀、甚タ残念至極ニ奉存候、

一 老若御料理御断焼飯ニ相成候由、御台所人恨居候由ニ

承リ候、成程最ノ儀ニハ御座候得共、左様ノ小事斗リ

ノ評議ニテハ、中々以天下ノ人氣振興ハ無覚束、実ニ

歎息ノ義ト奉存候〔幕吏ノ私怨甚シキ事実、前後巻各部ニ記スカ如シ〕

一家来竹下清右衛門ノ事、今日表向様子申上候、此上思

召次第差出候様可仕候、段々当人江モ承候処、鑄鉄ノ

義、実ニ不案内ノ者ニ御座候間、其思召ニ奉願候、且

又肥前家来ノ名前力武彌右衛門〔リキタケ〕（製鉄者）、右ノ者最初

ヨリ反射炉〔相係リ〕へ相係リ、今日差上候玉〔集成館ニ於テ、反

射炉製彈雜紀ニ詳記ス〕モ、此間為見候処、火度至極宜敷

ト申聞候、此モノニ御座候得ハ、急度御用立可申ト奉

存候、当秋迄ハ在府仕候様子、殊ニ寄り候へハ、春迄

モ在府可仕哉、未タ治定不致段奉申候、

一 肥前守〔佐賀侯〕へ御懇ノ義〔何等ノ事カ〕難有奉存候、

先ツ私ヨリ内々所存承ニ遣候様ニ可仕候、先ハ要用申

上度、如斯ニ御座候、頓首、

四月廿七日

猶々、琉大砲船モ、当月三日半方出来候テ、船浮シ

申候、是ヨリ上ノ方〔甲板ノ通唱〕仕立ニ取掛候段申

遣候、一体右船相願候者、日本船ニテ願達不仕ユへ、

相願候処、此節ノ様子ニテハ、一艘ニテモ日本船早

ク取立度存候間、帆前化粧ノ処斗リニテ日本船伺濟

〔大船製造御願書〕〔タダ〕ノ如シ通ニ相成候間、近日辰ノ

口へ承リ候テ、日本船ノ方へ仕度ト奉存候、此段モ

申上置候、右通ニ相成候へハ、来春迄ニハ江戸海ニ

取寄候儀モ、可相叶哉ト奉存候、猶追々様子可申上

候、以上、

猶又相伺候、先比申上候  
御所向御手厚ニトノ事、辰ノ口機嫌見斗、程ヨク申

聞候テハ如何可有之哉、夫レモ無益ト思召候ハ、  
差扣可申、晦日比ニ可罷越ト奉存候間、極内々尊慮  
奉伺候、以上、

猶々以來海防ノ義申出可然哉、是又御内慮奉伺候、  
以上、

廿七日

(順聖公年譜ならびに照國公文書にて校訂)

(11561)

右ニ対シ水戸侯ノ御返翰

御本文・御別紙共披閱、先以テ無御障大賀、鑄鉄丸并  
火焔御投惠、毎度御厚意感謝々々、御書中縷々御申越  
ノ趣、逐一謹承致候、事濟候義ハ文略イタシ候、

一御所云々ノ儀、拙老モ心付有之、炎上ト承リ候ト直様  
内々 京地ノ方、探索イタシ置候道モ有之候、小田原・  
濱松ノ時代ヨリ今ニ至リ候迄、建白致候義モ、色々有  
之候、尚此度モ又建白致候事ニ候、

貴兄御建白可被成哉否ノ趣、右ハ外ノ儀ト違ヒ、御造  
營早速取掛リ、以前ヨリヨロシクハ出来候共、御龜末  
ニ出来候事ハ、決シテ不相濟ト老中始申居候ヨシニ承  
候、御承知ノ通り、京師ノ事容易ニ建白致シ候ヘハ、  
嫌疑有之候所、御建白ノ被成方ニテ嫌疑モ有之間敷、

早ク申サバ、 京師ヲ御手厚ニ被遊候カ、却テ幕府ノ  
為ト申所ヲ専ラニ御論シノ方欤、海防等ノ事モ、老中  
ヲ向フニ不被成、御為ノ廉ヲ以、誠実ニ御論シノ方可  
然カ、シカシ御尤至極トハ可申候ヘ共、事業ニ施シ候  
否ヤハ御請合申兼候、急キ御答迄、草々也、

四月念八当賀

水隠士

薩州殿

御報

(順聖公年譜ならびに照國公文書にて校訂)

二六 五月八日 水戸侯齊彬公ニ御答翰

鑄鉄ニ付竹下清右衛門招聘ノ件  
琉球ニ関スル記録返戻ノ件

不順ノ時氣愈御建勝雀躍イタシ候、扱去月中芳翰御惠  
投ノ処、其節ハ晦日閣老ヘ御逢云々ノ事、当用故其事  
ノミ草々及御答候処、追テ考候ヘハ、竹下清ノ事、同  
朋ヲ以度々御懸合申候ノミナラス、御書中委細ニ御申  
聞ノ儀ヲ、更ニ御挨拶不申段等閑御海怒ニイタシ度、  
竹下ニテハ御不安心御謙退ハ御最ニ候ヘ共、元來竹下  
ノ食客ニ南部ノ者有之、此者元取故聊不及御心配候、

肥前家来ノ儀、御心添忝存候、先ッ試候テ仕損候ハ、肥前へ頼候方ト存候、竹下ハ十三日発足、水戸へ参候様為御申付ニ致度、此段草々也、

五月八日

水隠士

薩州殿

二白、琉球ノ御記録トクニ御返牒可致ノ処、少々ハ付札ニテモイタシ候テト存候、(行カ)大ニ延引ノ内、湯川ヨリ家来迄御サイソク御尤ニ存候、今以日々執筆モノ多ク候へ共、四五日中少々モ付札御返シ可申候、

不尽、

(順聖公年譜ならびに照園公文書にて校訂)

二七 六月二十三日 齊彬公水戸侯ニ御贈翰

(五月十二日の誤)

鑄鉄ニ付竹下清右衛門差遣ノ件

琉球ニ関スル記録水戸侯ヨリ返戻ノ件

日本軍船製造并ニ琉球ニ関シ談話ノ件

過日ハ尊書難有奉拜見候、日々不同ノ氣候御座候処、益御機嫌能被遊御座、恐悦至極奉存候、然ハ竹下清右衛門ノ儀細々被仰下、難有奉存候、兼テ申上候通、反射炉ノ事、極不案内ニ候間、御役ニ立候儀無覚束、乍

然十分ニ被召仕候様奉希候、此間能都合御座候間、肥前家来力武へ清右衛門遣シ、初テ面會為仕、書外仕覚ノ儀、一通リ相尋、以後不審ノ処、文通ニテ弁別仕候様申談為仕候間、此段モ申上置候、火度ノ工合第一ノ趣ニ御座候、

一 御別紙以安道云々ノ義ハ、御一条ノ事ニテ、段々厚キ思召ニテ御取扱被下候、右ノ義御沙汰相伺、難有奉存候、海岸等ノ事ハ何モ不申上候、右之通ニ御座候間、尚又可然御含被下置候様奉願上候、

一 琉球書面ノ儀云々拝承仕、難有奉存候、辰年ノ書面(弘化元甲辰三月、琉球ニ佛国軍艦来リ、同国人在留等ノ事実書類)ハ、何時ニテモ宜敷候得共、当今ノ分ハ御用濟相成候ハ、早目ニ御下ケ奉願度候、辰ノロヨリ、近々琉球ノ儀色々御相談有之ヨシニ承リ候間、其節殊ニ寄持参可仕為ニ御座候、辰ヨリ相談ノ儀モ相知候ハ、御内々可奉申上候、

一 晦日ニ辰対面ハ断候テ、四日対面仕候、大砲船ノ義相談仕候外ニ、バツテイラ三艘当御地へ取寄度趣等ノ用向ニテ御座候、只今半方成就ノ琉球船ヲ御免ニモ相成候間、日本軍船ニ取立度トノ事申談、左候へハ当年中

ニハ当御地へモ、廻船可仕トノ事申談置、伺書差出候事ニ御座候、琉砲船ハ跡へ相廻シ候考ノ趣モ申上候、

其節少々炎上ノ話ニ相成候処、御大鼓ニ相成候ニ付、

立ナカラ近々琉球ノ一条色々相談有之候間、退出後寛

々罷越候様ニトノ事ニ御座候、夫故心底モ未タ不申述

候、夕刻逢ニ候得ハ、寛々對話相調候間、其節万事及

示談ニ候様可仕ト奉存候、

一御登城モ先ツ相止候ヨシ、御安心ノ段拜承仕候、乍然

此後頓ト見当無之、当惑至極奉存候、毎々遠州等打寄、

歎息仕候事ニ御座候、阿・牧モ先當時ノ処ニテハ、引

候心底モ無之様子ニ内々承知仕候、乍去此光景ニテハ、

三五年中ニ御全備ノ御手当無寛束儀ト恐入奉存候、近

々御台場 上覧御座候由、先々難有事ニ御座候、何卒

人氣振興ノ御処置有御座度奉存上候、先ハ御請迄申上

度、早々如此ニ御座候、恐惶頓首、

五月十二日

薩摩守

上

御請

猶々、時氣折角被遊御厭候様奉存上候、以上、

三白、乍恐掛モノニ御賛ノ儀奉願上度、委細運阿彌迄申上候事ニ御座候、以上、

(二十三日の號)

二八 六月十三日 水戸侯齊彬公ニ御答翰

琉球ニ関スル記録返戻及阿部侯内意云々ノ件

去月ノ朶雲其節披誦イタシ候、事済候儀故、御即答モ

不申候へ共、過日ハ琉球一条留記ノ内、当春ノ分<sup>(ワカ)</sup>コザ

〳〵為御写御廻シニ相成、御厚意不淺忝存候、將又琉

球一条阿闍ヨリ内意ノ事ニ付、御心配ノ事、亦賢息ノ

御事、段々承知、御心事察入申、琉ノ事ハイツレ阿ヨ

リ能承リ不申内ハ、碇ト難及御挨拶候、賢息ノ事、御

近縁等ニモ候ハ、時々面晤乍不及御力ニモ可相成候

へ共、足下サへ面晤遠慮イタシ候訳故、不及力候へ共、

及候丈ノ儀ハ何分相合ミ可申候、蒸暑御厭、御自愛專

一ニ祈候也、

夏六念三

水隠士

薩州殿

御報

諸葛ノ愚賛実ニ責ヲ塞キ候迄ニ供御一笑候、孔明ノ

賛欵、楠ノ賛欵ト疑ヒモ可有之、阿々、

(鳥津家書翰集ならびに瀧澤史料吉彬公にて校訂)

二九 四月十三日 齊彬八公尾張侯ニ御贈翰

皇居炎上御造宮ノ件

越前侯御帰国差止云々ノ件

阿部・牧野両侯引入云々ノ件

一 大内炎上之儀ニ付、一昨日申上候通之事、其後猶又様子相伺候処、是迄之御普請誠ニ御龜末成事ニテ、小御所之辺壁ナトハ透間多ク、

主上皇居之様ニモ無之、其上天明之度(八年戊申正月炎

上、寛政二年庚戌御造宮竣、光格天皇御即位八年、家齊公襲職三年)追テ御造宮ト申場所、只今迄モ其候ニ御座候由、

且是ハ極内ニ候得共、当殿下(九條左大臣尚忠)只々

關東之御都合計御考ニテ、極御不自由之儀ハ、格別御頓着モ不被為在哉、極御不自由之儀ハ、格別御頓着モ不被為在哉云々、當時御手薄ナリシハ驚キ入りタル程ノコトナリシト、主上ハ御酒好マセラレ、御晩酌ノ御酒甚タ粗悪ニシテ水七分酒三分ト云フ位ノ品ナリシト、或ハ稍腐敗ニ傾キタルモノ、其他是ニ類スルコトナリシト、斯ノ如ク粗悪ノ酒魚ヲ御供ニ充ルハ、數十年前ノ代價ヲ以テ御用商人カ納メル故、當時ノ價格ニ比スレハ粗悪ナラサルヲ得サリシト云フ、其他臨時御歌会用ノ御短尺、御懷紙等買入ヲモ調ハレス、侍従等カ所司代等ニ數談シテ漸ク間ニ合セタルコトモアリシトナム、実ニ言詞ニ尽サレヌ御有様ナリシ、殊ニ御本書ノ如ク小御所ノ壁ナトハ透間多シ云々、將軍家江戸城ノ結構壯大ニ比セハ、雲泥霄壤ナル多言ヲ俟タズ、斯ル逆過ヲ極メ、己ハ無上ノ驕侈ニ耽リ歎樂ヲ極メタル、當時心アル者、憤慨扼腕セシコトナリキ。○酒三分

水七分等ノコトハ、酒井若狭守カ所司代中ノ書翰ニ明ナリ戸侯)ニハ、御近親之事ニ御座候得共、

御心得迄ニ奉申上候、昨日龍土(龍土ハ宇和島侯ヲ云、麻布龍土在邸ナレハナリ)ヨリ、極内尊書モ拜見仕候処、

御同意之御様子ニ相伺、扱々難有奉存上候、十分ニ被

仰立候様伏テ奉願候、

一 松越前(福井侯)事当年御暇年ニテ、最早近々

御暇ト奉存候、此人天下之御為精忠之モノニ御座候間、

此節ハ不容易御時節ニ御座候間、何卒御差留ニ相成候様奉願上度、

水老公江ハ、龍土ヨリ申上候由ニ御座候、何分

御賢考之程奉願候、御固メ之方細川(熊本侯)・岡山(備

前公)等罷在候得共、格別頼ミ難相成奉存候、越前御差

留之儀、只々モ奉願上候、其次ハ立花(鑑寛)立花ハ筑筑柳川

侯)モ宜敷乍然是者外様之儀、越前之外有間敷ト奉存

候、

一 伊勢(伊勢ハ阿部伊勢守)・牧野(牧野ハ越後長岡侯)引入

モ御断之様子ニ相違無之段承リ申候、當時伊勢引入候

ハ、猶更閣中手弱ニ可相成、和泉(和泉ハ水野和泉守)

事ハ、浮説ニハ御座候得共、両筆頭引入ハ悦カト申儀



モ承申候間、

両公(尾・水)ヨリ嚴重ニ 御沙汰無之候テハ、長引可申  
哉ト奉存候、 尊慮難計候得共、此段奉申上候、先ハ  
極内々奉申上度如此御座候、頓首再拜、

卯月十三日

越前家編者考ニ、謹テ案スルニ、此際近衛公ヨリ委練内  
報此書逸スアリシカ、薩州侯へ御示諭ノ如ク、公然御周旋ア  
リテハ、御嫌疑ヲ生シ不可然ニ付、參政(胤統、若年寄、三上)遠藤但州之世子  
式部少輔ハ御近親ナルヲ以テ、阿部閣老へ内達之件、同  
氏江向ケ至密御通信此御案アリシニヨリ、左之如ク回答  
アリシナラン、同時薩侯ハ高須老候ヲ以御内示アリシナ  
リ、

高須侯ハ、当時幕吏中評判能ク、事ヲ執ルニ公平ナリト唱  
ヘタリ、公ハ御懇交ノ間ナル故、斯ノ如ク御通信アリタリ  
ト云フ、

(島津家書翰集ならびに照田公文書にて校訂)

三〇 七月二十三日 齊彬公阿部侯ニ御贈翰

此際近衛公内信アリシニヨリ、該朝直  
チニ閣老へ御内談アリシ後ノ文書ナリ

皇居御造営ノ件

京地御造営之儀ニ付、近衛殿ヨリ御内々被 仰進候御

書面絵図(絵図逸ス)其外共、得ト一覽イタシ候、委細ハ  
今朝申上候通之訳、

貴所様ヨリ御挨拶被 仰進方等、今朝被 仰聞候通ニ  
テ、至極可然存上候、依テ過日被遣候御書類返上仕候  
間、御落手可被成下候、猶其内御目通りニテ万々可申  
上候、以上、

七月廿三日

三一 門閥家ノ奨励訓示書

家柄(御一門四家及ヒ大身分二十一家・寄合等ヲ云フ)之面  
々ハ、追々重キ御役ヲモ被仰付、御国政取扱モ被仰付  
事候得ハ、愚痴文盲ニテハ不相成事候ニ付、右面々、  
以来幼少ヨリ一統造士館へ入学、混ト学問出精可有之  
候、左候テ学校之儀ハ別段之事候ニ付、相進候向ハ、  
二男以下ハ諸士同様学生ヨリ師員之勤(従来大身ノ面々、  
学館師員タルモノナカリシ故、如此訓諭セラレタリ)モ可被  
仰付旨、御沙汰被為在、誠に難有 御趣意之御事候条、  
被奉承知、一統出精可有之候云々、

正月

豊後島津  
久宝

古ヨリ尚武ノ国風ニシテ、武事ニノミ長シ、文学ニ疎ク、

從テ龜暴憚ニ陥ル者モ又寡シトセス、中ニモ昇平無事ノ久シキヨリシテ、大身ノ人々ハ遊惰ニ耽リ、或ハ愚蒙ニシテ、醉生夢死ニ等キモ少カラス、他藩ニ比スレハ、門葉ノ列ニ人材少キヲ深ク遺憾トセラレ、如此督責訓誡セラレタル者ナリ、公御知政後、頻リニ訓諭セラレシニ依リ、大ニ面目ヲ革メ、各奮發學事ニ就クモアリ、或ハ江戸其他遊學ニ出ルモアリテ、頗ル振起シ、師員ニ學ケラレタルモアリ、文化ノ初メ文政ノ末頃ヨリ、上下共ニ花美驕奢ニ流レ、輕薄ノ風行ハレ、中ニモ大身ノ人々ハ阿媚ノ徒ニノミ交際シ、酒食ヲ事トシ、遂ニ淫逸ノ行狀ニ陥リ、文武ノ芸ニ遊フモノ少ク、悪域ニ陥ラサル者アルモ、文盲愚痴ニシテ國政ニ与リテモ、善惡邪正ノ弁識モナク、木偶人ニ同シク、筆吏輩ノ為メニ愚玩セラレ、唯其職名ヲ犯スノミノ如キ者モ少ナカラス、茲ヲ以テ、職權筆吏ニアリトモ云フヘキ形況ナリキ、

### 三二 洋式砲術軍備之根本ニ定メラル旨御親書

三三の  
安政元年甲寅正月十四日以テ、洋式ノ砲術勸奨之御趣意書、  
御家老新納駿河江渡サレタル御親書、左ノ如シ、

一砲術之儀ハ、軍備肝要之事情ニ付、先年 高輪様（齊興公、江戸高輪ノ邸ニ御隠居故ニ高輪様ト通唱ス）厚以思召、

砲術館被石建（鹿兒島大龍寺馬場ニ創建洋式銃砲隊ノ操練ヲ開カレタリ、是レ弘化三年丙午ノ春ナリ、當時洋式ノ砲術ヲ御流儀ト唱ヘ、師範ヲ御流儀御預ト称シ、成田正右衛門正之ヲ掌レリ、同人モ館内ノ役宅ニ居住シ、而シテ操練場ノ内ニ軍神ヲ崇メラレタリ、貴久公・義久公・義弘公及ヒ齊興公ノ四座追々御世話被為在、誠以不容易事情間、一統孰立出精可致之処、別テ不染付之向モ有之哉ニ付、引立ノ趣法、且ハ是迄ノ措置等勸考之趣、左ニ書記シ申聞候間、猶亦可致吟味候（不染付云々、當時一般実用ノ弁別ナク、洋式ノ新ナルヲ嫌忌シ、号令ハ蘭語ヲ用ヒ、或ハ夷容ヲ模擬スルトカ、或ハ銃砲ノ形状異狀ナル等ヲ以テ、人々之ヲ好マサリシ、殊ニ天山水流師範ハ青山千九郎ナリ、天山水流モ從來ノ諸流トハ大ニ面目ヲ異ニシ、突撃ニ於テ多少効力アルヘシ、其器ハ二百錢彈單ノ車砲或ハ十斤火繩銃ノ早打、或ハ烽火等日本發明ニハ実用ニ適スベシ、茲ヲ主張スルヲ以テ主張スル者多シ、大久保利通、中山実善モ主張者ナリキ、者多ク、之カ為メニ、洋式ヲ啖斥スル一種ノ風習アリタリ）

一砲術ハ近代和漢洋与ニ軍用第一之要器ニテ、追々西洋ニテハ發明之法行ハレ、既ニ此節從

公刃被 仰渡候儀モ有之候ニ付テハ、銃隊ノ進退・駈引ハ勿論、大砲之打方等不致練熟候テハ、不相濟時節ト相成リ、殊ニ從他國追々伝授望（弘化ノ初ヨリ、齊興公軍政改革ノ説ヲ聞キ、西洋式ノ大小砲ヲ軍備ノ基本トセラレ、

盛ニ操練セシメ、或ハ大小砲製造局ヲモ創建セラレシ故、其説隣藩ニ轟キ、各藩士伝習ヲ冀望シ来ル者多シ、其事実ヲ茲ニ記シ玉ヒ、名実相伴フヲ訓示シ玉ヒシモノナリ)ノ者モ入り来候折柄ニ候間、一統其心得モ有之、出精可致答ニ候得共、今以十分競立候向ニモ不相聞得、旁以テ深ク及勦考候処、第一軍役方ト砲術館ト不致一和候テハ、号令スルモ難被行基ト存候、軍役方ヨリハ、万端役威ヲ以テ押シ付ケ、砲術館申立之儀不行届故、兎角十分一和不致儀可有之哉ト存候趣モ有之候、夫等之処ヨリ、自然人情令離散、日々出精人数相減シ候半、就テハ誠ニ歎ケ數次第ニ候、今通差置候テハ、乍恐 高輪様厚御趣意モ不行立、剩一統之様子相察候処、西洋砲術ハ以來取り用ヒ無之、萩野流取用可申ナト、区々無根之儀、致取沙汰候向モ有之哉ニ相聞得候、全ク左様之所存我等ハ無之、只火矢ノミ(異本火矢之儀ノミトアリ) 萩野流可相用哉ト存ル事ニ候、砲術訓練其外之儀ハ、弥以是迄通用取用ヒ、盛大ニスル所存故、此涯屹ト引立出精候様、且ツ万事及改正候様、可致吟味候(軍役方ト砲術館不致一和候テハ云々、砲術館ノ人々ハ、西洋実践ノ法ナルヲ主張シ、尚發明ノ式ヲ、研究セントス、軍役方ノ吏員別種ノ敵制ヲ編製シ云々)

御軍役方ノ吏員ハ洋式ノ兵制ヲ知ル者ナク、從來ノ兵学者則チ御家流或ハ甲州・真田・桶流ナト、唱フル諸流ヲ心得タル者ノミナルカ故、其諸流ヲ折衷シ一種ノ隊制ヲ製シ操練ナサシメたり、故ニ洋式主權者ハ之ヲ誹議シテ座ノ上空談トシテ遠ニ軋轢スルコト、ナレリ、故ヲ以テ斯ク弁明劃示セラレタルモノナリ、於テハ、別種ノ隊制ヲ編成シ操練ヲナサシメ、兩段ニ分レ、実場ニ於テハ何レノ方ヲ用ル、モ判然タラス、依テ一般方嚮ニ迷ヘリ、夫ヨリシテ軋轢ヲ生シタリ、公ニハ御壯年ノ御時、萩野流御学ヒアリ、近頃野村彦兵衛ヘ棒火矢ノ製作等命セラレ、或ハ十匁銃ノ打方ヲモナサシメ玉ヒシ故、街説ニ西洋流ノ砲術ハ御採用ナシト唱ヘタリ、之レ全ク御軍役方ニテ一種ノ隊制ヲ編成シ、訓練ヲナサシメタルト、棒火矢等ノ打方ヲナサシメ玉ヘルニ因シタル巷説ヨリシテ、自然洋法ノ砲術衰ントスルニ立到レリ、又追々他國ヨリ伝授望之者入り来候云々ハ、 齊興公御英断ヲ以テ、萩野流ヲ初メ諸流ノ大砲家大砲師繩敷家アリ、鳥居平七・青山千九郎・川崎乘助・小山田真藏・湊川源左衛門・朝倉某・黒木某等外ニ在代池田仲太郎 公御壮年ノ時分御流儀ト唱ヘタリ、其中二門人多キニ鳥居・青山二家アリキヲ廢セラレ、西洋流ニ帰セラレシハ、嘉永二年己酉ノ年ニアリ、然ルヲ実用ノ利否ヲ顧ミス、旧法ヲ墨守シ、種々物議ヲ醸シタリ、然ルヲ識見アル者ト、他藩ニ於テハ御卓見ヲ感賞セリ、夫ヨリシテ、逐日他藩ヨリ懇願シ来ルモノ続々たり)

一前条申達候通、可致出精旨相達候テモ、其詮相見ヘサル訳合及勘考候処、三四ヶ年前ヨリ、三十歳以下十五歳以上致稽古、三十歳以上ハ勝手次第第二申渡、其時分ヨリ、間ニハ年輩申重メ、且ハ輕キ持病等申立候向モ

余多有之候由、剩へ家老座・軍役方其外重立候座方へ  
(御家老座・御軍役方等之筆者ヲ指サレタルモノ也) 相勤候  
向へ、用向取込等申立出精不致哉ニ相聞得候、実々用  
向取込ニ付テハ、其通可申立答候得共、間ニハ用向繁  
雜ヲ名ニ致シ、不勤ノ者モ有之哉ニ相聞得、其外重役  
ノ子弟・親屬等ハ、格別心入モ可有之処、全ク不出精  
之面々勝ニ相聞得候、右通引立片落ニ候テハ(異本片落  
ニ有之トアリ) 何様敵重申渡候共、衆人不致納得答ニ候  
間、以来無片落引キ立候へハ、一統信服可致出精ト存  
候間、是又屹度改正有之度事ニ候、且又折々業合之精  
粗等不時ニ見分致シ、又不時ノ訓練相催候へハ、一統誠  
実ニ可致出精ト存候、二ノ丸へ場所取建(二ノ丸郭内ニ  
創設ノ文武講習所建築中ナルヲ指シテ如此) 当春(甲寅ノ春)  
ヨリ可始ト存候処、早参府(御家ノ参觀御暇ノ例規ハ、三  
月参府四月御暇ナリ) ニ相成リ、其儀不相叶候間、留守  
中ニハ各中初メ、時々見分致シ、無親疎引キ立候儀可  
然ト存候事、

一是迄訓練之節、小頭役之儀ハ、大砲免許(白砲・忽砲其  
他十八斤以上ノ射擲允許者ヲ云) 之者共、且ハ大身家之子  
弟等、修行之効驗無之面々モ相勤メ、進退接戦之場合

モ不弁、指揮相加候モ有之様子故、納得不致哉ニ相聞  
得候、右ハ小頭(小頭、一小隊ノ長、則チ大尉ノ職ニ当ル)  
等可相勤人柄相当不致訳合ニ候間、以来人柄ノ吟味有  
之、小頭其外之役場等定置キ(異本兼テノ字アリ) 急変  
之節ハ勿論、訓練之節モ、右之規則ニ不違様申付候へ  
ハ、是迄不心掛之面々モ、競ヒ立可致出精候、此以前  
通ノ規則ニテ幾度訓練申付候テモ、詮立申間敷哉ト存  
候事(小頭役トハ一小隊ノ長ナリ、現今ノ大・中・小尉ノ職  
ニ当ル、一小隊ハ和蘭ノ制ニ基キ、四十八人トス、大砲免許ト  
ハ、歩兵又ハ野戦砲打方等、練熟ノ上、白砲・忽砲・爆裂彈等  
ノ打方ナサシムルヲ云フ、○當時洋式砲術修練ニ階級ヲ設ケラ  
レタリ、初級ハ、小銃ノ打方ヲ訓教シ、而シテ隊列ニ加へ、運  
動駈引ヲ教練シ、次ニ野戦砲ノ放発式ヲ教へ、而シテ熟達ノ者  
へハ、急火管製造ノ法ヲ免許セラレ急火管トハ野戦大砲等  
放発ノ点火具ヲ云フ、而シテ  
隊制ノ進退駈引ヲ教練ス、又大砲打方ノ法ヲ免許セラル之ヲ大  
砲免許ト唱フ、急火管製造大砲射擲ノ免許ヲ受クルニハ、實聞  
ニ達シ、御軍役奉行列座申渡ノ規則ナリ、依テ拝承ノ人ハ礼服  
シテ允可ヲ受ケタリ、如此鄭重ノ制ヲ設ケラレ、軍備ノ専門ニ  
置ラレタルハ、全ク 齊興公ノ尊慮ニ出タリ、大砲免許トハ、  
即奥儀皆伝者ト云フニ同シ)

一軍令ハ勿論、旗本先手等之次第、兼テ人数賦定メ置キ、調練之節ハ、右ノ規則ニ不違様為致稽古候ヘハ、是迄不心掛ノ面々モヲノツカラ出精致シ、急変ノ節出張モ無混雜相揃可申哉ト存候、且亦格護相成居候劍銃、一人毎ニ(燧石機銃ヲ改良シタル雷管機銃、則チエンピール銃ナリ)一挺宛渡シ置、各私宅(異本ニ自宅トアリ)ヘ格護致置キ候ヘハ、調練ノ節ハ勿論、急変ノ節、渡シ方等ノ混雜モ無之、殊ニ取馴候簡ニテ(筒トハ銃ノ通唱)実事ノ場合懸念モ無之、且取始末方之儀ハ、毎月一兩度位宛役々致見分、万一不始末ノ者ハ夫々咎メ申付度事ト存候、大砲之儀モ同様、一組ノ人数ヘ預ケ置キ、前条同様見分有之度、乍然大砲ハ重大ノ品ニ候間、矢張り藏内ヘ差置、組人数引受取始末致候様申付置候ヘハ、取始末ニ付テモ行届キ可申、且ハ夫程迄取扱有之候ハ、別段世話無之トモ、オノツカラ可致出精候、左候テハ旅行亦ハ長病等之人ハ、跡代リ申付、右ノ者ヘ相渡シ、今通ニ数千挺ノ筒ヲ藏内ヘ格護ニテ、少人数ノ取始末ニテハ損筒モ可相増道理ニ候間(当時御製造ノ小銃、凡ソ千五百余挺、大砲三百余門、其内台場ノ装置ヲ除クノ外總テ二ノ丸郭内ノ藏ニ納メタリ) 旁前条通申付候ヘハ

实用ノ所置ト衆人汲受モ宜シク、別段引立無之候トモ、可致出精哉ト存候、

但本文通、兼テ人数賦立置候ヘハ(異本定メ置トアリ)

一統国役大切成ル訳汲受、不心掛之面々モ不埒(不埒ハ不勉強ノ意ニ当ル)致ス間敷、其上不時ニ調練催有之候ハ、猶以テ怠慢ノ心ハ生シ申間敷候、

以来一ケ年一兩度宛、吉野原ニテ調練申付度、是迄之通前広ヨリ不相催方、实用ト存シ候事、

一曰礮並射擲砲等打方ノ儀ハ、是迄之人数(是迄之人数トハ、大砲免許ヲ受タル者ハ、可ナリニ相調候得共、追々免許申付候面々ハ、全ク名目許ニテ、兼テ打方之不致稽古向モ有之様子、左候テハ現打方ニ取掛候節、万端ノ都合不宜、殊ニ彈丸製作方之儀ハ、鑄製方(大小砲及武器一切ノ製造局、大砲鑄製場ト唱フ、上町向フ築地ニ在リ)銃薬水車方(銃薬水車方トハ火薬製造所、水車ノ力ヲ以テ調整セシ故ニ、尔ク唱ヘリ)掛ノ面々而巳取扱ヒ候ニ付、全ク手伝同然ノ打方ニテ、熟達ノ期無覚束候間、以来免許申付候面々ハ、手都合ノ稽古ハ勿論、製作方且ハ遠近高低ノ射法モ精微ニ稽古有之候様申渡度、尤打方ノ節ハ、沖中ニ目当浮ベ置、又ハ櫻島ニテ打方致シ候様

申付度、且ツ台場砲打方之儀ハ、猶以不致修練候テハ不相濟時節ニ候間、折々稽古打申付度、其節モ目当浮ベ置、又ハ破損ノ大船ニテモ浮置度事(右ノ如ク訓令セラレシヨリ)、爆裂彈或燒彈等ノ打方モ、精密ニ各所砲台ニ於テ月二三回モ修練スルコト、ナリタリ、或ハ沖中ニ大船ヲ標のトシ、或ハ櫻島赤水村洗出シニ、ブレカツト船ノ大サニ土壘ヲ築キ、打方命セラレタリ、是ヲ実場ニ擬シ、修練ヲ開カレタル初メトス(土壘今ニ存ス)

一野戰砲並劍銃打方之儀ハ、高島四郎大夫ヨリ成田正右衛門致伝授候通ニテ、実場ニ於テ差支ハ有之間敷候得共、第一身体堅固ニ無之候テハ、中不中ノ懸念モ有之候間、以來ハ十二号令(十二号令トハ、今ニシテ云ヘハ、新兵ニ採銃法ヲ授ルヲ云フ、和蘭國ノ法ニ則リ、採銃ノ法ヲ教授セリ、其前ハ現ニ放發式ノミヲ授ケタリ)ノ手教致稽古候様申付度、当分致稽古候向モ有之哉ニ候得共、不致稽古向モ多キ様子ニ候間、急度申渡度存候(高島四郎大夫、茂致秋帆ト号ス、代々長崎町年寄職ナリ、萩野流砲術ヲ学ヒ門人多シ、四郎大夫ハ、憂國ノ士ニシテ、曾テ和蘭人ニ就テ西洋新式ノ大小砲銃ヲ修練シ、操練ヲ開キ、洋式ノ兵制ヲ教授シタルハ是ヲ開基トス、因テ自ラ近世大小砲開基ト称ス、和蘭人ヨリ伝習シタルハ、天保八年之春、大鹽平八郎カ暴動ノ後、奮然

軍制ノ革メサルヘカラサルヲ悟リ、和蘭人ニ托シテ、燧石機銃及ヒ臼砲・忽砲・野戰砲等ヲ購求シ、操練ヲ開キタリト云フ、我藩ニ於テモ、同年七月、山川沖ヘ北亞米利加船渡來、御城代島津但馬久風一隊ノ兵ヲ率ヒテ出軍セリ此時大砲師範島井平七、同平八門人数名ト共ニ出軍砲發セリ、當時ノ幕令ニ白帆ノ異國船見掛次第(抜カ)其時ハ鳥居モ萩野流ノ師範打私フヘシトノ令故ニ、砲發シタリト云フ其時ハ鳥居モ萩野流ノ師範ナリシ故、業ノ拙キハ論ナシ、是ヨリシテ齊與公鳥居ヲ長崎ニ遣サレ、高島カ門ニ入ラシメ玉ヘリ齊與公伝ニ配ス是ヨリシテ、海陸守備漸ク面目ヲ革メタリ、○齊與公高島カ和蘭人ニ就テ、新式ノ砲術研究セシヲ聞食サレ、大砲師範島井平八・同平七兄弟ニ命セラレ、高島ニ就テ、洋式ノ砲術学フヘキ旨ヲ命セラレシニ其法ヲ皆伝シ、燧石機銃百挺ヲ購求和蘭人持渡セラレ、或ハ帰國ノ品ナリ後、野戰砲及ヒ臼砲・忽砲各一門ヲ模製シ、操練ヲ開キタリ、之レ本藩ニ於テ開基トス、実ニ天保十二年辛丑ノ年ニアリ、而シテ鹿兒島中村騎射場ノ海浜ニ於テ、銃陣ノ操練及ヒ野戰砲或ハ臼砲二十・忽砲十五ノ射擲、御覽アリシニ、頗ル、尊意ニ適ヒ、而シテ御流儀ト唱ヘシメ、師範ハ鳥井ニ委任セラレタリ、後チ重テ伝習命セラレ、長崎ニ出タリシニ、高島ハ幕府ノ嫌疑ニ罹リシ故、鳥居兄弟モ直ニ帰國、余殃ノ及シコトヲ慮リ玉ヒ、成田ト變名セシメ玉ヘリ)

因ニ記ス、高島秋帆カ嫌疑ニ罹リタル概略ハ、元來嫉妬ニ出タリト、當時高島ハ名望アリ、或ハ各藩士砲術ノ門生多キカ

故、悖逆ノ企アリト、同僚福田某カ讒構ニ罹リタリト、素ヨリ形跡ナキ事ナリシ故、七ヶ年間幽囚セラレ、嘉永癸丑年ニ米船渡來、天下多事ナルニ方リテ放免、砲術教師ノ職ニ登用セラレ、御鉄砲方ニ昇進シ、講武所出役ヲモ命セラレ、名望益揚レリ、実ニ新式砲術ノ開基ト自称スルモ過言ニアラス、皇國ノ兵制一變ノ開祖ニシテ、仰クヘキノ人ナリ、其伝廣貫著ス処、高島流砲術伝ニ詳記ス。(細川潤次郎著高島伝參看)、〇十二号令トハ、劍銃ノ操法体制ヲ定メンカ為メ、十二ノ手続ヲ以テス、實用ニ於テハ簡略ノ手数アリ、体制能ク定マラサレハ、命中十分ナラサレハナリ、和蘭ニ於テ訓練ノ式皆此式ヨリス、高島ニハ、初メ其簡略法ヲ以テ教授セシカトモ、其後江戸ニ於テ下會根金三郎ハ、和蘭歩兵訓練ノ規法ニ則リ教練セリ、本藩ニ於テモ、如此令セラレタルニ依リ、其式頗ル精密ナルニ至レリ、〇下會根ハ高島カ門人ニシテ、天保十年五月九日武州徳丸原ニ於テ、閨老見置アリシ後、西洋砲術御鉄砲方ノ職ニ在テ、弘ク教授ヲ掌レリ、

一砲術書籍方ノ儀ハ、專西洋ノ兵書熟読講習シ、兵隊ノ運動旁深可致吟味役場ニ候処、當時ノ姿ニテハ、書籍写方一編之様相心得、書籍之意味合並業前ノ次第、吟味薄キ様子カト存候、以来西洋ノ兵書ハ勿論、和漢古今ノ戦法吟味ノ上、銃隊ノ進退駈引等心得居、指南相

調候様、兼テ心得候様有之度事、

但總奉行(閨老職兼役ス)初メ軍賦役(御目付兼職)ノ

面々ハ勿論之事ニ候(砲術館御創設後、同館内ニ書籍局ヲ設ケラレ、和漢洋ノ兵書ヲ蒐集シ、兵字奨勸セラレ、或ハ西洋翻譯ノ兵書ヲ騰写セシメ玉ヘリ、偏ニ洋式ノ兵制擴張ノ尊慮ニ出タルモノナリ、然ルニ種々ノ弊生シ、騰写局トモ云フヘキニ流レタル故、如此沙汰セラレタル者ナリ)

一銃隊進退駈曳、野戦砲打方稽古之儀、砲術館ニ於テ式日建置、稽古有之候得共、猶又引立ノ為メ、不時ニ大追物場亦ハ祇園洲台場内ニ於テ、一ヶ月兩三度ツ、稽古方申付、役々見分有之候ヘハ可然、大追物場ハ不容易事(異本ニ不輕ニ作ル)ニ候得共、大切成ル場所ニテ、稽古申付候ヘハ、国役大切成ル訳汲受、一統可致出精哉ト存候、当分通ニテハ、現事ノ場ニ至リ候テハ、甚タ懸念ノ訳モ可有之ト存候ニ付、屹度趣法相替、実意通達候様取計候ヘハ、不心掛之面々モ、追々競ヒ立可申ト存候、其節渡置候砲銃モ改有之候ヘハ、不締ノ廉ハ有之間敷ト存候、且亦当今ノ形勢ニテハ、諸郷私領共、十分不致訓練候テハ不叶時節ニ候間、夫々人撰之

上、指南方トシテ差遣度存候事（犬追物ハ、御家ニ於テ至重ナルモノニテ、御代々格別尊重セラレ、演武館郭内ニ演習場ヲ設ケラレ、犬追物場ト唱フ、此演習ハ、御一門家・大身分・寄合・小番ノ格式アル者ノミニ允サレタリ、コノ技ヲ教授者ハ、馬術師範川上十郎左衛門ナリ、川上ハ代々鎌倉流ノ馬術ヲ師範ス、此ノ如ク貴重ナル者ニテ、其場中ニ於テ、砲術演習スベシト命セラレタルハ、當時軍事必要ニシテ、昔時ノ騎射ト同シク、時勢ニ於テ斟酌セラレタルモノナリ）

一銃隊之儀、西洋ノ規則通ニテハ、難被行場モ可有之候ニ付、専ラ御先代様ノ御軍法（實久公・義久公・義弘公ノ御大成ノ一種、御家流ト唱フ、一名合傳流トモ唱フ）ニ基キ、和漢古今ノ良法ヲ集メ、軍役方ニテ吟味ノ上、治定ニハ候得共、未十分善良之事トハ不被存候間、猶又再校有之度、左候得ハ衆人ノ落着モ可宜、乍然西洋ノ規則ハ、臨実地組立タル法ニテ、進退聚散ノ変化自在ニ候間、本ニ居ヘ置キ物主其外旌旗之次第ノミ斟酌致シ度（此時迄洋式ノ砲隊ナカリシニ、田原直助長崎ニ於テ、和蘭人テーフアン、マーネント云ヘル者ヨリ伝習シタリ）、且又大砲隊之儀ハ、於西洋専ラ利用ニ相成ル由ナレハ、兼テ稽古方申付候儀專要ト存候、

但砲隊之儀ハ、田原直助委曲心得可罷在候間、同人

頭取ニテ、指南方申付可然事（西洋ノ規則通ニテハ、

難被行場モ可有之云々、其際備組編伍ノ図下ラレタリ、

此ノ図後、洋式ノ編伍ニシテ、旌旗又ハ主將員等ヲ取捨セ

ラレタルモノ、如シ、○大砲隊ハ、田原直助ナルモノヲ

長崎ヘ出サレシ際、和蘭人テーフアン、マーネント云ヘ

ル者ヨリ伝習シタリ、故ニ如此特命セラレタルモノナリ、

是ヨリシテ、砲隊ノ式備ハレリ、是レ日本ニ於テノ嚆矢

トス）

一馬上砲之儀ハ、物主等肝要ノ利器ニ候間、其面々稽古申付度、尤モ於西洋モ格別相用ヒ、仙臺政宗等モ相用、利器要用ノ段ハ、諸書ニモ相見得候間、取起有之度、右書籍ハ當時追々訳文出来候間、相下ケ可申、篤ト熟読有之度、馬術・砲術達者之者ヘ、為心得指南方申付候様可致候（日本ニ於テ、騎兵ヲ専用シタルハ、元和ノ頃伊達氏ニ瓶マレリ、然レトモ普ク用ルニ至ラス、昔時ヨリ馬上之技弓槍ニ止マレルカ如シ、西洋ニ於テ利用アルヲ以テ、創起セラレタリ、而シテ同時、島津登久特命ヲ蒙リ研究シ、遂ニ大操練ヲ為スニ至レリ、○騎兵興張ハ御親書ノ如ク、操練法ノ洋書モ数十部逐次下ケ渡サレ、門閥ノ人々或ハ犬追物演習格式ノ聲操練スルコトナリ、一年有余ニシテ、二百余騎ノ隊ヲ編制セリ、



御家老川上筑後久・若年寄島津登担当セリ、○梅田治啓カ説ニ  
 安政四五年ノ頃ヨリ騎槍ノ訓練ヲ翹メ玉ヒ、騎隊ニ用ラル、尊  
 意ナルヲ拝承セリト、其時ノ御言ニ、西洋ニ於テ騎兵ヲ専用シ、  
 中ニモトルコ人ハ馬上ニ長槍ヲ仕フニ達シタル由ナレハ、騎槍  
 修練スヘキ旨命ラレント梅田親話

一 近年城下六組之内二組宛、六ヶ月目交代ニテ、東目・  
 西目並長崎加勢申付候処、去夏(嘉永六癸丑夏、魯国軍艦  
 来レルヲ云)長崎へ異国船渡来ノ節ハ、無抛吟味之趣有  
 之、兼テ申付置候外之人數へ申付候ヲ、兼テ組々へ申  
 付候儀ハ、実事ニテハ無之、名目許リノ手当ニ可有之  
 ナト、心得違ノ評判致候向モ有之様子薄々相聞得、是  
 又尤ノ事故、以来ハ兼テ人撰ニテ申付置、其節入レ替  
 等無之、其俣繰出シニ相成候様、取扱第一ト存候、其  
 期ニ相成り入レ替等為致候テハ、兼テノ調ハ不行届ノ  
 訳ニモ相聞得、人々疑念モ尤ニ候間、此度早々吟味ノ  
 上申付置候様可致候、第一人氣引キ立候事故、不差置  
 吟味有之尤ニ存候、可差遣役場ノ内ニ人物無之候へハ、  
 人撰ノ上其役可申付候間、不差置可致吟味候(長崎援兵  
 トハ、同所ニ異国船渡来ノ節、九州各藩多少ノ兵ヲ出シ、警衛  
 スヘキ旨予テ幕府ヨリ令スル所タリ、我藩ニハ銃兵四小队・大

砲一隊大砲一隊ハ野ノ軍賦ナリ、又御領内東西海岸先発ノ銃兵十  
 六小队・大砲四隊之ヲ常備兵トス、又予備・後備アリ、又別ニ  
 數十隊ヲ設ク、如此予テ人數組定リタルニ、嘉永癸丑ノ夏、米  
 船浦賀ニ渡来ノ際、臨機出兵ノ達アリシニ、定メ置キタル人員  
 ハ差措テ、別ニ人數組ヲ定メ出軍シタルニ因リ、種々ノ説起レ  
 リ、畢竟出軍ヲ冀望スルハ、人氣ノ振ヒタルニ因レルニ、當時  
 ノ形况攘夷ヲ主張シ、我レ先キニ出軍ヲ冀望セリ、茲ヲ以テ尤  
 ノ事故、以来ハ兼テ人撰云々ト記サレタルモノナリ)

一 砲術稽古之者へ、三ヶ月宛稽古扶持遣候ハ、全ク引キ  
 立ノ為メニ候処、此頃ニ至リ候テハ、無抛向ヨリ別段  
 頼入等ニ相成リ候儀多ク、不相当ノ者へ遣儀有之哉ニ  
 相聞得、弥其通りノ儀ニ付テハ、自然以手寄願立候様  
 成行キ候間、兼テ誠実ニ出精致候者へ遣候様可申付候、  
 前文通之悪弊有之候テハ、衆人不染付之基ト存候間、  
 入念相糺シ、改正有之度存候事(抛ナキ向ヨリ別段頼入  
 云々ノ趣ハ、元来拔群修行ノ聲ヲ、成田正右衛門取調上申スル  
 規則ナルニ、重役等ヨリ上申人數ニ加名ヲ依頼スルアリ、素ヨ  
 リ修行ノ精粗ニ拘ハラヌ、全ク依頼願望ノ弊アルヲ匡サレタル  
 者ナリ、○斯御親書ハ、安政元年甲寅正月十四日、国老新納駿  
 河御前へ召出サレ、御直ニ下付セラレ、尚ホ軍備專一ナル世  
 態篤ク命セラレタリトナム、尋テ島津登ヲモ同時ニ召サレ、騎

兵隊練習ヲ命セラレ、来年御下国迄ニハ、相応ニ整理スヘシトノ御言ナリシト、其後江戸ヨリ騎兵ノ翻譯書並凶式等島津へ下付セラレ、大ニ操練開カレタリ、是レ洋式騎兵日本ニ於テノ嚆矢トス、其事実ハ相良常長カ紀事ニ詳ナリ、○此ノ御親書ハ、家老中へ取扱心得ノ為メ付セラレタルモノナリト雖モ、与頭其他關係役員中ニ拝読セシメタルニ依リ、拝写シ、毎条事実ヲ穿タレタルカ故、御耳目ノ明カナルニ驚キタリ、是ヨリシテ街説モ罷ミ、人々競フテ勉強スルニ至レリ、中ニモ萩野流主張ノ輩〔抜カ〕モ、御軍備一定セリトテ、洋式研究スルニ至レリ、尋テ左ノ布達ヲ発セラレタリ)

寅正月十四日

〔照國公文書ならびに藩藩史料齊彬公にて校訂〕

<sup>三三の一</sup>御流儀砲術之儀、於訓練場、三月ヨリ八月迄稽古被仰付置候得共、以来四季無構、是迄ノ振合通ニテ致稽古方候様被 仰付候条云々、

正月十五

豊後 島津 久實

大砲打方ハ、從來三月ヨリ八月迄ノ定規ナリキ、之レ何年問ヨリノ事ナリヤ詳ナラス、九月ヨリ打方ヲ止メタル所以ハ、放鷹ノ為メ御城下近村其他各郷共ニ、御鷹場ト唱フルアリテ、諸鳥ヲ打ツコトヲ嚴禁セラレ、鶴・雁・鴨ノ類、秋分ニ渡リ来ルモノナレハ、砲声ニ驚キ去ラサルカ為、如

此ノ制ヲ建タル者ナリ、実ニ至治ノ世ナリシハ之ヲ以テ知ルヘキナリ、

三三 海陸軍拡張ニ付節儉並風俗矯正ノ御親書

<sup>三三の一</sup>一此度従公辺海防之儀被 仰出候ニ付テハ、大砲・軍艦

其外要用之器御製造ニ付、莫大之御入費相成、右ハ無御抛御時節ニ候間、夫丈ケハ万事節儉相用、御国政御差支無之様屹度可取計、且諸士之風俗沙汰亦ハ学問・武芸等之儀ハ、別紙三通細々 御書取ヲ以被 仰出、誠ニ以難有御事候条、一統謹テ可奉承知候、右ニ付テハ被 仰出之通、御軍役御手当向等莫大之御入費被為及、不容易砌柄之事ニテ、御儉約不被行届候テハ、屹ト不相濟御時節ニ候間、於向々モ 御趣意深奉汲請、諸事吟味ヲ尽シ、御費筋之儀共無之様可取計候、其外風俗沙汰或ハ学問・武芸等之儀共、何レモ難有 御趣〔意カ〕意聊無妄却堅固可相守候云々、

正月

筑後 封

石見 久

駿河 久

伊織 成

外夷覬覦ノ形勢切迫ナルカ故、幕府狼狽、海陸ノ軍備各蕃

へ督促ス、本藩ニ於テハ、天下ニ率先セラレ稍整備シテ、其名声轟キタリ、尚ホ大成セラレムノ御趣意ナルカ故、費用少々ナラサルヲ以テ、如此令セラレタルモノナリ、

三三〇の二

一此度従公辺海防之儀被 仰出候ニ付テハ、大砲・軍艦其外要用之器械製造ニ付、莫大之入費相成候、右ハ無抛時節ニ候間、万時無手抜取計可申ハ当然ニ候得共、夫丈ケハ万事節儉不相用候テハ、後來之処令心配候間、勦農救助ハ格別、雑用之分猶亦吟味ヲ尽シ、儉約行届キ国役差支無之様、急度可取計候、手元之儀モ無益ト存候儀ハ、早々申聞候様可致候、右ニ付テハ万事適當之儀、吟味之上可申聞候、

一度々相達候得共、諸士之風儀今以不立直向有之哉ニ相聞得候間、猶又無油断可致教諭候、

一米価之事追々申達、下落ニハ相成候得共、自然ト高直ニ相成候様子モ有之、既ニ当春モ両度程直上リ相成候上、不順ニモ有之候間、参府後ハ弥增高直ニ相成哉ニ相聞得候間、折角心附ケ格別不及高直様、取計專一ニ存候事、

〔四月〕

〔願聖公年譜ならびに照臨公文書にて校訂〕

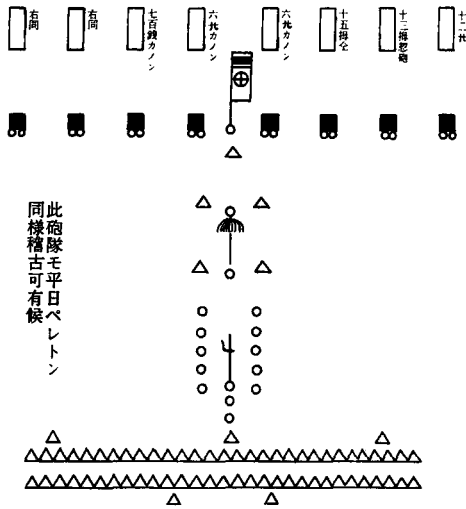
参府後ハ弥增高直ニ可相成云々ハ、壬子八月御参府ノ後ハ直ニ高価ニナリタリ、夫レ等ノコト被聞召、月々数回相場書上申スヘキ旨、其筋へ達セラレ、或ハ内密上申命セラレタルモアリ、御在國ノ時ハ御趣意遵奉シ、御留守ニハ何トナク緩セニナリタル例アリシ故、如此記サレタル者ナリ、

三三〇の三

別紙之通、於江戸 御沙汰被為 在、難有次第ニ候条、一統被奉承知、猶亦御趣意通相励、出精可被致候、何レ頭立候面々ヨリ差ハマリ修練不被致候テハ、支配下之下知行届兼候儀ニ可有之、当今ノ時節非常之砌、一廉御用立候様可被心掛候、此旨可申渡候、

五月三日 石見久 駿河久  
淨 仰

近習ノ輩ニ親ク指揮セラレタル洋式隊制略図



此砲隊モ平日ベレトシ  
同様稽古可有候

從卒之儀此節ハ勝  
手次第一ツ、以來ハ從  
卒一人ツ、又ハ從  
手一人ツ、又ハ從  
兩入人ツ、又ハ從  
テモ一人ツ、又ハ從  
極候

注・箇中の□・△・○・∞は  
朱書、■・▲は黒書なり

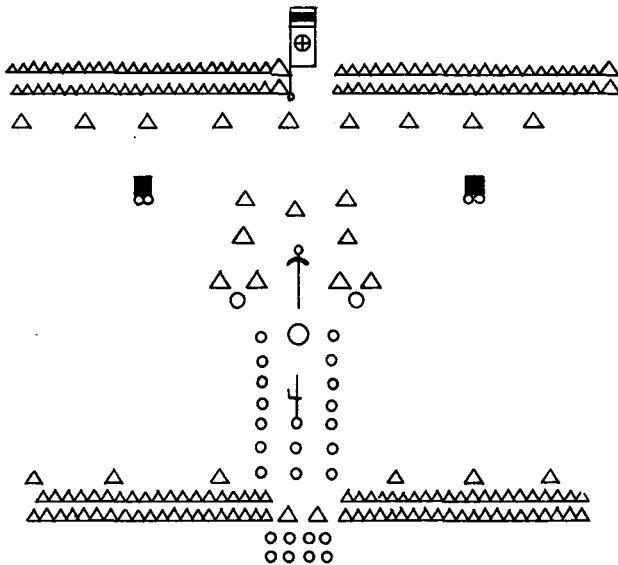
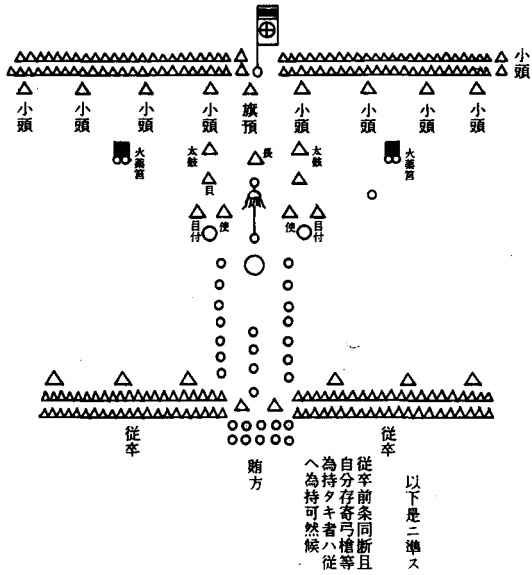


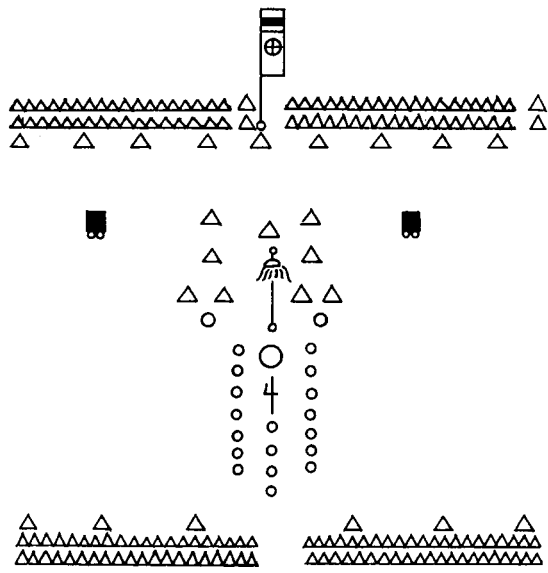
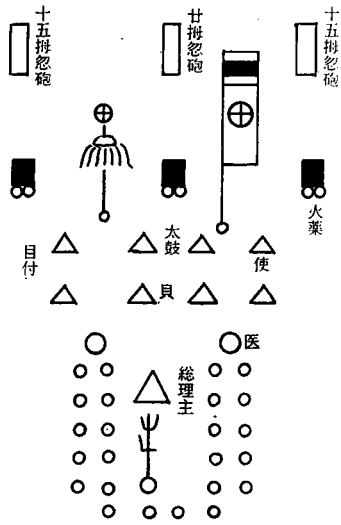
遊隊二十六人  
但老練ノ兵ヲ用ユ小頭六人



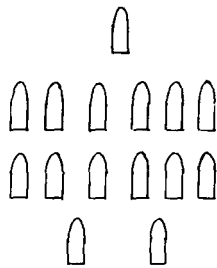
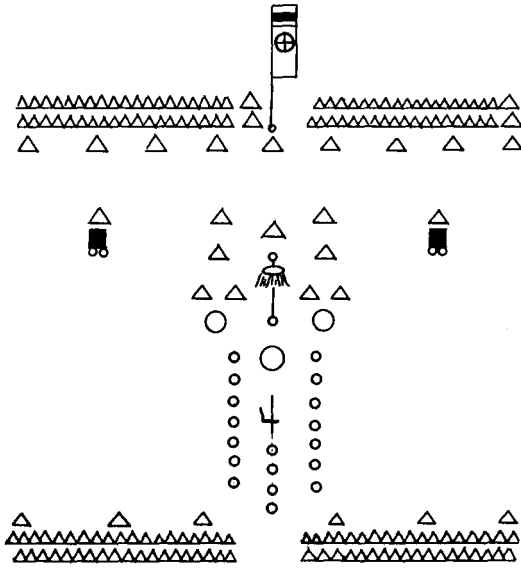
騎馬隊ノ儀見計取  
極可置事  
騎兵十二騎同小頭三騎

安政元年 (1854)

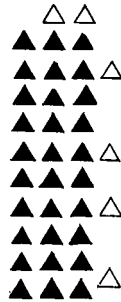




安政元年 (1854)

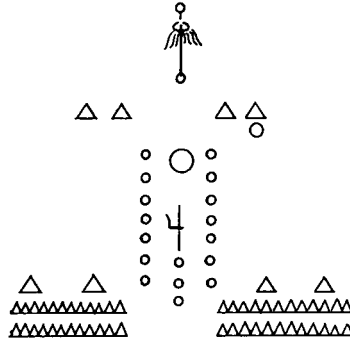
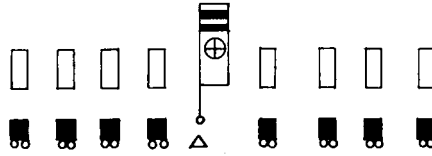


騎  
馬  
如  
前



遊  
隊  
如  
前

砲隊如前



三四 砲術操練勉勵御褒詞布達

犬追物場ニ於テ、大身分初メ諸御役人迄、砲術調練致稽古候様被 仰渡置候処、一統心得宜敷 御趣意之程奉波受、追々出席人モ相嵩、分テ致出精候段被 聞召上、別テ 御満足被 思召候、就テハ来年 御下国之上、オノツカラ御視(略式ノ御覽ヲ云フ)モ可被 遊トノ御事候間、猶亦相励致出精候様可申越旨、被 仰出候云々、

寅六月 筑後

上条砲術調練勸奨ノ御達アリシヨリ、一統迷夢ヲ覚シ、殊ニ貴重ナル犬追場(物籠カ)ニ於テ、操練スヘキ旨令セラレシヨリ、一層国役ノ重キヲ感シタリ、操練ノ度毎ニ其事実聞召サレシ故、右通御賞詞アリシ者ナリ(御視云々ノ語ハ、御覽ノ意ト異ナラスト雖、御覽ト令セラル、トキハ、文武芸共ニ例規ニ則ラレ、礼服ヲ召シ、一統モ礼服用等ノ式アルカ故、御初入部ノ際ノミ御覽ト唱へ、通常ハ御視ト唱へタル者ナリ)

三五 島津齊彬手製茶碗ボムベン(白砲)并題

函和歌



○この文書は、「鹿兒島県史料 斉彬公史料」第一巻の第一五〇号文書と重複により略す。

三六 高島秋帆（四郎太夫）カ爆弾擬似ノ茶釜ノ

図ニ題歌

○この文書は、「鹿兒島県史料 斉彬公史料」第一巻の第一五一号文書と重複により略す。

三七 考証 市來廣貫建言

御流儀砲術ノ儀ハ御軍備根源ノ事候付、先年厚以思召砲術館被召建、追々御世話被為在、誠ニ以不容易御趣意ノ御事候間、一統競立出精可仕ノ処、別テ不染付御座候付、以来御引立ノ御趣法且是迄ノ御処置振、乍恐愚考ノ趣左条ニ奉申上候、

一砲術ノ儀近世和漢共軍器ノ最一ニ相建、殊ニ西洋近代發明ノ法相知レ、銃陣ノ進退駈引ハ勿論、大砲ノ打前等分テ練熟不仕候テハ、不相濟時勢ニモ赴候付、是迄段々敵數御引立モ有之候得共、今以競立出精不仕候故、旁篤勘考仕候処、第一ハ御軍役方砲術館ト和睦不致、御軍役方ヨリハ万端御役威ノミヲ以御取扱有之、難被行儀モ間々有候得共、砲術館申立ノ趣不被行儀様ノ儀共不少故、無何ト不和ノ病ヲ生シ信服不仕候付、自然

人情離散仕候、今形ニテハ日々出精人数相減シ、実以廃絶同然ノ姿ニ相成、剩御引立ノ御手数數モ相弛ミ、誠ニ以歎ケ敷次第ニ御座候、今通被召置候テハ、乍恐厚御趣意モ終ニ不被行、殊ニ一統ノ取沙汰ニハ、御流儀砲術ハ以来御取用無御座、萩野流拾叟銃打方御取用可相成杯ト区々評判仕、弥人心疑惑仕候、就テハ此涯御手ヲ被為付、万端厚被思召分、第一御軍役方ト砲術館不和ノ病根御除御趣法御改正被

仰出、次ニハ一統信服出精仕候様、御処置被為在度御事ト奉存候、  
一前件申上候通、一統出精可仕トノ御旨ハ、毎度被仰渡モ有之事ニハ御座候得共、其詮更ニ相見得不申候間、段々勘考仕候ニ、三四年前ヨリ三拾歳以下拾五歳以上稽古イタシ、三拾歳以上ハ稽古勝手次第ニ被仰渡候、然処其時分ヨリ間ニハ心得違ノ者、或ハ輕薄ナル輩杯、年輩申重メ、或ハ輕キ持病等申立出席不仕モノモ不少、剩御家老座・御軍役方、其他重立候御座柄等ハ相勤候者共ハ、御用取込等申立、実ニ御用向取込付テハ其通ニモ可有御座候得共、間ニハ御用繁雜ヲ名ニイタシ、不埒ノ輩モ有之、其外重御役方ノ子弟親屬等ハ、格別

心入モ可有之処、全不頓着ノ面々勝ニ相見得、右通御引立ノ筋片落ニ御座候テハ、如何程嚴重被仰渡候共、衆人納得不仕ハ勿論ノ事ト奉存候、依之以来無片落御引立有之候ハ、一統信服出精可仕候、左候テ業合ノ精粗等折々

御覽被遊候欤、又ハ不時ニ調練御催御座候ハ、一統誠実ニ汲受、無懈怠出精可仕哉ト奉存候、

一是迄調練ノ節々小頭役ノ儀ハ、大砲御免許亦ハ大身家ノ面々杯、修業ノ効驗無之人々モ相勤來、進退接戦ノ場合モ不相弁、勝手次第ニ指揮相加候付、衆人信用薄ク、動モスレハ隊制紊乱仕候、右ハ第一小頭役可相勤人柄ニ無之故、人々納得不仕、紊擾到來仕候、依之以來ハ人柄ノ御吟味屹ト有之、小頭役其外之役者モ平常被定置、急変ノ節ハ勿論、調練ノ節モ其御規則ニ不違様被仰付候ハ、是迄不心掛ノ面々モオノツカラ競立出精可仕、此已前通ニ御引立ノ法ニテハ、乍恐幾度調練被仰付候テモ、詮立申間敷哉ト奉存候、

一御軍令ハ勿論、御先手御旗本等ノ次第、兼テ御人数組被定置、調練ノ節モ右ノ御定ニ不違様稽古被仰付候ハ、是迄不染付ノ面々モオノツカラ出精仕、急変ノ出張等

無混雜相整可申、就テハ御格護相成居候劍銃、一人毎ニ屯挺ツ、兼テ被預置、各私宅ヘ格護仕置、調練ノ節ハ勿論、急変ノ砌俄ニ御渡方等ノ混雜モ無之、殊ニ平生手馴候筒ニテ実場ニ臨ミ、中不中ノ懸念モ無御座、左候テ取始末ノ精粗ハ、毎月一兩度程ツ、モ御役々見分被仰付、若不頓着ノ人ハ夫々御沙汰ニ被及度、大砲モ同様一組ノ人数ニ被預置、前条同様見分被仰付度、乍然大砲ハ重大ノ品ニ御座候間、矢張御藏内ヘ召置、組合人数引受、取始末イタシ候様被仰付候ハ、当分ノ向ヨリモ却テ行届可申、且ハ夫程迄現事ニ向ケ御所置相成候ハ、稽古方別段御世話不被為在候共、競立出精可仕、旅行・長病人等ハ跡代被仰付候様有御座度、今通数千挺ノ御筒御藏内ヘ御格護相成居、人足任セノ取始末ニテハ、自然損銃モ多ク可罷成、右通方端実場ニ向ケ御取扱御座候ハ、一統誠実ニ汲請出精可仕哉ト奉存候、

但本文申上候通、兼テ実場ニ向ケ御人数賦被定置候ハ、一統御国役大切ナル訳汲受、不心掛之面々モオノツカラ出精可仕、且ハ急変ノ出張等無滞相整可申、尤右様被仰付候ハ、此以前ヨリノ御引立ト

替り被仰渡等無之候共、競立出精可仕、左候テ不時ニ折々調練御催相成候ハ、猶以情心ハ生シ申間敷候ニ付、一ヶ年ニ一兩度程ツ、吉野原等ニオヒテ調練被仰付度、是迄ノ通前広ヨリ騒々敷御催御座候テハ、其内ノ混雜モ不少、御実用トハ不奉存候、

一 大砲並銃陣ノ調練四月ヨリ八月迄ノ間、於砂揚場被仰付来候得共、年中僅六度位ニテハ初生ノ人々練熟ノ期無覚束御座候間、以来四季無構稽古被仰付度奉存候、  
一 臼砲・射擲煩等打方ノ儀ハ、是迄可也ニ相整候得共、追々大砲御免許等被仰付候面々ハ、全ク名目ノミノ事ニテ、兼テ打方ノ稽古モ不致、調練ノ節直様現打方ニ取掛候故、万端不都合ニ有之、殊ニ彈丸製作方ハ、鑄製方・銃棄方掛ノ人々ノミ取扱イタシ候付、全ク手伝同然ノ事ニテ、熟達ノ期無覚束御座候、依之以来大砲御免許被仰付候人々ハ、平生打方ノ手続稽古被仰付、尤打方ノ節ハ、沖中ニ破損不用ノ大船等浮ヘ置、打方被仰付度、台場打ノ儀ハ猶以修練不仕候テハ、難相濟時勢ニモ相向候付、折々稽古方被仰付度御事ト奉存候、  
一 野戰砲並劍銃打前ノ手続等ハ、高島四郎大夫ヨリ成田

正右衛門伝授仕候通ニテ、于今其法相行ハレ候、実事ニ当リ差支ハ有之間敷候得共、劍銃ノ儀ハ第一身体堅固ニ無御座候テハ、中不中ノ差別モ有之事ニ付、以来ハ拾式号令ノ手前ヨリ初生教導仕候様被仰付度、当分モ間ニハ稽古仕人モ有之候得共、未一統ノ場ニ罷成兼候付、屹ト稽古仕候様被仰渡度奉存候、且江戸表ニテハ万端精微ニ吟味イタシ、稽古仕候由御座候付、此涯成田彦十郎外ニ一兩人程モ被召添、出府被仰付度、左様御座候ハ衆人ノ落着モ可宜哉、此段ハ御引立肝要ノ御趣法ト奉存候、尤被差添候人ハ、兼テ西洋ノ兵籍等熟閱誠実ノ人柄被相撰、彦十郎一同出府被仰付度奉存候、

一 砲術書籍方ノ儀ハ、專西洋ノ兵書熟読講習イタシ、兵制ノ次第深ク吟味可仕候役場ニ御座候処、当分ノ姿ニテハ書籍騰写一篇ノ役場ノ様心得違、書籍ノ意味合業合ノ次第共吟味仕儀ハ全ク無之、名目ノミニ御座候間、以来ハ西洋ノ兵籍ハ勿論、和漢古今ノ兵書戦法ヲモ講習イタシ、銃陣ノ進退駆引等各相心得、初生ノ教導手厚行届候様被仰付度奉存候、  
一 馬上銃ノ儀ハ、物主等重立候役々ハ肝要ノ事ニテ、屹

ト稽古方被仰付度、尤於西洋モ格別相用候モノ、由御座候付、御取起相成度御事ト奉存候（前記ト対照シテ公ノ度量及ヒ識ノ明カナルヲ知ルヘシ、文中ノ圈点輕々看過スル勿レ）

一銃陣ノ進退運動ノ駆引、野戰砲打方ノ儀ハ、砲術館ニヲヒテ式日毎ニ稽古仕来候事ニハ御座候得共、前件ニモ奉申上候通、兎角一統不染付ノ向御座候付、屹ト御手ヲ不被召付候テハ、不相濟時世ニ御座候付、乍恐大追物場ニヲヒテ、毎月兩三度程モ御役々見分等被仰付度、左様御座候ハ一統御国役大切ナル訳奉汲受出精可仕、砲術館モ被召建置候ニ付、別段稽古場被召建ニハ不及訳ニ御座候得共、是迄之御引立、乍恐御上ノ御趣意通達仕兼候ニ付、右通格別成ル場所ニテ稽古被仰付候ハ、不心掛ノ面々モ競立、誠実ニ出精可仕、左候テ前件通劍銃・野砲等銘々へ被渡置、右稽古ノ節ニ御役々見分有之候ハ、不締ノ廉ハ決テ有御座間敷、其上不時ニ調練御催御見置等被為在候ハ、人々情心ハ生シ申間敷哉ト奉存候、

但本文奉申上候通、犬追物場ニヲヒテ稽古於被仰付

ハ、此後格別嚴密ノ御世話無御座候トモ、決テ出精可仕哉、今形被召置候テハ急変ノ御用難相立、殊ニ当今ノ世態片時モ忽セニ難被召置ハ、御軍事ニ御座候ニ付、諸郷・私領等ニ至迄練熟仕候様、指南方被差遣度、尤被遣候人物克々御撰ニ相成度御事ニ御座候、

一銃陣ノ儀ハ、西洋全クノ規則通ニテハ

皇國ノ人情ニ難応場モ、多々可有御座候ニ付、

御先代様御実践ノ御法ニ被為基、夫レニ和漢蘭諸流ノ戦法集テ御大成御組建相成候ハ、衆人ノ落着モ可宜哉、併当今ニ相成候テハ、古昔ノ争戦トハ別テ变革為仕ハ、大小砲ヲ用候事ニ相成候、兎角西洋近世ノ法御斟酌御用ヒ無御座候テハ、隊制ノ次第等惣テ西洋法ニ被基、物主・小頭並ニ鉦鼓旗幕ノ制等、取捨折衷御治定有御座度、且砲隊ノ儀ハ、西洋ニモ近代専用ノ由御座候付、御手ヲ被仰付度御事ト奉存候、

但本文ニ申上候御人数組ノ儀ハ、御軍役方御吟味ニ

テ御治定相成、調練モ被仰付儀ニ御座候得共、乍恐未御充分ノ事トハ不奉存候ニ付、屹ト御再校被仰付度、砲隊ノ儀ハ田原直助相心得罷在候間、調

練ノ規則旁取扱被仰付度奉存候、

一此以前ヨリ、御城下六組ノ内式組ツ、六ヶ月交代ニテ、東西海岸並長崎援兵トシテ可被差出旨被仰付置候、依之各其心得ヲ以手当イタシ罷在候処、今般長崎へ異国船渡来ニ付、時宜次第ニハ可被差出トノ趣ニテ、兼テ被仰付置候人数外ニ被仰付候、然ルニ一統ノ取沙汰ニハ、兼テ組々へ被仰付置候儀ハ、実事ニハ無之名目ノミノ御手当ニ候旨、区々評判仕候、右ハ乍恐御十分ノ御処置トハ不奉存、右通ノ御処置間々有之、人氣大ニ疑惑仕候ニ付、以来ハ右等ノ儀ハ勿論、万端御実意通達仕候様、御取扱有御座度、尤右ノ一事ノミニ無御座、御国政向万端御実意通達不仕候テハ、人心相揃申間敷哉ト乍恐奉存候、

一砲術稽古初生ノ面々へ、三ヶ月ツ、稽古扶持被成下、不容易

御処置ニ御座候、然処此頃ニ至テハ、右御扶持米被下方ノ人数取シラヘニ付、重御役方等ヨリ頼入ニ相成、人々手寄ヲ求願立候様成立、兼テ出精仕候モノモ手寄不宜候得ハ願達不仕候、右ハ別テ如何敷習弊ニ相流レ候間、右体

御趣意ニ相戻候儀ハ、屹ト御正シ被為在度御儀ト奉存候、

右ハ賤陋ノ私式未熟ノ愚考ニテ、御処置振ヲ奉評ノ罪ハ難免、別テ奉恐入候得共、多日勸考仕候趣不願憚奉言上候、以上、

〔嘉永六年〕  
丑十二月廿二日

市來正右衛門広名

此書面嘉永六年丑十二月廿二日、江夏十郎直ヲ以奉呈候処、

折節御休息所御小座へ被為入候テ、直様

御取ニ相成、御内沙汰ノ趣ハ、尚此末何事ニヨラス存寄ノ

事ハ、無遠慮可申出トノ御事ニ候旨、十郎ヨリ被申聞候事、

三八 田原・磯永・市來ノ三名ニ砲術指南役ヲ命

シ玉ヲ

田原直助明章

右ハ先般長崎ニ於テ、伝習教候大砲隊取調指南方被仰付候、

右之通被仰付候条、成田正右衛門申渡、可承向ヘモ可相達候、

正月

豊後島津久宝

磯永孫四郎周德

市來正右衛門旧名広實

右ハ砲術指南役被仰付候条、成田正右衛門申談、指南方行届候様、厚ク可致取扱候、

右通被仰付候条、可承向ヘモ可相達候、

正月 豊後島津久宝

此三名ニ指南役命セラレシハ、御訓示書ノ如ク、田原ハ長崎在留和蘭人テイフアン、マアネンナル者ニ就テ、陸戦砲隊ノ運動式伝習シタルニ由リテナリ、故ニ同人担当シテ訓練ヲ開キタリ、之ヲ日本ニ於テ砲隊修練ノ嚆矢トス（訓練ヲ扱タル事実ハ舊邦秘録ニ詳記ス）、磯永・市來ニ銃隊指南役命セラレタルハ、市來カ建言ヨリシテ、尚ホ諮問セラレ、旨アリシニ、奉答ノ趣ヲ可トシ玉ヒシニヤ、斯ク命セラレタリ、然リト雖モ其任ニ堪ヘサル旨ヲ上言シテ、遂ニ其請ヲ允容セラレタリ、磯永ハ当時砲術館書籍掛ヲ奉シ、市來ハ御徒目付兼御庭方役タリ、○公ハ能ク諫ヲ容レ玉ヒ、或ハ建言ノ適切ナルヲ認メ玉フ時ハ、直チニ採用施行シ玉フハ悉ナ人知ルカ如シ、上文訓令ノ御書意ト市來カ建言書ト照シ見テ、公カ度量ノ大且ツ寛急輕重ヲ弁シ玉ヒシ一端ヲ知ルニ足ラム、茲ニ其事実ヲ考証センガ為メ、畏コクモ記シヌ、

### 三九 洋式騎兵創設

五日、若年寄兼軍役掛島津久包ニ命シ、博ク蘭書ヲ稽ヘ諸組頭ヲ指揮セシム、又タ当番頭・詰衆・大身分等ニ命シ騎兵ヲ操セシム、騎兵ヲ銃砲操場ニ習ハス、此ヲ始トシ、二十一日是ヨリ先ツ子弟数名ヲ長州及ヒ浪華ニ遣シ、蘭書ヲ学バシム、二十六日伊達宗城（宇和島藩主）其臣某ヲツカハン、西洋ノ砲術ヲ学ハン事ヲ請フ、公コレヲユルス、田原尚助直ヲシテ教授セシム、二十七日江夏十郎等ニ命シテ反射炉ヲ造ラシム云々、

### 四〇 兩番頭へ学問ノ要旨其他訓令

一度々相達候得共、諸士ノ風儀、今以テ不立直向有之哉ニ相聞得候間、猶又無油断可致教諭候、  
一大番頭・小姓組番頭ノ儀、諸士預置格別ナル役儀ニ候間、自身ノ心掛ハ勿論、組中ノ義掛心頭、風儀万端指揮肝要ニ候間、猶又学問・武道ノ吟味無等閑、諸士心伏候様可心掛旨能々可相達候、砲術訓練ノ義、第一番頭自身ニ不致会得候テハ、号令難被行基ニ候間、来年下国迄ニハ十分ニ相調候様申渡、万事行届候様可申達

(一本相違ニ作ル) 候、

一 学問ノ儀、文章訓話ノ末ニナツミ、倫理实用ノ道理ニ昏ク候テハ、不学無識ノ者ニ同シク、無益ノ事ニ候、

元来学問ノ本意ハ、義理ヲ明ニシテ、心術ヲ正シ、己ヲ治メ、人ヲ治ル器量ヲ養ヒ、君父ニ対シテ忠孝ヲ尽シ、全体ヲ不汚義、第一ノ要務ト存候間、能々可申論候、武道ノ義同様、武術ノ末派ニ不拘、匹夫ノ勇ニ不墜、行儀ヲ正シ、士道ノ本体ヲ不失様厚ク可申渡候(造士館ノ学風近代大ニ衰へ、記誦詩章ニノミ務ルノ弊アリ、故此令アリ)

一 進物贈答ノ儀、今以テ聞得ノ趣モ有之候、上ニ立ツ役々受納不致候へハ、自然ト相止ム道理ニ候間、心得違無之様、急度可相心得候、無用ノ参会、是同様ノ事ニ候(賄賂苞苴ノ弊隠然トシテ尚要路ニ行ル、故此令アリ)

一 差置キ難キ儀ハ格別、其外内意等無抛向ヨリ申入レ候共、先例相違ノ儀ハ容易ニ取揚ケ申間敷候(有司其私ヲ以テ人民ノ請願ヲ特許シ、從テ物議ヲ生ス、故ニ此ノ令ヲ發ス) 一 不依善惡、下ヨリ申立候儀、幾重ニモ相糺、鹿忽ニ取捨有間敷、且又万事長引候テハ、末々及難義候間、手早ニ吟味申付差函致スヘク候、私ヲ捨公平ノ処置第一

ノ事ニ候、以上(人民ノ出訴請願ヲ認可指令スル、或ハ其當ヲ得ス、往々苞苴ニ因テ遲速アリ、故ニ此令ヲ出ス)

正月廿日

(照因公文書にて補正)

四一 出水・高尾野二郷ニ水田開墾ヲ命シ玉フ 出水・高尾野ノ兩郷ヲ巡視シ、街道ノ左右ニ在ル畑地及ヒ原野ヲ水田ニ開墾シ、且ツ庄村ノ入湾ヲ埋メ、田地トナサント欲ス、郡奉行曰ク、大野原ハ水ニ乏シ、上宮山ノ水ヲ引カハ充分ノ水利ナリト雖トモ、山中ニ谷アリ、容易ノ工事ニアラス、

公曰ク、谷ヲ埋メ水道ヲ疏スベシ、然ラズンバ大樋ヲ架シ水利ヲ設クベシ、費用ノ如キハ必ズ百年ノ後ニ償フハ疑ナシト、遂ニ中村新助ニ命シテ工ヲ終ヘシム、今ノ大野原并庄瀉新田ト唱ルハ是ナリ、

四二 齊彬公御東上ノ途ニ米艦入相ノ報ニ接ス

二十一日 公鹿兒島ヲ發シテ東上シ玉フ、家老島津久寶等從フ、二十四日高城郡高城郷ニ抵ル、会々報江戸ヨリ至ル、曰ク、本月九日米利堅船浦賀港ニ来リ泊シ江戸騷然タリ、齊彬公是報ニ接シ乃チ上野篤實(司)等ニ命シ、

兵ヲ將ヒ驅テ江戸ニ赴キ變ニ備ヘシム、又タ島津久浮ニ命シ、兵ヲ將イテ大坂ニ抵リ、後命ヲ竣タシム、異舶京師近海ニ侵入スルヲ虞テナリ（近衛家奥表日記參看）

#### 四三 改元詔

詔蓋聞、皇猷得宜而寰宇父安、則天地表祥瑞之庇、庶政不明而民人疾苦、則陰陽示災眚之變、嗚呼可不慎哉、朕叨眇々之躬、恭託元々之上、自續鴻業、八閩寒暑、夙夜祗畏、匪遑底寧、然誠不感物、化不覃遠、元氣鬱塞、祝融為祟、宮闕蕩然、殃逮閭閻、洋夷出沒、腥羶薰騰、辺海不靖、勤勞士夫、加之六月以來、坤德逆常、近畿地震、余動及京、于今未息、詳念咎徵在予一人、思俾導迎大和、式弭消災變、宜易冠元之名、普施有過之沢、其改嘉永七年為安政元年、大赦天下、今日味爽以前大辟以下、罪無輕重、已發覺・未發覺・已結正・未結正、咸皆赦除、但犯八虐・故殺・謀殺・私鑄錢・強竊二盜、常赦所不原者、不在此限、又復天下今年半徭、老人及僧尼・年百歲以上給穀四斛、九拾以上三斛、八拾以上二斛、七拾以上一斛、庶幾、自今

与物一新、上答天譴、下協人望、六府維修、万方無虞、布告天下、令知

朕意、主者施行、

安政元年十一月二十七日

#### 四四 梵鐘大小砲銃鑄換詔

##### 五畿七道諸国司

太政官符

應以諸国寺院之梵鐘鑄造大砲小銃事

右正二位行權大納言藤原朝臣實萬宣奉

勅、夫外寇事情固所深被惱

宸襟也、況於緇素何有差異、頃年墨夷再乘入相模海岸、

今秋魯夷渡來畿内近海、國家急務只在海防、因欲以諸

国寺院之梵鐘鑄造大砲小銃、置海国枢要之地、備不虞、

速令諸国寺院各存時勢、本寺之外除古來名器及報時之

鐘、其外悉可鑄換大砲為

皇国擁護之器、及辺海無事之時、復又宜銷兵器以為鯨

鐘、不可存異議者諸国承知、依宣行之符到奉行、

權右中弁正五位上兼行左衛門權佐藤原朝臣判

修理東大寺大仏長官從四位上行中務權少輔主殿頭兼左



大史小槻宿禰判奉

安政元年十二月廿三日

右官符 伝奏ヨリ所司代協坂淡路守へ達セラル、

上卿 三條権大納言實萬卿

奉行 葉室権右中弁 長順朝臣

宮符調法 左大史 輔世宿禰

同使 大藏少祿 宗岡行正

安政元年寅十二月廿四日、關東寺社御奉行ヨリ 江

戸聖護院出張御役所へ御達有之、聖護院御門主江御

尋、卯正月二日京都江着、

修驗宗法ニツイテ院内江鐘樓建置、法用之節撞鐘相用

候儀有之哉之事、

御答

凡鐘磬等ハ仏門之楽器ニテ、施達礼仏等ハ法中之礼ニ

候得ハ、礼楽共ヘモ不可闕之儀ニ候、就中巨鐘ハ招衆

之徳広大ニ候得ハ、阿含經規度圖經等、詳ニ鳴鐘之利益

ヲ説キ、又天竺祇園精舍ニモ鐘樓建立之旨經説ニ相見

延候、從然以來本朝共其規則ニ準シ、院内ニ鐘樓建置、

法用之節集会之或ハ時刻ヲ報シ候、鐘モ撞候テ仏門之

礼楽ヲ敲重ニ相整ヘ、

國家ヲ祝禱致候儀ニ御座候事、

安政元年寅十二月廿三日宣旨 勅夫外寇事情固所深被

惱

宸襟也、況於緇素何有差異、頃年墨夷再乘入相模海岸、

今秋魯夷渡来畿内近海、國家急務只在海防、因欲以諸

國寺院之梵鐘鑄造大砲小銃、置海國扼要之地、備不虞、

速令諸國寺院各存時勢、本寺之外除古來名器及報時之

鐘、其他悉可鑄換大砲為

皇國擁護之器、及辺海無事之時復又宜銷兵器以為鯨鐘、

遣ノ宣旨ノ出ルヤ全国轟然、大ニ人心ヲ感セシメタリ、窃

ニ聞ク処ニ依レハ、水戸侯ノ建言ニ出タリト、果シテ然ラ

ン、

四五 齊彬公島津豊後へ賜書第一〔嘉永五年〕

○この文書は、「鹿兒島県史料 齊彬公史料」第一卷の第四四九号文書（嘉永五年三月頃島津斉彬書翰）と重複により略す。

四六 全上第一一（嘉永六年）

○この文書は「鹿兒島県史料 齊彬公史料」第一卷の第四七二号文書（嘉永六年五月四日付島津斉彬書翰）と重複により略す。

四七 参考 福岡侯川路左衛門尉へ与ル書

一筆致啓上候、秋暑強候得共弥御安寧奉賀候、扱又參府中ハ不相替万事厚御心配被下、千万忝奉存候、帰国以後早々御文通モ可致存候得共、彼是取紛大延引イタシ候、金山弥以都合宜敷大慶仕候、帰国後如此硯金出申候、



上ハ三本平

量目式拾目

但石喰内卷刃石之見込

上ハ三本平

量目拾六匁四分

但石喰ニ無之金斗ニ候

無類之硯金ニ有之候

右両品ハ容易ニ有之間敷、自慢ニ御座候、早々入貴覽度候得共、無類ニ付来秋參府之上入貴覽可申候へ共、外上八金山ヨリ卷里余海手、人家近キ川之岸ニ樋筋ラシク見へ候処有之候間、坑夫一人見当リ、右石ヲ其者一人ニテ持候位ニ取ユリ候処、砂金五十目有之何モ驚入申候、右様之儀ニ付上八金ツル四方江沢山有之事弥以相分、雀躍之至御座候へハ、外山々々至テ宜敷有之候、

御安心可被下候、

一參府中石炭之事ニ付テハ、色々御心配被下忝奉存候、然処追々差廻シ御用ニモ相成候由、其後得ト取シラヘ候処、上石ハトカク碎ケヤスク、中品、下品ハ碎ケ不申、然ニ是迄弊国ニテ上石ト相唱候儀、第一塩浜ニ相用<sup>マ</sup>之<sup>ル</sup>用ニ宜分ヲ上下存居候得共、

公边御用之儀ハ委細不存候得共、蒸氣船御用候哉、又テール御用ニ候哉、右石炭類多分ニテ抱合品之多少ニ付夫々用ヒ場所違候儀ニ有之候、第一蒸氣船ニ用候石ハ、ネフタリネ、ナトト申、極ネハリ強品、多分抱合之石ニ候得ハ、御用立不仕、右之品ニテ金<sup>(不明)</sup>□ニネハリ付蒸氣立不申候、テール御用ニ候得ハ、油含ミ多キ石宜敷、其外種々之抱合有之旨、和蘭分析書ニ有之候間、先達ヨリ弊国石炭御用ニ相成候品、イマタ分離ニモカケ不申、是迄上品ト唱候石差出シ居候間、実々ハ小子事大心配仕候、兼々御存之通り、弊国中石炭出処多分ニテ、何ケ所ト記シ候事モ出来兼候間、追々委シク分析イタシ候得ハ、蒸氣御用・テール御用・カスランプ御用ト夫々相分候上差上候得ハ、聊心配無之候得共、一向左様之事モイマタ不行届ニ付、差出置候石炭如何

可有之哉、万一ネワタリネ、多分ニ有之、蒸氣御用ニ不相成様相成候テハ恐入申候、右ニ付早々國中石炭不殘分離イタシ度候得共、右様分離線ニ心得候者一兩人之外無之、何分右之者共ハ、差向候海防軍器之用向多端ニテ、急々行届不申、小子事モ差向候用向ニ追レ、

一向寸暇モ無之、存ナカラ打過居候間、右事情貴君迄申上置度、万一御燒拭之上、筑前石炭ハトテモ蒸氣御用ニ不相成、世間一統申立候テハ、残念之至ニ付、委細打明申上置候間、其筋々カ、リノ向江御序ニ可然御咄シ置可被下候、以来御用之節ハ、可相成ハ何之御用ト被仰付候得ハ、猶更難有奉存候、イツレ共其内ニハ分離モイタシ置候様可仕候、蘭人ヘ為見候テモ宜敷候得共、多分之品合急埒モ不仕候、何分共厚御合置可被下候、右之訳合其御カ、リ御役人中方御承知ニサヘ相成居候得ハ、安心仕候間、打明申上置候、

一辰之口(阿部)余程之御不快ト伝承仕、実ニ心配仕居申候、速ニ御全快有之候様日夜存申候、其後如何御座候哉、承知仕度候、

一(筑後守、忠篤、長崎奉行、伊賀守、忠康、目付)水筑(水野)・岩伊(岩瀧)先頃ヨリ弊国通行有之候、其節出会可致存候処、折アシク暑氣ニ相障リ候間、出

会不仕候、イツレモ無障様子ニ有之候、扱又和蘭商売船三艘入津、早々為見廻可罷越候処、暑氣ニ相障候間イマタ不罷越、追々快方ニ付、八月初旬可参ト存居申候、聊當時之事ニ付、御放念可被下候、

一兩家以来参府之期月被仰出、難有仕合奉存候、右御達中ニ恐入候得共、チト不分リ之御文面有之候間、イツレ共長崎江参候節、水(水野)初ヘ承リ可申、又ハ留守居ヨリ其地ニテ伺候様ニモ可相成ト存候、九月引弘十一月中参府ト存候得共、以来蘭船勝手ニ出帆被仰付候故、右ハ日当無之、然ニ九月長崎江参候事ハ、商売船(目付)廿日出帆之御定ニ付、右ヲ日当テニ参候得共、右出帆勝手次第ト相成候上ハ、九月ニ長崎江参候ニ不及候得共、其アタリ如何相心得可申候、其ウチニハ御模様可相分奉存候、其外当番方見廻リ之都合等、奉行迄昨年アタリ申立居候得共、今以御差図ハ無之候、

一魯西亜初御条約相済候旨、委細奉行ヨリ達有之候、先々々ニテ無事ニ可相成哉、如何可相成哉存申候、帰国後大御無音仕候間、用事旁如此御座候、別テ如例大乱毫御推覽可被下候、頓首、

初秋八日

福岡

川路様

二白、時候御自愛專一奉存候、縞金巾一反麩品ニハ  
候得共、先頃唐船初テ持渡候由ニ付進呈仕候、最早  
御覽ハ可被成存候、イツレ長崎相濟候ハ、万々可  
申上候、以上、

緘

川路様

平安極内用御直披

福岡

四八 参考 宇宿彦右衛門書牘（江戸ノ形勢）

今日急キ飛脚被差立候ニ付、一筆奉申上候、弥以無御  
障御勤務被成御座候半、珍重奉存候、随テ私事モ大無  
事罷在候間、乍憚御安心思召可被下候、倍先月便ヨリ  
細々奉申上置候通、其後当地何モ相替儀モ無御座候得  
共、於下田ハ合衆国人自由自便ノ働有之候由ニテ、殊  
ニ街道筋ニテノ横行、如何程制シ候テモ聞入不申、  
公義役人モ押ヘ付相叶不申、自由ニ横行イタシ弥放蕩  
無申計、昨日ハ下田ヨリ江川ヘ参リ候者ノ直話ニ、最  
早商賈御免相成タルモ同前、

公義役人共付添候儀ヲ堅ク相断、市中ニテ取入品モ勝  
手ニ取入レ方願出候処、其通御免有之、市中へ仰渡ニ  
モ、合衆国人自由ニ市中ニテ買入品申出候ハ、何品ニ  
依ラス売渡シ不苦、乍然五文ノ品ハ八文ニ売渡候様、  
被仰渡候由ニ御座候、既ニ

皇国ノ御威光モ末ニ相成、誠ニ歎ケ數次第二御座候、  
此上ハトテモ一戦ニ及ヒ不申候テハ、無事平和ニ治ル  
事ニハ無御座、尤モ合衆国人ヨリ申スニハ、去年ト致  
候得ハ余程此節ハ御叮嚀ニ御取扱有之、今五六ケ年モ  
相過キ候上ニテ、国ノ堅メモ大砲ノ用意モ十分ニ相備  
候上、御一戦ニ被及候思食ニテ、箇様ニ平和ノ御取扱  
ニ候半、何ニシロ少シモ苦ハ無之候間、十分御備付ノ  
上若シヤ御一戦ニ被及候時ハ、イツニテモ御相对可申  
上、戦ト申ハ六ケ敷キモノニテ其位ニテハ逆モ御出来  
ニ無之、一体人身之氣ナト相替リ不申候テハ、出来ル  
モノニテハナシナド、悪口シ散々ノ仕合、日本ハ礼義  
ヲ知ラスコトハ、世界ナキ程ノ国ナリトモ申シタル由、  
我等ハ世界中ニ王命ヲ受テ、使節ニモ差越スニ、何レ  
ノ国モ高官ノ者応接ニ出、書翰ナト受取ノ折ハ、於王  
城有之コソ礼義ニ候処、於日本ハ或ハ浦賀ニ役宅ヲ仮

ニ立テ、或ハ横濱ニワラ屋ヲ設ケ、其処ニテ応接致スハ、大國ノ使節ヲ辱シムルノ道理ニシテ、甚タ不合点ナリナト、色々様々申立、手ニ余サレ候由、ツマラヌ事ニ御座候、乍其上長崎表ニテハ、又魯西亜船参リ候由、細事ハ未タ承リ不申、何分御洩シ奉願候、世ノ末トテ箇様ニ残念ナルコトノ打続クモノカ、天神イカナレハ護リ不給モノカ、

一 江川方ニテ鑄造相成候大砲、八十ポント・三十六封度・二十四ホント、都合四拾挺余、銅ノ組合セモ鑄造ノ手数モ不宜、都テ御鑄替ニ相成筈ノ由、之レモ受人共ノ私欲ヲサシハサミタル処ヨリ起リ候事ニ御座候、公義ハ此事ニテ一万両余ノ御痛ノ段モ日本一ト、クサレノ事ニ御座候、

一 佐久間修理カ事ハ、高木(孫左衛門)ヨリ此内申上候半、弥勢強ク世上日々流行仕来候処、一昨日方ニモ候半、公義ヨリ被召捕候由、段々御不審ノ訳有之由ニ御座候得共、未タ実事相分リ不申候、乍去江川殿ノ嘶ニハ、修理カ門人兩人(吉田ノ一列)下田へ差越、アメリカ船へ夜中忍ヒテ乗入り、アメリカへ是非ニ列レ越呉候様申タルトノ事ニ御座候、然ル処、ベルリハ国法ニ依リ

相断リ候処、不聞入是非々々召列レ可呉旨為申処、ペルリヨリ右ノ段御届其筋ニ申出、直ニ御手相付キ被召捕候トノ趣ニ御座候、権ハ強キ人ニテ候得共、何分当分ノ発明モノニ御座候云々、以下略<sup>ナシ</sup>切レテ

市來様四郎

宇宿拜

〔表紙〕

# 齊彬公史料

市來四郎編

安政元年

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事執筆史料（紙数六十枚）」の記載あり〕

## 目録

魯・英・米ノ三国江条約締結ノ論達

亞米利加国軍艦日本沿海測量願出ニ付論達

營中ノ形況（脇坂家蔵）

魯国軍艦下田ニ於テ遭難

滞在亞米利加人之拳動風説書（脇坂家書類）

在江戸竹下覺之丞地震ノ私報

安政元年、米・英・魯三国ノ条約既ニ成ルヤ、幕府ハ齊彬

公ヲシテ其旨ヲ各藩主ニ通達セシメタリ、而シテ当時外交事情ノ一斑ヲ知ランカ為メ、各種ノ参考書類ヲ左ニ掲ケン、

四九 魯・英・米ノ三国江条約締結ノ論達〔安政

二年〕

〔正弘、老中、福山藩主〔安政二年八月十三日〕阿部伊勢守ヨリ御渡之御書付〕

魯西亜・啖咭利・亞墨利加等ヨリ、別冊之通約条御取替相成候得共、追々諸夷入港ノ上ハ、以後ノ御実備弥以肝要ノ儀ニ付、銘々右ノ心得ヲ以テ、猶又平常覚悟モ可有之事ニ付、為心得条約書相写達候事、庶流ヘモ回達可被致候事（別紙ナリ）

五〇 亞米利加国軍艦日本沿海測量願出ニ付論

達〔安政二年〕

五〇の  
〔広岡、老中、關宿藩主〔安政二年八月十三日〕久世大和守様ヨリ御渡ノ御書附〕

阿蘭陀ノ儀ハ勿論、魯西亜・亞墨利加二国ハ、長崎・

下田・箱館三港ヘ渡来御差免、啖咭利ハ、長崎・箱館

二港ヘ御指免相成候処、亞墨利加国ノ儀ハ、近年清国

ト交易盛ニ相成、

御国ノ海繁ク致通航候付テハ、暗礁等心得不申テハ、

人命ニ拘リ候間、浦々致測量度旨、当三月中下田渡来ノ亜墨利加船ヨリ顯出、追テ挨拶承リ候為メ、渡来可致旨申立出帆致シ候、尤測量ノ儀ハ容易ニ御指免難相成ニ付、追テ渡来ノ節下田ニ於テ精々申諭、敵數御断相成、若亦奈何様申諭候テモ承伏不致節ハ、追テ此方ヨリ応接ノ者彼国へ被差向、政府へ可及掛合ト迄為申談候筈候、併国風制度相違ノ上、論談徹底致シ難夷情ニ候へハ、下田ニテ応接ノ模様ニ寄り、内海迄モ〔乗カ〕入候歎、如何様之次第ニ可相成モ難計、尤是迄モ〔乗カ〕都テ穩便之御取扱相成居候儀ニ付、今般迎モ此方ニテハ、穩ニ相断候積リニ候得共、自然ノ儀出来候モ難計候ニ付、銘々兼テ御心得〔其カ〕ニ可被罷在候、亜墨利加船ハ差出候測量ノ儀申立候書面和解、為心得相達候事、

庶流へモ回達可被致候〔別紙ナリ〕

〔大日本古文書(幕末外国關係文書)ならびに順聖公年譜にて校訂〕

五〇二

回報ニ付齊彬公御口演及使者口上書

阿部伊勢守様ヨリ、魯西亞・啖咭喇・亜墨利加条約和解并御添書、且又久世大和様ヨリ、亜墨利加日本海測量ノ儀ニ付、和解并御添書御口達ノ趣、薩摩守様ヨリ、演説書一通被相添、御通達被致候、

御承知之上、薩摩守方へ其段被仰遣度儀ト存候、右之通御心得申達候様、薩摩守被申付候、以上、

八月十五日

松平薩摩守内

半田嘉藤次

口演之覚

〔二付天、順〕

昨十三日達候、伊勢守殿宅へ相越候処、別紙書面被相

渡、尚又口達ニテ被申聞候へ、右ハ先達約条相成、応

接ノ向へ尋候趣モ有之、此節見置候様トノ事ニ候間、

同席一同へ相達候様、右ノ通約条ニハ相成候事ナカラ、

種々難題申立、反覆難計夷人共ニテ、不容易御時節奈

何様ノ儀到来モ難計候間、其心得ヲ以テ手当向行届候

様可致、治ニ乱ヲ不忘ハ政治第一之事ニ候間、能々致

通達候様、且又同席中名差候テハ難申候得共、格別手

当無之向モ有之、又ハ名目而已ニテ実備無之家々モ有

之様相聞候間、向後ハ急度行届候様有之度、若此上等

閑ノ家々有之候テハ、及御沙汰候義モ可有之候ニ付、

国持庶流迄モ無残所申達候様、猶測量等ノ義、今日大

和守殿宅ニテ御達申候儀モ候間、虚飾無之様精々相達

候様ニトノ事、左候テ御受ノ儀ハ、御披見ノ上以使者  
伊勢守殿へ御受可被仰達候様、御賢息方へモ御通達有  
之候様トノ事、右濟大和守殿へ相越候処、別紙被相渡  
五月過キ参候トノ事故、最早近々可参、何レ御断ニ相  
成可申候、勿論此方ヨリ事ヲ好候儀ハ無之候へトモ、  
応接ノ次第ニ寄候テハ、何時戦争ニ相成候モ難計事故、  
其心得ヲ以テ手当行届候様トノ御趣意ニ候間、不洩様  
相達候様トノ事、御受使者其外伊勢守殿ノ通ニ候事、

(安政二年)  
八月十五日

松平薩摩守

(毛利慶親、長州藩主)  
松平大膳大夫様  
(毛利元徳、同藩世子)  
松平長門守様

外名略ス

御次第不同

(大日本古文書(幕末外国關係文書)ならびに願望公年譜にて校訂)

五〇三

英吉利条約

此度大貌利太泥亜国ノ軍艦総督某ニ相会、長崎奉行水  
野筑後守・御目付永井岩之丞大日本帝国政府ノ命ヲ受、  
薪水・食料等船中必用ノ品ヲ弁シ、又ハ破船修理ノ為  
メ、肥前長崎ト松前ノ箱館トノ二港ニ、貌利太泥亜国

ノ船ヲ寄ル事ヲ指許ス、長崎ハ今ヨリ其用ヲ弁シ、箱  
館ハ此港退帆ノ日ヨリ五十日ヲ経テ、船ヲ寄スベシ、  
尤其地々々ノ法度ニ従フベシ、

難風ニ逢ヒ船損セスシテ、右兩港ノ外へ渡来不相成事、  
(渡ニ脱カ)

此後渡来ノ船若日本ノ法度ヲ犯ス事アラバ、右之兩港  
ニ来ル事ヲ禁ス、船中乗組ノ者法ヲ犯サバ、其船將屹  
度其罪ヲ正サルベシ、

此度約スル兩港ノ外、今ヨリ後外国へ差許ス事アラバ、  
其国ト同様貌利太泥亜船民ヲモ可取扱事、

右之通決定ノ上ハ、尚大日本国大君ト大貌利太泥亜女  
王ト承諾ノ旨委任重臣之書面、今ヨリ十二ケ月中ニ長  
崎ニ於テ取替シ可申事、  
(黄臣天)

右之条件政府ノ命ニ依テ定ムル上ハ、此後渡来ノ船將  
代ルトモ、此約ハカユル事ナシ、

(安政元年)  
嘉永七甲寅年八月二十三日、於長崎鎮府定之、

水野筑後守花押

永井岩之丞之花押

(大日本古文書(幕末外国關係文書)にて校訂)

五〇四

亞墨利加条約

約条



亞墨利加合衆国ト帝國日本ト兩國ノ人民、誠実不朽ノ

和親ヲ取結ヒ、〔鵜飼天〕兩國人民交親ヲ旨トシ、向後可守ケ条

相立候為、合衆国ヨリ全權某ヲ日本ニ差越、〔マテユカルブレト、ペルリ天〕日本君主

ヨリハ全權林大學頭・井戸對馬守・伊澤美作守・鵜殿

民部少輔ヲ差遣シ、勅諭ヲ奉シテ双方左之通取極候、〔目付天〕

第一ヶ条

一 日本ト合衆国トハ、其人民永世不朽ノ和親ヲ取結ヒ、  
場所人柄ノ差別無之事、

第二ヶ条

一 伊豆ノ下田・〔松前地天〕松前ノ箱館ノ両港ハ、於日本國、亞墨利  
加船薪水・食料・石炭欠乏ノ品ヲ、日本人ニテ調候丈  
ハ賜ル為、渡来之儀差許候、尤下田港ハ約条書面調印  
之上、即時相開キ、箱館ハ来年三月ヨリ相始候事、  
一 給ハルヘキ品物直段書之儀ハ、日本役人ヨリ可相渡、  
右代料ハ金・銀・錢ヲ以可相弁事、

第三ヶ条

一 合衆国之船日本海浜ヘ漂着ノ時扶助致シ、其漂民ヲ下  
田又ハ箱館ニ致護送、本国ノ者受取可申、所持之品モ  
同様ニ護送可致候、尤漂民請諸費ハ、〔諸雜費天〕兩國同様ノ事故  
不及候事、〔互ニ脱力〕

第四ヶ条

一 漂着或ハ渡来ノ人民取扱之儀ハ、他国同様緩優ニ有之、  
閉籠候義致問敷候、併正直ノ法度ニハ服從致候事、

第五ヶ条

一 合衆国ノ者又其他ノ者共、当分下田・箱館ニ滞留ノ外  
於長崎唐・和蘭人同様ニ、閉籠窮屈之義無之、〔滯留中天〕下田港  
ノ内小島周リ凡七里内勝手ニ致徘徊、箱館港之義ハ、  
追テ取極候事、

第六ヶ条

一 必用之品物其外可相叶事ハ、双方談判之上取極候事、

第七ヶ条

一 合衆国之船右両港ニ渡来之時、金・銀・錢并品物ヲ以  
テ、入用之品相調候ヲ差免シ候、尤日本政府之規定ニ  
相從可申、且合衆国ノ船ヨリ差出候品物ヲ、日本人不  
好シテ差返候時ハ受取可申事、

第八ヶ条

一 薪水・食料・石炭并欠乏ノ品ヲ求ル時ハ、其地ノ役人  
ニテ取扱スベク、私ニ取引スベカラザル事、

第九ヶ条

一 日本政府外人ヘ當節亞墨利加人ヘ差シ免ルサズ候廉

相免シ候節ハ、亞墨利加人ヘモ同様免シ可申、右ニ付  
談判猶予不致候事、

第十ヶ条

一合衆国ノ船若シ難風ニ逢ザル時ハ、下田・箱館港ノ外  
隈ニ渡来不致事、

第十一ヶ条

一兩國政府ニ於テ、無拋儀有之候模様ニヨリ、合衆国官  
吏ノ者下田ニ差置候儀モ可有之、尤約定調印ヨリ十八  
ヶ月後ニ無之候テハ、不及其儀候事、

第十二ヶ条

一今般約条相定候上ハ、兩國之者堅ク相守可申、尤合衆  
国主ニ於テ、長公会大臣(原書ノマ、)ト評議一定之後  
チ、書ヲ日本大君ニ致シ、此事今日ヨリ後十八ヶ月ヲ  
過キ、君主許容之約条取替シ候事、

右之条、日本・亞墨利加兩國ノ全権調印セシムル者ナ  
リ、

(安政元年)

(嘉永七年三月三日)

林 大學頭花押

井戸 對馬守花押

伊澤美作 守花押

鵜殿民部少輔花押()

(大日本古文書(幕末外國關係文書)ならびに大日本維新史料にて校訂)

右条約本文十二ヶ条ハ、帝國日本全権林大學頭・井戸  
對馬守・伊澤美作守・鵜殿民部少輔ト、亞墨利加合衆  
国全権マテユカルフレト、ベルリト、嘉永七年甲寅三月  
三日、武州横濱村ニ於テ取替セ候事相違無之、此度規  
定之書面豆州下田港ニ於テ、為取替之儀ニハ、井戸對  
馬守ヘ委任セシメ、以後兩國互ニ条約急度相守可申事、  
尤追テ下田ニ於テ取極候条約附録ハ、別紙ニ是ヲ記ス、  
右大君之命ヲ以テ

安政元年甲寅十二月

阿部伊勢守花押

牧野備前守花押

松平和泉守花押

松平伊賀守花押

久世大和守花押

内藤紀伊守花押

五〇の五

亞米利翰条約附録

日本国ヘ合衆国ヨリノ使節提督ペルリ、帝國日本ノ全  
權林大學頭・井戸對馬守・伊澤美作守・都筑駿河守・  
鵜殿民部少輔・竹内清太郎・松崎滿太郎、兩國政府ノ  
權林大學頭・井戸對馬守・伊澤美作守・都筑駿河守・  
鵜殿民部少輔・竹内清太郎・松崎滿太郎、兩國政府ノ

(日本大君天  
浦賀奉行ヨリ下田奉行(船)釜重、下田  
奉行)

(探査、勘定内味役)

()

為メ取極メ置ク条約附録

第一ヶ条

一 下田鎮台支配所ノ境ヲ定シカ為メ、関所ヲ設ルハ其意之俾タルベシ、然ニ亜墨利加人モ亦既ニ約セシ日本里数七里ノ境関所出入スルニ障アル事ナシ、但日本ノ法度ニ悖ル者アラハ、番兵是ヲ捕ヘ其船ニ送ルベシ、

第二ヶ条

一 此港ニ来ル商船・鯨漁船ノ為メ、上陸(船脱カ)三ヶ所定置レ、其一ハ下田、其一ハ柿崎、其一ハ港内ノ中央ニアル小島ノ東南ニ当ル沢辺ニ設クベシ、合衆国之人民必日本官吏ニ対シ、叮嚀ヲ尽スベシ、

第三ヶ条

一 上陸ノ亜墨利加人免許ヲ請スシテ、武家・町家ニ一切立寄ベカラズ、但寺院・市店見物ハ勝手タルベシ、

第四ヶ条

一 徘徊ノ者休息所ハ、追テ其為メ旅店ヲ設ル迄、下田了仙寺・柿崎玉泉寺ノ二ヶ寺ヲ定置ベシ、

第五ヶ条

一 柿崎玉泉寺境内ニ、亜墨利加人埋葬所ヲ設ケ、倉略スル事ナシ、

第六ヶ条

一 神奈川ニテノ条約ニ、箱館ニ於テ石炭ヲ得ベキトアレド、(モ脱カ)其地ニテ渡シ難キ趣ハ、提督ベルリ承諾致シ、箱館ニテ石炭用意ニ及ハサルハ、(様カ)其政府ニ告ベシ、

第七ヶ条

一 向後兩國政府ニ於テ、公頭ノ告示ニ蘭語訳司居合サル時ノ外ハ、漢文訳書ヲ取用ユル事ナシ、

第八ヶ条

一 港取締役一人・港内案内者三人定メ置クベシ、

第九ヶ条

一 市店ノ品ヲ撰ムニ、買主ニ大買主ノ名ト品ノ価トヲ記シ、御用所ニ送り、其価ハ同所ニテ日本官吏ニ弁シ、品ハ官吏ヨリ渡スベシ、

第十ヶ条

一 鳥獸遊獵ハ、都テ日本ニオヒテ禁スル処ナレバ、亜墨利加人モ亦此制度ニ伏スベシ、

第十一ヶ条

一 此度箱館ノ境日本里数五里ヲ定メ置キ、其地ニテノ作法ハ、此条約第一ヶ条ニ記ス処ノ規則ニ倣フベシ、

第十二ヶ条

一 神奈川ニテノ条約取極メ之書翰ヲ差越、是ニ答フルニ  
ハ、日本君主ニ於テ誰ニ委任アルトモ意ノ但タルヘシ、  
第十三ヶ条

茲ニ取極メ置シ処之規定ハ、何事ニ依ラス、若シ神奈  
川ニテノ条約ニ違フ事アルトモ、亦是ヲ変スル事ナシ、  
右条約附録エケレス語・日本語ニ取極メ、名判致シ、  
是ヲ蘭語ニ翻譯シテ、其書面合衆国ト日本全権双方取  
替スモノナリ、

〔安政元年〕  
〔嘉永七年五月廿二日、下田ニ於テ、

林 大學頭花押

井戸 對馬守花押

伊澤美作 守花押

都筑駿河守 花押

鵜殿民部少輔 花押

竹内清太郎 花押

松崎滿太郎 花押

〔大日本古文書(幕末外國關係文書)にて校訂〕

右条約附録十三ヶ条ハ、帝國日本全権林大學頭・井戸  
對馬守・伊澤美作守・都筑駿河守・鵜殿民部少輔・竹  
内清太郎・松崎滿太郎ト、亞墨利加合衆国全権マテユ  
カルフレト、ベルリト、嘉永七年甲寅五月廿二日、豆州

下田港ニ於テ為取替候事相違無之、此度規定之書面下  
田港ニ於テ為取替之儀モ井戸對馬守ヘ委任セシメ、以  
後兩國互ニ条約急度相守可申事、

右大君ノ命ヲ以テ、

安政元年甲寅十二月

阿部伊勢守花押

牧野備前守花押

松平和泉守花押

松平伊賀守花押

久世大和守花押

内藤紀伊守花押

### 同漢文

使節於日本国、合衆国提督彼理、同日本大君之全権林  
大學頭・井戸對馬守・伊澤美作守・都筑駿河守・鵜殿  
民部少輔・松崎滿太郎与、兩國政府以立条約附録

一下田鎮台支配、其境仍旧設為関所巡守、但亞美理駕人  
既条約議定、於日本里教七里境則任從、往来出入境界  
之事有人、或悖犯日本法度、則能緝捕而送回船、  
一下田港或有商船・鯨魚船、須築石澆三個、一築於下田、

- 一 築於柿崎、一築於港内中央小島東南沢辺以便上落、合衆國人民必日本官吏而礼待之、
- 一 上陸之亜美理駕若無相請、則不得入武館・人家、若於寺廟・鋪成則隨便可入、
- 一 徘徊而欲休息者、茲未設備旅店、可於下田之了仙寺・柿崎之玉泉寺二処以定休息、
- 一 柿崎玉泉寺境内以一地、与亜美理駕人埋葬既立墳墓、必無毀壞之、
- 一 横濱所議之条約、言於箱館得取石炭、但因箱館地遠運渡石炭甚難、今提督彼理許諸回奏致知、日本國政無干箱館取石炭、
- 一 向後兩國政府或有公文、往来示告須用和蘭語伝訳、若無蘭語亦以漢文取用、
- 一 下田之港已設締役一人・港内案内者三人置定所、
- 一 凡有人於市店所撰之品、買主乃写名於品上記価、然後店人送至御用所、以価銀交与日本官吏、而取物品、
- 一 鳥獸遊獵是日本之禁所、以亜美理駕人亦要遵從此制度、
- 一 此度箱館之境以日本里數五里、為亜國人行之限而法度亦倣附録之第一条、
- 一 横濱之条約俟後亜國批准、日本君主不論委任誰人可以

奴換、

一 此後附録之条、或有以為不合横濱之条約、則必依於横濱之条約、為准而不變、

右条約附録、英語・日本語以取認名判、蘭語翻譯、其書面合衆國与日本全權官守互換為拠、

〔安政元年〕  
嘉永七年五月廿二日下田立、

五〇の六

魯西亞条約

魯西亞國ト日本國ト、今ヨリ後懇切ニシテ無事ナラン事ヲ欲シテ、条約ヲ定メンカ為メ、魯西亞ケイヅルハ全權アチユタント、セネラール、フィース、アトミラール、エフイミユス、プーチャチンヲ差越シ、日本大君ハ、〔政憲、大目付〕重臣筒井肥前守・〔重鎮、勘定奉行〕川路左衛門尉ニ任シテ、左之条々ヲ定ム、

第一ヶ条

今ヨリ後、兩國末長真實懇ニシテ、各其所領ニ於テ互ニ保護シ、人命ハ勿論什物ニ於テモ損害ナカルベシ、

第二ヶ条

今ヨリ後、日本國ト魯西亞國トノ境、エトロフ嶋トウルツフ嶋トノ間ニアルベシ、エトロフ全島ハ日本ニ属

シ、ウルツフ全嶋、夫ヨリ北ノ方クルリ諸島ハ、魯西亜ニ屬ス、カラフト嶋ニ至リテハ、日本國ト魯西亜國トノ間ニ於テ界ヲ分タス、是迄仕来ノ通リタルベシ、

### 第三ヶ条

日本政府魯西亜船ノ為ニ、箱館・下田・長崎ノ三港ヲ開ク、今ヨリ後、魯西亜船難破ノ修理ヲ加ヘ、薪水・食料闕乏之品ヲ給シ、石炭アル地ニ於テハ、又是ヲ渡シ、金・銀・錢ヲ以報ヒ、若金・銀乏シキ時ハ、品物ニテ償フベシ、魯西亜ノ船難破ニアラサレハ、此港之外決テ日本他港ニ至ル事ナシ、尤難破船ニテ諸費アラハ、右三港ニテ是ヲ償フベシ、

### 第四ヶ条

難船漂流民ハ、兩國互扶助ヲ加ヘ、漂流民ハユルシタル港ニ送ルベシ、尤滞在中是ヲ待ツ事緩優ナリトイヘトモ、國ノ正法ヲ守ルヘシ、

### 第五ヶ条

魯西亜船下田・箱館ヘ渡来ノ時、金・銀・品物ヲ以テ、入用ノ品物ヲ弁スルコトヲユルス、

### 第六ヶ条

若止ム事ヲ得サル事アル時ハ、魯西亜政府ヨリ、箱館・

下田ノ一港ニ官吏ヲ差置ベシ、

### 第七ヶ条

若評定ヲ待ヘキ事アラハ、日本政府是ヲ熟考シ取計フヘシ、

### 第八ヶ条

魯西亜人ノ日本國ニアル、日本人ノ魯西亜國ニ是ヲ待事緩優ニシテ、禁錮スル事ナシ、然レ共若法ヲ犯スモノアラハ、是ヲ取押ヒラキ、〔取押ヘ、処置スルニ天〕 処スニ各其本國ノ法度ヲ以テスベシ、

### 第九ヶ条

兩國近隣ノ故ヲ以テ、日本國ニテ向後他國ヘユルス処ノ諸件ハ、同時ニ魯西亜人ニモ差ユルスベシ、  
右条約、魯西亜ケイヅルト日本大君欵、〔下カ〕 又ハ別紙ニ記ス如ク取極メ、〔今ヨリ天〕 今日ヨリ九月ノ後ニ至リテ、都合次第下田ニ於テ取替スベシ、是ニヨリテ兩國ノ全權互ニ名刺イタシ、〔判カ〕 条約中ノ事件是ヲ守リ、双方聊違変アル事ナシ、

安政元年十二月廿一日

筒井肥前守花押

川路左衛門尉花押

〔大日本古文書〔幕末外國關係文書〕にて校訂〕

魯西亞條約附録

魯西亞國全權セネラール、アチユタント、フィース、  
アトミラール、エフィシユス、フーチヤチント、日本  
國委任ノ重臣筒井肥前守・川路左衛門尉相定ムル所ノ  
條約附録

第二ヶ条

魯西亞人下田・箱館ニ於テ、市中近辺緩優ニ徘徊スル  
事ヲ許ストイヘトモ、下田〔大カ〕ハ文走島ヨリ日本里數七里  
ニ、箱館ニ於テハ同五里ヲ限リトス、尤神社・市店見  
物、且旅店取建迄ハ、定ムル処ノ休息所ニ至ルトモ、〔イヘトモ〕  
人家ニハ招待ナクシテ決テ立入ル事ヲユルサス、長崎  
ニ於テハ、追テ他國ノタメニ取極所ニ從フヘシ、且港  
コトニ埋葬所極置ヘシ、

第五ヶ条

日本ニテ役所ヲ定メ置、品物渡方並魯西亞人持越タル  
金・銀・品物モ、其所ニ於テ取扱ヘシ、魯西亞人市店  
ニテ撰ヒタル品ハ、商人売直段〔賣脱カ〕ニ応シ、船中持渡リノ  
品ヲ以弁スベシ、尤役所ニ於テ日本役人取計ヘシ、

第六ヶ条

魯西亞官吏ハ、〔安政〕三〔一八五六年〕ヨリ定ムヘシ、尤官  
曆數千八百五十六年

吏ノ家屋并地所等ハ、日本政府ノ差図ニ任セ、家屋中  
自國ノ作法ニテ日ヲ送ヘシ、

第九ヶ条

何事ニ寄ラス、外民ニユルス処ハ、魯西亞人ニモ談判  
ナクシテ、一同差許スベシ、  
右附録ノ事件、條約〔本カ〕在文同様是ヲ守リテ、違失ナキタ  
メ、兩國ノ全權名判スルモノ也、

安政元年十二月廿一日

筒井肥前守花押

川路左衛門尉花押

別紙

先達テ日本國合衆國ト取極メタル條約ノ本書、日本  
大君ノ取極メニアラサル時ハ、魯西亞トノ條約本書モ、  
是ニ准シテ兩國ノ執政ニテ取極ヘシ、

安政元年十二月廿一日

筒井肥前守花押

川路左衛門尉花押

別紙

今般魯西亞ノタメニヒラクトコロノ日本三港ノ内、下  
田ハ即時ニ開ラキ、箱館并長崎ハ、日本ノ重臣魯西亞

ノ全權、条約書面取替ノ日ヨリ、三ヶ月ノ後ニ到リテ  
是ヲヒラクベシ、

〔大日本古文書(幕末外國關係文書)にて校訂〕

五一 營中ノ形況(協坂家藏)

五二の一  
三月三日

甚兵衛様御出ニテ御咄ノ事

〔正殿、佐藤藩主〕

一 去月二十二日、於殿中溜詰之御内ニテ、堀田備中守様  
ト〔忠雅、長岡藩主〕牧野備前守様何欵御口論有之、其節水戸御隠居様御  
仲人ニテ相濟候由、

一 其後水戸御隠居様ヨリ、国主共ヨリ申上之儀御取用モ  
無之、就テハ何分存寄モ無御座候ニ付、御在所住居之  
儀御願立被成候由、殿中ニテ御評判、

一 濱御庭御固両御番頭様附組頭、正月二十七日ヨリ以來  
病氣不參届御座候ト、直ニ五人御免ニ相成、平御組子  
之内ニテモ御不參サヘ被成候ヘバ、直ニ御免ニテ、御  
組子之内ニテハ都合拾三人御役御免ニテ、中ニハ御実  
病之御方モ御座候ニ、余リ駭敷御沙汰ニ付、御頭様方  
ヨリ御願立相成候由、右ヶ条ハ甚兵衛様御出之節、御  
咄ニテ伺候ニ付、認取奉申上候、以上、

三月三日

五二の二

米人ニ米穀給与及角力ヲ勸メシコト

藤太郎方ニテ承リ候事柄

一來ル五日迄ニハ、異船追々退帆ニ付、五日ニハ井戸様  
御始御帰府ニ相成候由申聞候、

但シ通商之儀ハ、粗御聞届ニ相成候模様ニ御座候、

一 異人ハ被下之米ハ、五斗式升入俵ニテ、都合五百俵被  
下ニ相成、積出シ場ヨリ浪打際バツテ一ラ迄ハ、相撲  
共相運ヒ、又小揚ケモノモ打交リ運送仕、船縁ハ載セ  
遣シ候ヘハ、異人ハ二人三人宛ニテ引込候由、扱畑中  
ヲ平地ニナラシ、角力取組之勝負ヲ異人ニ為見候義モ  
有之、角力ノ内ニテ小柳ハ大ニ迷惑狩候、異人共追々  
側ヘ集リ、馴々數手ヲ握リ候モ有之、又背中ヲ叩、或  
ハ腹ヲサスリ、亦指ニテ押、何才欵ト色々ノ事致シ候  
ニ付、一人正面ヘ參リ候異人ノ両手ニ両手ヲ懸ケ、強  
ク握リ候ヘハ、骨カクダケルト申候間、相放シ候由、  
此儀ハ藤太郎宅ヘ小柳參相咄候、

一 井伊掃部頭様・松平肥後守様ヘ、浦賀ノ御持場異人退

帆後ニハ、細川・長州両家ヘ引渡シニ相成候由、然ル  
如細川家ヨリ伺ニハ、是迄異人共上陸之節ハ、猥リニ



所々徘徊イタシ、不其上陣屋向見透候儀モ有之哉、以来細川家ニテ請取候カラハ、左様之儀決テ為致間敷、此後右様之節ハ、如何相心得可申哉、若又是迄之通り居被置候ハ、御固メ之詮モ無之ニ付、何卒御断被仰上度之由、

右之通り、藤太郎ヨリ承候付、奉申上候、以上、

三月三日

五  
一  
三

〔海防掛目付上申書〕

神奈川沖へ渡来之魯西亞船へ、今朝支配之向ノモノ為案内差遣シ候処、直様彼船へ可相越旨申入候処、船中支度モ有之候ニ付、暫時猶予有之様致度申聞候、四半時比案内有之、支配向之者召連罷越候処、被付致渡来候段ハ、甚推参ノ儀相当候へ共、唐国英佛トノ戦争モ相平キ、十分之条約取り極メ、直ニ御国へ相廻り候趣キニ相聞、尤御国ノ戦争イタシ候存念無之様子ニ候へトモ、詰リ唐国同様条約取結度内合ト相聞、無程唐国引払ヒ御国へ相廻可申候、其内ニモ佛蘭西ハ多分先キへ参リ可申候、イツレ遅ク致兼、殊ニ亞国軍艦モ神奈川へ相廻り候趣キニ付キ、旁相越候間、此段ハヨロ

シク御承知被下度、アメリカ官吏モ出府拜礼被仰付候上ハ、同様拜礼被

仰付度、右申立候間、右ハ早ク江戸表へ申上可及挨拶、尤モ条約ハ拙者共三人へ取扱被

仰付候間、右否申越候内ニ、此処ニテ条約談判イタシ

候トモ、差支無之旨申聞候処、其通り相願ヒ候趣キニ

付、委任状持参候ヤト相尋ネ候処、此度改テ持参イタ

サス候へトモ、唐国ト条約所結ノ委任状ハ持参イタシ、

殊ニ昨年所結ノ<sup>〔取カ〕</sup>振合ヲモ申立候ニ付キテハ、別人共違

候間、此度アメリカトノ条約ケ条大意申聞候処、右ハ

十分ニ御尽シニテ、斯迄テニ御所置有之候テハ、外国

トノ不和ハ生シ申シマシク、魯国トテモ少々ノ異同ハ

可有之候へトモ、大意ハ此通りニテ、大分宜敷旨ニテ

何レ学案ヲ以談判仕度旨相願、無余儀筋ニ付、先年ペ

ルリ渡来之節ハ、神奈川・横濱等へ休息所設候旨、支

配御代官ヨリ申聞候趣モ有之候間、其節之休息所相成

候横濱村名主ニテ徳左衛門方ヲ、暫時休息所ニ申付、

士官以下ハ病人ノミ上陸為致候様ニ御座候、渡来者国

書等持参不仕候へ共、是迄テ度々為使節致渡来布恬延

之儀、出府拜礼等差拒候ハ、又々何様之害ヲ生シ可

申モ計リカタク候間、御許容相成候方御都合宜可然哉ト存候、尤右御許容ニモ相成候ハ、神奈川ヨリ陸地至テ小勢ニテ旅宿へ罷越候様、精々ニ申談候心得御座候、依之別紙對話書相添、此段奉申上候、右ハ下田ヨリ書翰ヲ以申立、今日談判ノ趣キモ有之候間、急速御下知御座候様仕度奉存候、以上、

六月廿一日

〔尚志、目付、海防掛リ〕

永井玄蕃頭

〔利忠、同、海防掛リ〕

堀 織部正

〔正勝〕

津田半三郎

五一の四

安治川沖ニ異国船渡来ニ付、〔大坂城代〔實直、土浦藩主〕御城代土屋采女正ヨ〕

リ届

以書取申上候、当表安治川沖合へ乗入、碇泊致居候魯西亜船之儀、一通リ先日申上置候得共、定テ種々御心配モ被成、昨日御側使者ヲ以被仰下候間、大略申上置候得共、尚更委細模様御内々申上置候間、左様思召可被下候、尤早速申上候心得ニハ有之候処、渡来後深更迄種々申談寸暇無之候間、甚延引仕候段ハ、不悪御推恕可被下候、併模様ニ寄候テハ、急速可申上心得ニ御

座候処、穩ニ付其儀無之候得共、実ニ差離レ、且ハ御役柄種々御心配之段ハ、御推察申上候、

一去ル十五日、紀州日高郡南鹽屋浦沖合ニ異国船相見へ、追々淡州辺へ颯行候様子、夫ヨリ紀伊殿城下ヨリ、近海未申之方沖合致碇泊、翌十七日晝加太浦ノ方へ颯通り、同日申之刻岸和田近海へ相見へ、翌十八日同所へ滞泊罷在候処、同日未之刻安治川口沖合へ乗入、碇泊致候儀ハ先日申上候得共、其後穩ニ有之、町奉行等早速罷出、夫々差図致シ、先方趣意為相札候処、当所奉行へ書翰差出度旨申聞候得共、当表へ渡来ノ場所ニモ無之、書翰受取候テハ御大法モ相立不申候間、精々申諭候得共、何分承服不致、其内申立候内ニ不容易儀モ有之候間、一応相伺候上ニテ、御差図ノ上ニ無之候テハ、強テ申諭候意味合モ有之候間、右ニテ万々御推恕可被下候、且亦御警衛向ノ儀モ、紀伊殿人数千人余御差出有之、其外尼ヶ崎・郡山・高取其外申達、夫々人数差出、可成ニ御手当ハ致シ置候間、御安慮可被下候、尤最前ハバツテイラニテ、安治川へ乗参リ、上陸致シ書翰渡シ度旨申聞候ニ付、町奉行組之者差留、本船へ相戻シ、川々入口へ小船ヲ以瀬切、上陸致シ不申候様

及差図置申候間、其後ハ格別不埒ノ所行モ無之、尤上陸等ハ渡来之砌、安治川口へ乗入候節差留候、後ハ上陸等ハ致不申候、折々ハバツテイラニテ、本船ノ廻リ杯徘徊致シ、川岸辺へ参リ候得ハ、直ニ小船差出シ差留候得ハ、直ニ本船へ立戻リ候間、強テ上陸致度模様ハ、当時ニテハ相見へ不申候、魯西亜都督名ハフテンテイト申由ニ御座候、人数五百人、大砲五十挺余有之趣ニ相聞申候、此上何卒格別ノ儀無之様仕度奉存候、当時模様ニテハ、先方ハ至テ穩ニ滞泊罷在候間、格別ノ儀ハ有之間敷ト奉存候、且又市中等ノ儀モ御安思被仰下、探索仕候処、格別ノ儀モ無之、乍去金相場杯ハ少々引上ケ候位ノ事ニ御座候間、御安慮可被下候、其御地ニテハ、種々風説モ有之候趣、昨日御家来ヨリモ申聞、御尤ノ儀ニ奉存候間、事実御内々申上候間、左様思召可被下候、自書ニテ書取可申上候、町奉行共モ深更迄モ罷越、種々申談有之、何分手廻リ兼候間、側ニテ為書取申上候間、不悪御推察可被下候、以上、

九月廿三日

五一の五

〔大坂城代上申書、老中へ〕

去月十八日、当地安治川沖へ渡来之魯西亜船、御下知之通り下田港へ可相廻旨申諭、〔中略カ〕昨三日辰中刻、俄ニ安治川沖退帆仕候義ニ付、申上候書付忝通、〔顯究、大坂町奉行〕佐々木信濃守、〔修統、同〕川村對馬守差出候ニ付、進達之仕候、猶委細之儀ハ追々可申上候得共、不取敢此段以刻附申上候、差急キ私一名ニテ申上候、以上、

十月四日

土屋采女正

〔大日本外史文書纂末外國關係文書にて校訂〕

五一の六

安治川沖魯艦退帆ニ付、土屋采女正ヨリ御書取

去月十八日、当地安治川沖へ渡来ノ魯西亜船、昨三日辰中刻俄ニ安治川退帆、近海飄廻、同末中刻紀淡沖合へ飄向候様子ニ付、早速見留船差出候処、折角大風高波ニテ難乗付、塩煙ニテ帆影モ見留兼候得共、紀州加太浦辺へ向ケ罷越候哉ノ旨ニテ、尤見切船差出置候ニ付、行先見留候上、猶可申聞旨町奉行共ヨリ申出、右ハ追々御沙汰ノ趣モ御座候ニ付、精々為申諭中ニ御座候、

右大意ハ、当所ハ応接之地ニ無之候間、早々下田へ可相越、食乏ノ儀申上候得共、輕キ品ニテモ江戸へ伺候

上ニ無之候テハ、遣シ候様相成不申、伺候共国法ニテ品物ヲ吝ミ候ニハ無之候得共、当地ニテ遣シ候様ニハ相成間敷、乍去早々此港ヲ退キ、内海ヲ離シ、大洋へ出候テ、下田へ相越候ハ、其途中食料ハ不得止事候間、全奉行ノ取計ニテ可遣哉、必国法ニハ無之候趣申論中ニ御座候処、右ノ次第ニテ、未定ト帰帆相成候哉否ノ儀ハ、難相決候得共、御厚配被為成候御儀ニ付、不取敢御内々此段以書取申上候、猶追々治定ノ上可申上候、以上、

十月四日

五一の七

魯西亜船艦大坂港ニ渡来

甲寅十月、魯西亜船大坂港入津ニ付、同所奉行ヨリ下田奉行へ之掛合書并魯西亜船へ相渡候証書

当九月十八日、魯西亜師船壹艘大坂港へ渡来、安治川沖へ碇泊致シ候ニ付、拙者共組与力兩人、同所御船手組与力耆人ニ、右夫々同組同心共差添、夷船へ乗組及引合候処、大坂御奉行台下ト、漢文ヲ以テ認候封書差出シ候得共、当地ハ応接之地ニ無之候間、難受取趣申論シ、碇泊中追々及引合候上、取計方之儀江戸表へ相

伺候趣モ有之処、当地ハ外国応接之場所ニ無之候間、早々長崎・下田之内へ可相廻旨、申論シ方御下知有之、(改平、勘定奉行) (近頃、同) 且石河土佐守・松平河内守・川路左衛門尉ヨリモ、伊勢守殿御内意之趣ヲ以テ、同様之次第、且ツ簡井肥前守・川路左衛門尉先達テ於長崎、及応接候魯人布恬廷ト申モノニ候ハ、右兩人待受居候儀有之、可成ハ其地へ相廻候様可申論旨等申越シ候ニ付、其段為申聞候処、其儀ハ承知致シ居候体ニ候得トモ、其地へ相廻候証書ヲ望ミ候ニ付、別紙之通認与へ、同紙同文之卷書ヲ各様方へ相廻置候趣モ申聞候、依之為御心得、右別紙差進申候、

一 右船中材木・食料之數乞求候へトモ、前書之通り、当地ハ応接之場所ニ無之候ニ付、容易ニ難差遣、併水ハ必要之品ニ付難捨置、依之先ツ拙者共限り之存寄ヲ以テ、水計当所ニ於テ相与へ候、其余之需物ハ江戸表へ伺之上、及沙汰候趣申論シ候内、追々急キ立御地へ相廻候ニ付テハ大海ヲ難走、又何ヲ食シ可申抔ト申立、一体軍艦之義ニモ有之、食料等ハ相応貯モ可有之義ニ候得トモ、イツレモ穩ニ申論シ、早々御地へ相廻候様可取計旨、厚御沙汰之次第モ有之候間、速ニ当港退帆

内海ヲ相離候儀ニ候ハ、水同様拙者共存寄ヲ以、大

洋口ニヲヒテ相与候積申立候処、当月三日早朝何之沙

汰モ不致、俄ニ当港出帆致シ候ニ付、不取敢大洋口紀

州加田浦へ、前書与力・同心共差向、右需物之品モ船

積致シ差出候得共、同日并翌四日トモ大風高波強ク、

右品物積入候船加田浦へ難乗付、異船ハ四日朝加田浦

へ着船致シ罷在、与力・同心トモ追々同所へ罷越候得

共、何分右品物着不致内異船出帆、差急キ難止次第ニ

相成、前書申聞候趣致相違候テハ、如何ト心配致シ候ニ

付、不取敢紀伊殿役人へ申談、加田浦ニ有合候需物ニ

引当候品之内、少々調達致シ、異船へ相送候処、一旦

ハ同船へ取入候ニ付、跡品追々差越候趣、仕形ヲ以相

論候内、何故哉一旦船中へ入候品、右運送船へ差戻、

其似同所出帆致候、右ハ出帆差急キ速敷場所ニ付、論

之趣解兼候哉、又ハ右相送り候品而已ト心得、不伏ヲ

生シ、右体之及仕義候義ニモ可有之哉、何分難相分、

其節可申論演舌書并相送候品之目錄等モ、可相渡積候

処、是亦未タ相渡不申内右体出帆致候ニ付、早速見留

船追々差出候得共、最早遙ニ乗出、阿波土佐之冲手大

洋ニ至リ候趣ニ有之候間、其海港へ相廻リ候ハ、右

掛違之次第御心得、御取扱有之様致度候事、

寅十月

佐々木信濃守

川村對馬守

伊澤美作守様

都筑駿河守様

別紙

魯西亜師船壳艘、以去月中旬到於大坂之港、因宜諭命

令東到下田授以此文書、以為他日下田奉行之証左ノ如

シ、

(安政元年)  
嘉永七年甲寅十月

佐々木信濃守

川村對馬守

下ケ札

此証書当港出帆以前相渡候様、類ニ申立候ニ付、弥出

帆以前本書相渡候旨、演說書相添、先ッ草稿相渡置候

ニ付、追テ本書相渡候節、右草稿可差戻旨仕形ヲ以申

聞候得共、終ニ草稿不差戻、本書并草稿トモ受取候俟

出帆致候、尤モ草稿之方ハ、九月之日付ニ認有之候、

魯西亞船豆州沖渡来ニ付、都筑駿河守届書〔家裏、下田奉行〕

今十四日辰刻頃、下田ヨリ西手豆州石廊崎沖合へ、夷船老艘東へ向間切居候様相見候段、武山遠見番ノ者ヨリ届出、近浦々ヨリモ追々同様届出候後、右本船ハ神子元沖ニ間切居、未刻頃舩ニテ異人拾五六人乗組、手石浦の方へ漕参リ候ヲ漁船見付、当所ヨリ兼テ差出置候水先案内船へ為相知候ニ付、右船方之者共差心得、異人乗組候舩へ乗附、申刻頃当湊へ引入、応接之者罷越候ヲ待受候様申聞候得共、不承受押テ上陸致候折柄、応接掛リ与力・通詞等罷越、同所ハ仕越御普請ニ付、混雑之場所ニ候間其段申聞、市中ヲ離レ候港内柿崎村浜辺弁天堂へ、右舩ニテ連行、一ト通り及応接候処、当月三日大坂安治川退帆致候魯西亞船之由、筒井肥前守等罷越居候へ、直ニ応接可致、若シ到着無之候ハ、直ニ江戸表へ可相越旨、夷人共申之候間、肥前守等最早江戸表発足致候頃合ニモ候間、江戸表へ罷越候テハ、定テ行違不都合ニ可有之候ニ付、何レ当所ニテ相付可申、尤薪水・食料等欠乏之品差支無之様、取計遣旨申聞、且大坂町奉行ヨリ相渡候証書之儀ヲモ相尋候処、本船ニ差置候旨申出、尤当港へ碇泊可致否ハ、

明朝可相答旨異人共申之、右舩ニテ一同立戻リ申候、右ハ何レニモ当港へ引付候見込ニ付、支配組頭トモ評議之上、当春中之振合ヲ以テ、大久保加賀守・太田攝津守・水野出羽守へ、人数差出方申達置、先不取敢此段御届申上候、以上、

十月十四日

都筑駿河守

〔大日本占文書(幕末外國關係文書)にて校訂〕

五一の九

魯西亞船下田港へ廻航ニ付、水野出羽守ヨリ内藤

紀伊守エ届書

昨十四日、異国船老艘下田湊ニ渡来之處、去ル三日大坂安治川沖退帆之ヲロシヤ船ニテ、別条無之候得共、当春ノ振合ヲ以テ、固人数差出候様、下田奉行都筑駿河守ヨリ、白濱詰家来之者江相達候段、今夕申越候ニ付、早速一番・式番手人数差出申候、此段御届申上候、以上、

十月十五日

水野出羽守

五二 魯国軍艦下田ニ於テ遭難

寅十月十五日渡来魯西亜軍艦フレガット

船号デアナ

船長三拾貳間余

使節フーチヤチン

船主リツスチ

次官通弁官兼ボスセツト

乗組五百老人

内水夫三人滞留中死去、柿崎村玉泉寺ニ埋葬、

大砲五拾貳挺

右ハ条約為取結渡来碇泊中、寅十一月津波ニテ船破損

所出来、為修復豆州戸田村港御貸渡ニ相成、同月廿六

日当港出帆、十二月二日駿州宮島村沖ニテ逢難風沈没、

一卯二月廿七日渡来亞米利加商船スクーネルへ乗組、魯

西亜人使官九人・下官百五拾人、同廿九日戸田村出帆、

一三月廿三日、戸田村ニテ新造之シヨナ<sup>船</sup>号へ、布恬廷始

百人程乗組、カムシヤツカへ退帆、

一六月朔日、アメリカ商船ケレータフ<sup>船</sup>号へ、残ル魯人シ

ルリンチ、ウロススホフシキン、ガリヨースケ始下官

共乗組、戸田村退帆、

五三 滞在亞米利加人之挙動風説書 (脇坂家書

類)

一亞米利加人へ応接モ毎々有之、被下モノ杯相濟、当月

十日・十一日比ニハ退帆之趣ニ御座候処、又少々故障

ニ付、今暫滞船致シ度旨ニテ、只今碇泊ノ場所ハ風当

リモ強ク御座候ニ付、品川沖迄乗入度迎、已二千日杯

ニハ無断乗入サウノ勢ニ相見へ候由、猶又御懸合中ニ

テ、林様・井戸様共神奈川ヨリ毎々御登城御座候意味

合ハ、未相分兼候得共、異人共御ユルヤカノ御取扱ニ

付、少シ凶ニ乘リ参リ候由ノ風聞ニ御座候、

一横濱在家へモ、異人猿ニ徘徊致シ候、只々見へ隠レニ

与力・同心氣ヲ付候計ニテ、強ク制シ候義モ出来兼、

誠ニ俗ニハレモノニサワリ候ト申事柄ノ由、剩へ横濱

在家へ異人入込、百姓何某ト申モノ、女房出産致シ、

漸ク十日程相立候、亭主ハ農業ニ出居、婦人計リ居候

場所へ上リ参リ、不計産婦ヲ犯シ懸ケ候ニ付、大声ヲ

揚人ヲ呼候ニ付、漸ク近所ノモノ参、異人ハ追遣リ候

得共、婦人血上リ相果候由ニ御座候、右様ノ類婦人ニ

懸リ合候儀ハ、毎々御座候由、

五四 参考 在江戸竹下覺之丞地震ノ私報〔安政二

年〕

五四の一

今日飛脚被差立、一筆大変ノ次第申上候、然ハ去二日  
夜四ツ時分ヨリ大地震ニテ、其上出火、御屋敷ハ無難  
ニテ、上様御機嫌克、御前様其外御子様方無御別条、  
外御庭へ被遊御迦、先ハ御同慶奉存候、終夜御野宿〔外  
御庭広場へ布屋中ニ御通夜〕ニテ、翌三日朝、澁谷御屋敷  
へ無御残御一同御引越被為在候、上御屋敷ハ御殿廻リ・  
大奥等大破損ニテ、迎モ御住居不相叶候ニ付、此涯之  
処澁谷へ御逗留ノ筈ニ候、楮上屋敷芝邸ハ、輕我人モ  
無之、此節江戸第一之無難ト申ス事ニ候、何分筆紙ニ  
難尽大変ニ御座候、当夜ハ震リ出スト一統出殿大騒動  
ニテ、其后今ニ日夜五六度ツ、ユレ通シ、昨夜ハ四度  
飛ビ出シ申候、右ノ次第委敷申上度奉存候得共、何レ  
後音ニ可申上、大混雑中大略如斯御座候云々、

十一月四日

竹下

五四の二  
某氏地震ノ私記

〔安政元年〕

嘉永七年甲寅十一月四日、辰中刻三部過出勤、御長家

五六間歩ミ出シ〔タカ〕ト、大地震世間騒々數鳴リ渡リ、御長

家杯ムリトユリ出シ、既ニ崩レシトスル形勢、皆

人内ニ居ル事不相成、刀ヲ取ルモアリ、取ランモアリ

テ、駈出シ外ニ出候得共、立テ居ル事不相成、中々舟

中大ハヘナゴリニ南風浪〔ヤマ〕ノ方言ニ逢タル様、目モクラ

メキ、皆俯伏シテモノイフ人モ無之、拙者ニハ石垣へ

倚カ、リ居候処、石垣モユラヒトイタシ、トウイ

フ事カ到来スルカト、皆人愕然タラストイフ事ナシ、

此〔北カ〕ノ方ヨリユリ出シ候ニ付、北国ナランカ、又ハ去年

ノ通り箱根ナランカ、取々ノ評判ニテ候、

一高輪御ヤシキハ勿論、高輪近辺ハ格別ノ痛ハ無之、間

々土壁杯ワレ候処有之候、上御屋敷ハ土蔵ノ土杯落候

由、宇田川町・久保町ノ辺強ク、古家ノ瓦又ハ土蔵ノ

土杯落候処有之、拙者ニハ当日益満與右衛門ト手並〔

同伴ノ方言〕金六町辺迄差越、瓦杯落候所ヲ直ニ見、大

破成事ニ候、

一外櫻田南部様御長屋倒レ、三人輕我人有之、十八才ニ

成娘ト五ツニ成男子ニテ候由、誠ニヲシキ事ニテ候、

其外瓦ノ頭ニ落カ、リ候テ即死ニ候、又ハ鼻ヲ打欠候



モノ有之候由、是ハ岡田氏ノ嘶ナリ、

一 当日昼夜十度計モ地震イタシ候得ハ、外へ出張リテモ

無之候、五日夕方ノ地震相応ニテ候得共、初度ノ半分

モ無之候、十日方迄始終間々地震致シ候、

一 同八日ノ日、御城主ヨリ永井氏へ申来候、左ノ通、

即死四人程

潰家四軒

右島田宿

宿内不残破損

右藤枝宿

同断半潰

右岡部宿

同断少々潰家

右舞子宿

宿内呉服町ト申所ヨリ出火ニテ下横田ト申所迄焼失

右府中宿

宿内橋向ト申処迄東之方焼失

但清水湊焼失

右江尻宿

宿内少々、破損

右興津由井宿

宿内不残潰家

間屋場ヨリ西之方老町程焼失

但岩淵家数三拾軒程焼失

右蒲原宿

宿内不残潰家

老町余焼失

右吉原宿・原宿

宿内過半潰家

右沼津宿

右之外駿府ノ城内并久能山下田杯入込之場 (田地ヲ云

乙) 所ハ全相分リ不申候得共、下田湊津浪之儀ハ相違

無之由、怪我人多有之候由、

同十一日ニ相良助大夫 (常長旧名)・愛甲新右衛門疏人

継使者才領ニテ出府候付、左之通、

一 沼津之駅へ朝四ツ前着イタシ候処、忽チ地震ヒ出シ、

地中雷明ノ如クナリ渡リ、立居事モ不相成、人馬共ニ

倒レ、一瞬目之間ニ地裂ケ、堅横十文字ニワレ候由、

漸ク溝ヲ飛越、畠ノ中へ桐油ヲ敷、俯伏イタシ居候内

ニ、沼津之宿人家倒レ、其上出火ニテ右往左往ノ大騒

動ニテ、中々人心地モ無之、筆紙ニ不被尽大サワキニテ候由、左候テ九ツ時分ニ相成、少々静々腹モスキ候間、問屋場へサシ遣シ、宿手当共飯杯ノ儀申遣候処、宿付ル(宿泊ヲ云フ)様成所一軒モ無之候、勿論宿手当所ニモ無之、漸クニキリメシニ付ケ物(漬物)差遣、其夜ハ夜宿ニテ候由、左候テ其翌日半倒之家ヲ借入、尾州之家中同宿ニテ、三日滞在イタシ、橋杯モ落、通り不調候由、

一 沓町程モ真一文字ニワレ所モ有之、堅横十文字ニワレ候所モ有之、三分丈計モメリ込(凹之意)、家杯谷底ニ見候処モ有之、或ハ三尺計地中ノ盤飛出候テ、水浮出、往還之田地杯ヨリモ水流レ出、沓式尺モ登込、通行モ出来兼候テ、殊之外成大破ニテ、目モアテラレヌ次第ニテ候由、

一 箱根御関所ヨリ上方ノ方強ク、夫ヨリ東国の方ハ格別不相痛候由、

右相良助大夫杯直咄之由ニテ、鎌田與助ヨリ麓坂ニテ行逢、立留リ候テノ嘶也、夫故龜写ニテ候(相良・

愛甲ハ、琉球王子代理使ニテ出府ノ途中)

一 十月廿九日飛脚出立候、御兵具方与力兒玉源五右衛門

外ニ一人、其外兩人同出立候、新屋渡ニテ荷数多ク、船三艘ニ取仕立、源五右衛門ハ同立候鮫島金兵衛トイフモノト、半時計先ニ乗出、先ノ都合イタシ候トテ乗出候処、沖中ニテ船底サラ／＼トナリ候間、是ハ瀬ニ乗掛タカト申候所、船頭地震ナリト申内ニ、沖之方ヨリ大波起リ、船頭是ハ大変大地震ニテ候、イツレ此舟荷打方(荷物投海之方言)不致候テハ、タマリ兼候ト申候付、如何様成事候共、御用物荷打方不相成トイフ内ニ、沖ニカ、リ候大船打クリカヤシ(顛覆ノ方言)、一瞬目ノ間ニ闇夜ノ如ク、何事モ不相分様ニ相成、船頭ハ忽チ声ヲ張上ケ啼キ出シ、源五右衛門杯ハモハヤ致方無之、死ヲ極メ相ハマリ、単物一ツニ相成、大小差候テ此舟ヲ離ルヘカラス、鮫島ト申談シ、混ト舟涯ヲニキリ候内ニ、大波二三ツ打越、直ニ舟ハ水舟ニ相成、荷杯ハ一ツモ無之様ニ相成(大波総テ土泥ニテ候由)、中々其所ノ困窮筆紙ニ不被尽候由、左候テ暫時波モ静候処、助船一艘参リ、夫々乗移リ、御関所ヨリ下ノ方半道計ノ所へ着イタシ、大庄屋方へ差越候様トノ事ニテ、直ニ差越候処、着替杯為致、別テ叮嚀ニテ候由、直ニ惣兵衛(本陣ノ名)方へ申遣候処、直ニ着越候付、則荷

搜方等申付、勿論外二艘之舟ハイマタ瀬戸内ニテ、松山ノ中ニ渡リ込、無難ニテ候由、拾七八荷ノ内漸ク六ツ程上リ、右宗兵衛所へ二日滞在イタシ、相サカシ候得共、イマタ不相見得候ニ付、源五右衛門ニハ江戸表へ立帰リ、御届申立候由、

一新居宿総テ相潰レ、宗兵衛所老軒立居候由、

一御関所総テ相崩レ、門五尺程メリ込候由、

一船一艘モ無之相成、夫故渡方不出来候由、

一源五右衛門杯両日滞在ニテ、相サカシ候得共、荷不相見候付、此上ハ一人ハ江戸表へ立戻リ、成行可申出申

談、源五右衛門立戻リ候由、然処新居渡リ不相調、宗

兵衛世話ニテ辺路道通り候由、勢州津ノ飛脚モ一所ニ

相成候テ、相立候処、殊ノ外成大地震ニテ、津ノ御城

モ相痛、市中杯モ段々相潰候テ、右ノ注進ニテ候由、

名古屋辺モ大痛ニテ候由、

一東海道筋橋々落、其外道中破損ニテ、人馬通融不相成、

一人立ハ漸ク通行イタシ候由、

一当日富士川干川ニ相成、步渡イタシ候処、翌日兼テヨ

リ水相重、殊ニ川中へ瀬湧キ出候由、

一下田湊大津波、千軒余ノ家漸ク二三拾軒モ相残り、人

馬怪我人数不相分、初ノ波ハ二間余モ参リ、二度メ三

度メハ五間程モ参リ候由、筒井殿(紀伊守)・河路殿(左

衛門)其外御役々(魯国船処分ノ為出張)身ミスカラ漸ク

被立退候由、所持道具総テ紛失之由、大小舟共老艘モ

無之相成、殊ニ無慘ナルハ、異国人固メノ舟人共ニテ、

何方へ流失イタシ候ヤ、全ク跡カタモ無之、則異人方

ヨリハツテラニテ差遣候得共、是以同断之由、

一異舟ハ無難ニテ候由、併余程難儀ハイタシ候由、波シ

ツマルト直ニ御機嫌伺申出候由、運ノ強キ事ニハ、朔

日ノ日応接ニテ候、此節ハ応接場少シ相替リ、夫故兼

テノ所ヨリ前日沖ノ方へ乗出居候由、

右源五右衛門十二日ノ晩ニ直断之由承候得共、人伝

ニテ聞違ヒ、過不及モ可有之候半、

五四の三

同十六日飾屋喜太郎方ヨリ差出候書付、御国許へ差

下候書

一当月四日辰中刻大地震、半刻計振ヒ、市中式百余ヶ所、

外ニ宮寺杯大崩ニ相成候、

一同五日暮六ツ時又大地震、安治川式文計津浪打入、破

船余多、死人不相知、橋九ヶ所落候、

寅十一月

伊勢屋兵衛

藤田様

一泉州堺・攝州兵庫・尼崎、大地震ニテ人家相潰候、勢州津・松坂大地震、同刻松崎浦津浪ニテ流レ、怪我人、死人多シ、

同某氏私記

一 大坂御ヤシキ御長屋（土佐堀ニ在リ）大痛、書役杯被召置候御長屋栖居不相成候由、御式台杯ハ差支無之候由、一 御仕登米（国産米販売ノ為メ）着帆候三拾石積ノ小廻シ五艘、津浪ニテ行衛不相知、則見聞役本田孫次郎杯被遣候得共、未何分不相分候由、其外安治川筋へ繫居候大小舟共、総テ相痛候由、

右式行御用部屋へ御届相成候由ニテ、四本助左衛門ヨリ承候、

一 掛川宿大痛ニテ、六百人余全ク不相知候由、其内ニ足輕杯多人數通行之砌ニテ、是以不相知候由、

右濱田林兵衛ヨリ承候由、

一 伊豆ノ大島津浪ニテ、（産カ）浜渥ノ人家総テ相潰候由、死人

不相知、地震ノ事ハ不相分、初ノ浪ハ卷丈計參リ、人家アスコソコニ（各所）残り居、皆々岡へ逃上リ、浪引候間諸道具取ニ差越候処、式度ノ津浪ハ三丈計モ參リ、惣テ家洗ヒ崩候由、  
右永山新兵衛、

同

一 大和辺ヨリ信州・甲州辺へ、大地震ニテ候由、上州辺ヨリ日光辺モ、大地震之由候得共、未ヨク不相分候、

高輪齊興公様此節着帆大廻舟大榮丸へ、御糺左之通リ、

一 大廻船大榮丸（鹿兒島ヨリ江戸へ米穀其他物品廻漕船之通唱）十月晦日兵庫へ入船、四日晚迄滞船仕候処、四日朝五ツ半時分地震強、瓦杯落申候、

一 五日朝兵庫出帆、紀州路淡路へ拾三里計走り候節、暮六ツ過地震、四日ノ地震ヨリモ余程強、舟中ニコタへ（響ノ通言）申候由、五日之晚紀州之内田部ト申所并淡路之内ニモ出火御座候、其外ニモ段々出火有之候由、  
一 七日紀州之内地震、時々強ク弱クユリ申シ候由、

一 紀州路入口ヨリ、伊勢之安乘迄百里余ノ海辺、都テ四

日五日之地震津浪ニテ、大小之破舟、其外家・蔵等流

失又ハ岡杯ヘ舟打上有之、海上ニハ材木等流レ申シタ

ル事ヲヒタ、シク御座候由、

一 浦上湊ニテハ、十一日カ十五日カ又々大地震之筈ト申

候テ、人々岡ヘ木屋掛ニテ罷居申候由、安乘港ヘハ津

浪カロク、少々痛ミ所御座候由、

一 十一日浦上湊出帆、遠江ナト何事モ無御座候、十二日

夜半時分浦賀ヘ着帆仕候由、

右之通り、十一月十五日大榮丸船頭ヨリ申出候由候

事、

一 北方ニテハ

日光

地震強候得共、御宮之外安全、

下總

銚子

松岸

津浪大地震、

信州一円

甲州一円

上州

野州

何分地震強候得共、破損ノ様子格別ニ無之候由、

右高輪ウラ町ノ地主田中(不明)ヨリ申出候事、

一 原・吉原ハ人馬繼立候得共、其外ハ総テ自分雇之由、

又京極殿着之筈ニ候得共、総御供ハ不相調、漸ク御手

廻計ニテ着之筈候由、

右十一月廿四日承候事、

一 阿波様并隠岐守様伊豫松山ヨリ為御知申来候由、隠岐

様ヨリハ七日ノ地震殊ノ外強ク候由、死失何程トイフ

事未不相分候由、

右四本助左衛門(御用部屋筆者)ヨリ、十一月廿四日

承候事、

一 御殿中間其外錫(錫地金)才領等ハ、昨日着イタシ候ニ

付、東海道筋人馬繼立随分相調候半、去ル七日伏見川

登リニテ候由、左候得ハ十八日之道中ニテ候間、漸ク

通行イタシ候ニ付、未委ク不相分候ニ付、追テ可相糺

候事、

右寅十一月廿五日シルス、

一 阿波国ハ余程大破ニテ候由、稻田九郎兵衛トイフ者ハ、

彼国ニテ大家ニテ候由、家財等迄何モ無之紛失イタシ、  
刀大小被差候俣ニテ候由、勿論取納ノ(年貢)時分ニテ、  
藏々ハ米杯積入置候処、総テ紛失イタシ候由、其外ノ  
人々思ヒヤラレ候、

右十一月廿五日岡田氏嘶也、

一京・大坂等へ、毎日程町飛脚仕出有之事候得共、此節  
之地震ニテ往来無之、飛脚問屋ヨリ辻々ニ張紙、書状  
又ハ金子入等少キ品ハ廿二日ヨリ可差越、大キナル品  
ハ未相調トノ段相触候由、

右十一月廿六日飾屋喜太郎嘶也、

一安房・上總ハ地震殊之外弱ク候得共、上總ノ内外海ノ  
方ニ、九拾九里トイフ漁場有之、此辺殊之外片ヒキ、  
魚杯過分引残サレ候間、人々走統キ拾方イタシ候処、  
俄ニ大津ナミ打寄候テ、過分ノ死失ニ相及候由、  
右炭屋長左衛門トイフモノ、十一月廿八日嘶ナリ、

五四の六

同

一寅二月二日ヨリ同六日迄迄、箱根山大地震ニテ、二子  
山辺ヨリ大石ノ落ル事大粧ノ事ニテ、小田原城并市中  
田家(農家ヲ云フ)共ニ大ニ潰レ、人馬等モ多分死失ニ

相及候由、御関所ヨリ上方ノ方へ、格別強クハ無之、  
石杯(抜カ)祓ケ落候所格別無之、二子山ヨリ海手小田原城下  
へ限り大痛ニテ、往来モ相留リ候由、

一同六月十四日、勢州・尾州・濃州・江州・山城・大和  
杯ニテ、大坂迄モ相応ノ地震ニテ、大粧成輕我人有之、  
就中四日市トイフ所ハ出火ニテ、拾人計ノ家内者人モ  
不残死失イタシ候家モ有之、夜八ツ時分ヨリユヒ出シ、  
大雨大雷ニテ外トニ出候得ハ、瓦ノ落ル事雨ノ如ク、  
中々ソロシクシテ、無是非内ニ居候得ハ、家倒レ夫  
ヨリ火起リ、実ニ目モ当ラレヌ有様ニテ、過分ノ死失  
怪我人等モ有之タル由、尤伊勢之内モ同様成大破ニテ、  
外宮并天ノ天戸モユヒ潰フレ候得共、

御本宮ハ確乎トシテ御安全被為在候由、且又去年何月  
ニテ候ヤ、伊勢ノ内海上十里四方計、血ノ如ク赤クナ  
リ、大小ノ魚蟹杯ニ至ル迄死候テ打寄候由、兼テ百疋  
余モスル魚杯、三拾貳文・拾六文位ニテモ買手無之候  
由、ケ様之事共到来、今日ノ知セナラムト或人ノ嘶ナ  
リ、

五四の七

(長明、鳥羽藩主)  
同稻垣攝津守届書

一拙者在所志摩国鳥羽、去ル四日辰中刻大地震ニテ、城内塀・櫓・門・侍屋敷・長屋向涯破損流失夥敷、〔弱力〕弱死怪我人等之儀ハ未相分不申候段、在所役人共ヨリ申越候、委細之儀ハ追テ御届可申上候得共、先此段御届申上候、以上、

十一月十五日

稻垣攝津守

五四の八

同江戸屋伊三郎報告書

一当四日大坂大地震、五日津浪市中橋々潰家有之、両川々大船・小船一時ニ押込、数多破損、其上阿治川橋・船附橋・龜井橋・汐見橋・鍬橋・幸橋・水分橋・日吉橋・住吉橋・白金橋・大黒橋夫々流落、阿治川口木津川橋洗流、尼ヶ崎余程損シ、其外灘目少々土蔵・高塀潰候得共、格別之儀ハ無之候、  
一京都大地震御座候得共、無別条候、  
一勢州松坂・津・泉・川崎〔同〕・桑名・尾州宮・名古屋・岡崎・吉田余程損申候間、為御知申上候、以上、

十一月十五日

江戸屋伊三郎

五四の九

〔同松平阿波守届書〕

一私領分阿波国・淡路国共、去ル四日辰中刻、同五日申刻稀成地震ニテ、城下諸士屋敷市郷共潰家不少、其上所々出火ニ相成、同六日晚ニ至リ及鎮火申候、尤城内別条無御座候、且又人馬怪我其外委細之儀ハ、追テ御届可申達候得共、先此段御届申達候、以上、

十一月十六日

〔縁須賀資裕、阿州藩主〕  
松平阿波守

五四の一〇〔總比、高須藩主〕

同松平攝津守届書

一私領分濃州高須、去ル四日辰中刻過ヨリ強地震ニテ、居所并諸士屋敷在町破損、潰家モ有之候、其外川堤通所々震裂出来候処、其後モ引続折々相震ヒ、翌五日申刻又々余程之地震ニテ、居所始小破ノ分迄モ弥大破ニ相成、其後モ震止不申候旨申越候、人馬怪我等ハ無御座様ニ候得共、未委細之儀ハ難相分候、先此段申達候、猶巨細ノ儀ハ、追々可申達候、以上、

十一月十六日

松平攝津守

〔松平遠江守届書〕

一私在所播州尼ヶ崎、去ル四日辰中刻大地震ニテ、櫓・住居向其外所々潰家破損所々数多有之、翌五日申中刻又々大地震、其上津浪ニテ、城下市郷ハ数ヶ所潰家御座候、尤人馬怪我人等未相分不申候段、在所家来共ヨリ申越候、猶取調委細御届可申上候得共、先此段御届申上候、以上、

十一月十六日

〔榎井忠栄、尼ヶ崎藩主〕  
松平遠江守

霜月三日、日和ニテ冬至ニ候、朝五ツ時大震リ八歩余、市中之家今モ崩レ申候哉ト、皆々大道へ走り出申候、同四日朝五ツ時頃大震リ六歩位、夜中少々明方前度々震リ、同五日日和朝ヨリ小震リ度々有リ、暮六ツ前大震リ地鳴津浪大騒キ、尤四日朝ヨリ家之内ニ居候者一人モ無之、大道ニ襖・障子ヲ引巡シ、野宿之如クナリ、扱五日之津浪之騒動之中ニテ、五ツ前五分半之震リ、又引続六分震リ、四ツ前七分震、四ツ半五分、其後折々震リ続キニハ、五日津浪之一条、死人・破船ハ奥ニ

印有リ、扱同六日朝曇リ日和ニ成ル、朝五分之震リ、五ツ過四分ノ震リ、七ツ時三分ノ震リ、夜二度式歩ノ震リ、七日少々雨、昼後日和ニ成ル、朝五ツ時二分半位ノ震リ、晩ヨリ雨降出ス、夜九ツ時式分ノ震リ、同九日日和、昼折々震リ、夜九ツ時迄ニ三步震、同十日朝曇リ日和成ル、西風、七ツ時二歩ノ震リ、同十一日和、四ツ時少々ツ、折々震ル、七ツ時壹分、同十二日ヨリ十四日迄折々ニテ震リモ壹歩位ナリ、同十五日日和、朝六ツ時頃三步ノ震リ、初夜時分壹分、同十六日曇リ雪気、朝四ツ時五分余震ル、又々一統驚申候、同十七日日和、同十八日日和、朝六ツ時頃壹分半ノ震、同廿日日和、夜七ツ時壹分、夫ヨリ折々震、大晦日朝五ツ時式歩震、其後ハ次第ニ治リ申候事、

右霜月五日之暮過津浪之節左之通、

木津川口大黒橋迄大船入込申候、是迄之橋ハ皆落、両側之家ハ皆崩レ申候事、

右大黒橋ヨリ下手ニテ破舟

大船五百九拾九艘

上荷五百六拾六艘

茶船七拾四艘



死人三百四十三人

内

男九拾四人

女貳百四十九人

但シ人別入之分計リ

安治川ニテ破船

大船百七拾四艘

上荷三拾艘

茶船六艘

漁舟壹艘

死人三拾人

但前同断

右之外小船ハ不知數、死人モ大坂町内ニ名前有之分丈ケ、他所ヨリ入込罷在候分并無人別之分數不知、当月十日迄之御調ニ御座候中ニ、哀レ成咄シハ、道頓堀宗右衛門町小商内致候モノ、母親一人・女房・娘十二才ニ相成モノト四人ニテ、地震ヲ恐レ小船ニ乗り、五日七ツ時過ニ川中へ出シ居候処、宅ニ忘レ申モノ有ルユヘ、女房ニ申付ケテ取ニ遣シ候ニ付、大黒橋下手ニ船ヲツケ、女房上リ申候ヲ、母親声カケ早ク帰り呉レ候

ト申候故、直様帰り申候間、夫トニ母ト娘ノ事頼ミ、又娘ニ母ニ心付申候様呉々モ申付置、家へ帰り申候処、其跡ニテ右ノ津浪ニ相成、人々津浪々々ト騒ギ申候ユヘ、狼狽ナカラ浜へ参リ申候処、舟ハクダケ親子三人トモ姿モ見ヒス、定メテ死シケリト乱心之如クニ相成、終ニ川へ飛込デ死シタリト、真事ニ不便ト申モアマリ有リ、其外ニ沢山哀レ成咄シ有之候トイヘトモ、書ツクシカタシ、

紀州熊野浦ヨリ和歌山迄ノ間、津浪別テ大キク、新宮田辺家數百軒ノ内、僅カ四五軒残り、中ニモ由良ノ湊之内凡家數六百軒計リ有之内、僅計リ家残り候、皆々流レ申候、尤其内大家ニ葬式有之、寺方并送り人モ余程有之候処、尅人モ不殘皆々波ニ入取ラレ、死骸モ行方ナク成申候ヨシ、

九州路大地震烈數、人家崩レ怪我人等夥數、數不知、肥後・肥前・筑前・筑後・豊前・豊後・長州其外国々大地震、大崩レニ御座候、尤怪我人死不數知候事、東海道同様、殊ノ外烈數候、道ソソシ川々ツフレ申候処モ有之候得共、略之、

十一月四、五日本坂大地震津波ニ付、破船其外取調

書上

大小廻船

凡千二百二十一隻

諸川船

凡七百二十二隻

内

上荷舟

四百八十九隻

茶舟

九十隻

屋形舟

三隻

劔先舟

二十隻

通船并漁船

百二十隻

落橋

十橋

損橋

一橋

溺死人

二百七十四人

内

男 七十九人

女 百九十五人

外ニ在郷ノ溺死人九十人余有之候由、是ハ書外也、

一町数合 四十五丁

外ニ山内兩組地所廣教寺門前

一潰家合

八十六軒

一同土蔵合

八ヶ所

一内納屋合

十五ヶ所

一内土堀合

九ヶ所

一大破損家

八十三ヶ所

一同土蔵合

六ヶ所

一同道場

一ヶ所

一潰井戸屋形

二ヶ所

一死人

女三人

一丁数

四十五丁

一軒数

八十六軒

一人員

百二十四所

一人員

三人

安政元年 (1854)

〔表紙〕

齊彬公史料 安政元年

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事映掌史料（紙数四十枚）」の記載あり〕

目録

- 外国船渡来ニ就テ布令十条
- 魯国軍艦長崎ニ来ル当時幕令
- 老朱銀新鑄各金銀貨交換令
- 異国船渡来諸家人数扣集等ノ布令〔扣カ〕
- 米国使節応接祝砲放発布告
- 新御靈屋銅燈籠献納ニ不及布達
- 異国船碇泊中調練停止布達
- 御所炎上布告

米国軍艦退去ノ布告

各藩其他供人数減省令

英国軍艦来長布告

〔脱カ〕  
〔閩老海防事務取扱事件布告〕

御拳場近辺鉄炮稽古事件布告

將軍家定公襲職更ニ武家法度ヲ発ス

大船製造荷船造建云々布告

亜墨利加合衆国船下田・函館二港繫泊許可布告

禁裏炎上後御警衛

北蝦夷ノ光景通報

魯国船長崎へ来ル島原藩主届書

無名氏建言水戸・福山二侯異論云々

長崎入津清人書牒

京都七口警衛達書

昇平学校ニ在ル長州書生本藩製船ノ事ヲ聞キ友人ニ送ル

書

参考 江田平藏日記抄

〔P. P.〕  
以上二十三条

五五 外国船渡来ニ就テ布令十条

五五の一

〔利賢、大目付〕

〔誠成、田辺藩主〕

〔利賢、土井〕

寅正月十五日、堀伊豆守様ヨリ牧野豊前守様・土井大隅守様御連名之以切紙、阿部伊勢守様・松平和泉守様御渡候由ニテ、御書付写三通御差越候由ニテ、

以御手紙来、  
阿部伊勢守殿御渡御書付  
御詰衆  
大目付江

去夏浦賀表江亞墨利加船渡来以後、領分知行所江過分之人馬触当置候面々モ有之哉ニ相聞候、畢竟防禦守備等之タメ、用意申付候儀ニ可有之候得共、左候テハ渡来之節一時ニ在方人少ニ相成取締不宜、自然悪党共立廻リ、村々難儀致シ候様可相成間勘弁致シ、村方不相应之人馬呼寄候儀致サス、右体之節ハ、村方取締之儀別テ嚴重可被申付候、

右之通、關八州ニ領分知行有之面々江可被相触候、  
正月〔十五日〕

松平和泉守殿御渡候御書付  
此度亞墨利加船浦賀表江渡来イタン候得共、穩之趣ニモ有之候旨諸向動揺不致、火之元等別テ入念候様、向

々江可被達候事、  
正月〔十五日〕

五五の二

〔忠烈、岩槻藩主〕

正月十八日、牧野豊前守様・大岡兵庫頭様為御詰日被

成御出仕候処、松平和泉守様御渡候由ニテ、堀伊豆守様被成御達候、左之御書付三通御覚書一通、写以御手紙御到来、  
松平和泉守殿御渡候御書付写三通御覚書一通  
御詰衆  
大目付江

在府手明之  
雁之間詰

異国船近海江渡来之節、其様子ニ寄、自身召連出張相成候程之人数、屋敷内ニ用意致シ置、先登城可被致候、  
一御門番・火之番等被相勤候面々ハ、不及登城、持場々々へ可被相詰候、

一大手組ハ山下御門内外、又ハ幸橋御門内外、櫻田組ハ虎御門辺江一旦相詰、日数相懸ルヘキ様子ニ候ハ、其辺へ仮小屋補里人数屯致シ置、当番・非番ヲ相立、〔定カ〕

順番ニ二手宛可被相詰候、

一大手方・櫻田方ハ、出火之節之通持場へ一旦相詰、日  
數相掛ルヘキ様子ニ候ハ、屋敷近キ者ハ自分屋敷ニ  
人数備置、直ニ出張相成候様致シ置、屋敷程遠之モノ  
ハ、伝奏屋敷ヲ扣所可被致候、

一増上寺御固之儀ハ、同所火之番被相勤候衆相固、時宜  
ニ寄詰衆等之内ヨリ一・二手可被差遣候、其節ハ、寺  
社奉行モ一人被遣ニテ可有之候、

一御備場御用被相勤候面々、且差定候持場有之候向ハ、  
何レモ登

城ニ不及、別段人数出之儀モ被 仰付間敷候、  
右之通向々へ可被相達候、

正月

〔大日本古文書 幕末外国關係文書にて校訂〕

大目付江

浦賀表江渡来之異国船、若内海江乘入候節、臨時為御  
警衛出張致シ候向ハ、去丑年嘉永六  
癸丑六月中相達候通、火  
事具相用、武器用意可致候、且又万一異変ニモ可及場  
合ニ至リ、諸手為差図老中・若年寄之内出馬イタシ候  
節ハ、小具足・陣羽織着用之筈ニ候、諸向之儀ハ、銘

々存寄次第勝手之品相用可申候、

但異変之場合ニハ無之候共、時宜ニ寄、老中・若年  
寄之内見廻リ等ニ相越候儀モ可有之候、其節ハ火  
事具相用可申候、諸向之儀ハ是又銘々存寄次第、  
火事具ニテモ野服ニテモ、勝手之品相用可申候、  
右之趣為心得、向々へ可被達置候、

正月

〔大日本古文書 幕末外国關係文書にて校訂〕

大目付江

異国船近海江渡来之節、近国ニ領分知行有之面々、在  
町取締筋之儀ハ、銘々心得モ可有之候得共、万一悪徒  
共立廻リ可申モ難計候間、召捕方等別テ嚴重可被申付  
置候、若捕押兼候儀モ有之候ハ、切捨又ハ打殺候共  
不苦候、

右之通、御料・私領・寺社領トモ近国之分不洩様可被  
相触候、

正月

覚

別紙之趣ハ、此度渡来之異国船ニ限り候儀ニハ無之候

間、其旨相心得候様口上添可被達候事、

和泉守殿御渡

大目付江

在府手明キ之

大広間席

異国船近海江渡来之節、其様子ニ寄、人数屋敷内ニ用意致シ置、先不及登 城、老中ヨリ案内次第登

城可被致候、其節ハ可成丈輕輩ハ相省キ、十分之者重〔主カ〕

ニ小勢可召連、若人数出張之儀相達候ハ、出火之節之振合ヲ以、先一手ツ、様子ヲ見合可被差出候、其余

ハ臨機之事ニ候得ハ、其心得ニ可有之、場所等ハ、其節相達ニテ可有之候、

在府手明キ

〔之脱カ〕

溜詰

同格

異国船近海江渡来之節、其様子ニ寄、人数屋敷内ニ用意イタシ置、登 城候様可被致候、模様次第出張被仰付候儀モ可有之候間、兼テ其旨可被相心得候、

在府手明キ

〔之脱カ〕

帝鑑間席

柳之間席

異国船近海江渡来之節、其様子ニ寄、人数屋敷内ニ用意致シ置、差図次第出張之積相心得、先登 城ニハ不及候、

在府手明キ之

雁之間詰

御奏者番

菊間縁類詰

異国船近海江渡来之節、其様子ニ寄、自分召連出張相成候程之人数、屋敷内江用意致シ置、先登 城可被致候、末ケ条、御詰衆江御渡書付ト同文言ニ付、爰ニ略ス、

五五の三

〔大日本臣文書(幕末外国關係文書)にて校訂〕

寅正月廿日、堀伊豆守様ヨリ以御切紙、松平和泉守

様御渡候由ニテ、御書付写一通被差越候付、右写枚

野豊前守様・松平備中守様ヨリ以御手紙来、

寅正月廿日松平和泉守殿御渡

御詰衆

大目付江

異国船渡来ニ付、海岸屋敷有之面々ハ、武器等相廻シ

置、万一非常之節混雜無之様可致候、尤成丈不事立様  
穩便ニ取計可申候、  
右之趣可被相達候、

正月

五五の四

寅正月廿二日、井戸石見守様〔弘道、大目付〕ヨリ内藤駿河守様・松

平備中守様江、以御切紙松平〔大河内正和、大多喜藩主〕和泉守様御渡候由ニテ、

御書付写一通被差越候付、右写御廻シ被成候旨ニテ、

駿河守様・備中守様御連名之以御手紙来、

松平和泉守殿御渡

御詰衆

大目付江

異国船渡来之節、万一異変ニモ可及場合ニ至リ、早盤  
木打候節ハ、早速銘々持場等江出張可致ハ勿論ニ候得  
共、下々等慮忽ニ動揺致シ、無益之雜人等屋敷内外立  
騒及混雜候様ニテハ、不慮之過失モ可有之、以之外之  
儀ニ候間、兼テ殿重ニ申付置出張等之節、不法之儀無  
之様急度向々へ可被達候事、

正月

〔大日本古文书(幕末外国關係文書)にて校訂〕

五五の五

寅正月廿二日、井戸石見守様ヨリ板倉伊豫守様江、  
〔勝明、安中藩主〕

以御切紙松平和泉守様御渡候由ニテ、御書付写一通  
被差越候処、伊豫守様御産儀ニ付、御通達之儀内藤  
駿河守様江被仰越候旨ニテ、御同人様ヨリ以御手紙

来ル、

正月廿一日松平和泉守殿御渡

御詰衆

大目付江

異国船渡来之節、万一異変ニモ可及様子ニ候ハ、於  
火消屋敷早盤木打候間、万石以上櫓有之向ニテモ、同  
様盤木ヲ以場未迄打継候様可致候、右ヲ承リ候ハ、  
非常之場合ト相心得、火之元等取締致シ置、詰場々々  
へ可罷出候、

一右之通相成候付テハ、異国船渡来中出火之節ハ、諸向  
共盤木ハ不相用、是迄盤木相用候向ハ、太鼓ニテモ半  
鐘ニテモ相用可申候、  
右之通可被相触候、

正月

五六 魯国軍艦長崎ニ来ル当時幕令

〔正月二十日、禁出シ日〕  
同日、内藤駿河守様・松平備中守様為御詰日、被成

御出仕候之處、阿部伊勢守様御渡候由ニテ、堀伊豆  
守様被成御渡候御書付写一通、駿河守様・備中守様

ヨリ以御手紙来ル、

阿部伊勢守殿御渡  
〔正月二十日〕

御詰衆

大目付江

長崎表江渡来之魯西亞船、去ル八日平穩ニ退帆致シ候  
旨注進有之候、此段為心得、向々へ可被達置候事、

正月

〔大日本古文書〔幕末外國關係文書〕にて校訂〕

### 五七 沓朱銀新鑄各金銀貨交換令

大目付江〔老中阿部伊勢守達 正月二十一日〕

此度世上通用之タメ、吹立被仰付候沓朱銀之儀、来ル

廿四日ヨリ可致通用候、尤五兩判・小判・沓分金・式

朱金・沓分銀等ニ取交、無差別取引為致候条、通用差

〔取計〕〔統徳川実紀〕  
滞申間敷候事、

一沓朱銀兩替ニ付、切貨之儀沓分銀同様相心得、取遣可

致事、

右之趣可被相触候、

正月

〔國史大系〔統徳川実紀〕にて校訂〕

### 五八 異国船渡来諸家人数招集等ノ布令

〔實弘、町奉行〕  
寅正月廿三日亥下刻、井戸對馬守様ヨリ板倉伊豫守

様御一名之以切紙、松平和泉守様御渡候由ニテ、御

書付写一通被差越候旨ニテ、右御書付写伊豫守様ヨ

リ以御手紙御到来、

松平和泉守殿御渡  
〔正月二十三日〕

詰衆

大目付江

異国船渡来之節、盤木之合図ニテ、出張并為御警衛、

寄場・屯所等江相詰候節共、御門々鉄炮其外武器出入

之儀、右員数書付、万石以上之面々ハ、家来印紙差出

シ、万石以下之分ハ、自分印紙書付、御門々江相達通

行可致候、尤後日其段最寄御目付江相届候様可被致候、

一御城内御警衛之面々ハ、鉄炮武器類下馬所へ相残置、

当番御目付ヨリ相達次第、前文同様之振合ヲ以繰入候

様可被致候、

右之通可被相触候、

正月

〔大日本古文書〔幕末外國關係文書〕にて校訂〕



五八の二

寅二月三日、柳生播磨守様ヨリ以御切紙、(忠實、老中)松平伊賀

守様御渡被成候御書付写一通、(刑則、吉河藩主)土井大炊頭様・松平

備中守様ヨリ以御手紙御到来、

松平伊賀守殿御渡(二月三日)

詰衆

大目付江

亞墨利加船此節近海江碇泊致シ候処、当地ヨリ追々見物船差出、異船江近寄候儀モ有之、陸地ヨリ之見物人モ多分之趣ニ相聞候、異船渡来中ハ仮令外用向ニテ、最寄迄相越候儀有之候共、海陸共都テ見物ケ間敷儀ハ無用ニ候間、其段向々へ早々可被相達候、尤御備場御用相心得候面々等ヨリ、見留船差出候儀有之候共、異船江ハ乗寄不申、浦賀奉行組番船江引合候様取計可申旨、是又可被達候、

二月

五八の三

寅二月八日申中刻、柳生播磨守様ヨリ土井大炊頭様・

秋元但馬守様御連名之御切紙、(以脱カ)阿部伊勢守様御渡候

由ニテ、御書付写一通被差越候付、右写一通大炊頭

様・但馬守様ヨリ以御手紙来、

阿部伊勢守殿御渡(二月八日)

御詰衆

大目付江

亞墨利加船渡来ニ付心得方之儀、去丑十一月中重キ上意之趣被 仰出有之候儀ニ付、諸向共聊油断ハ有之間敷候処、此節數艘近海江碇泊致シ候ニ付テハ、此上応接之模様ニ寄、万一彼ヨリ兵端ヲ開キ候儀無之トハ難申、其節一同奮発致シ候儀ハ申迄モ無之事ニ候得共、異船滞留中、御備向之儀外見而已ニ拘リ、夜中モ海岸へ提灯等數多付并へ候向モ有之趣ニ相聞、左候テハ却テ彼ノ的ニ相成、且ハ疲弊モ不少儀ニ付、固人数差出候面々、番小屋等之要所ハ格別、其外ハ要害之土地見計ヒ、山蔭・木蔭等へ屯イタシ置、可成丈外ヨリ不見様可相心得、行列ヲ正シ、昼夜時々海岸ヲ見廻リ可申、且又宿駅人馬遣方之儀モ、可成丈勘弁致シ、相減候様可致候、尤銘々屋敷々々ニ手勢用意致シ置候分モ右ニ準シ、外見之虚飾ハ一切相止、士卒之銳氣ヲ養ヒ候テ取鎮リ居、大小之筒配り方之儀ハ、(脱カ)勿論、劍鎗手詰之勝負等、実地之接戦專一ニ心掛候様、精々厚可申付候、

但大艦ヲ始諸般之御備向相整候上ハ、猶改テ被仰

出之品モ有之儀候得共、方今差向候場合ヲ以、右

之通被仰出候事ニ付、面々必死之覚悟ヲ尽シ、

実用之工夫可致候、尤弥彼ヨリ兵端ヲ開キ候節ニ

至リ候ハ、小船ヲ（二脱之）以（小早船ニ大砲ヲ備ヘタルモノ）神速之勝負可及

候儀モ可有之候、

右之通万石以上以下不洩様早々可被相触候、

二月

〔大日本古文書（幕末外國關係文書）にて校訂〕

### 五九 米国使節応接祝砲放發布告

五九の一

寅二月九日、秋元但馬守様・板倉伊豫守様・大岡兵

庫頭様為御詰日被成出仕候处、松平伊賀守様御渡候

由ニテ、柳生播磨守様被成御達候左之御覚書写一通、

兵庫頭様ヨリ以御手紙来、

松平伊賀守殿御渡

御詰衆

大目付江

覚

亜墨利加人江明十日应接有之候ニ付、船中ニテ祝砲数  
発打放候旨申立候ニ付、右炮声承リ候共、動揺致ス間

敷候、併彼方事情モ難計ニ付、其心得ニテ油断ハ無之  
様可被致候事、

右之趣向々江早々可被相達候事、

二月九日

〔大日本古文書（幕末外國關係文書）にて校訂〕

五九の二

寅二月廿七日申中刻、井戸石見守様ヨリ黒田豊前守

様・板倉内膳正様御連名之以御切紙、松平伊賀守様

御渡候由ニテ、御書付写一通被差越候付、右写一通

豊前守様・内膳正様ヨリ以御手紙御到来、

松平伊賀守殿御渡

御詰衆

大目付江

亜墨利加船弥平穩之趣ニ候間、海岸通り屋敷ニ相固候

面々、最早不及其儀候、尤時宜ニ寄、猶又相固候心得

ニ可罷在候、

右之通海岸通屋敷有之面々江可被達候、

二月

〔大日本古文書（幕末外國關係文書）にて校訂〕

### 六〇 新御霊屋銅燈籠献納ニ不及布達

牧野備前守殿御渡

大目付江

御代々様

新御靈前江、万石以上之面々ヨリ、前々唐銅石御燈籠

之内献備有之候ニ付、此度モ先格之通献備之儀可被

仰出処、当時敵敷御儉約年限中、且諸家ニオヒテモ格

別質素節儉相用、武備專要之被 仰出モ有之候儀ニ付、

今般ハ別段之 思召ヲ以、諸家御燈籠献備之儀、暫御

用捨被成下候間、追テ相達候迄ハ不及献備候、其段可

被相達候、

三月

六一 異国船碇泊中調練停止布達

六一の  
寅三月廿二日酉下刻、左之御書付之通大御目付様・

御目付様ヨリ被仰越候由ニテ、右写一通、永井肥前

守様衆ヨリ、以御用廻状来、

異国船滞留中ハ、諸家調練并大森角筈等、都テ大筒稽

古ハ見合候様被仰渡候処、異船天異国船退帆致候ニ付、是迄

通調練并大筒稽古勝手次第可仕旨、伊勢守殿被仰渡候、

依之御達仕候、以上、

三月廿二日

岩瀬修理

永井岩之丞

堀 織部

井戸石見守

永井肥前守様

板倉内膳正様

〔大日本古文書(幕末外國關係文書)にて校訂〕

六一の二

寅四月九日、井戸石見守様ヨリ〔貞徳、室蘭藩主〕牧野備後守様・戸田

宇都宮藩主因幡守様・内藤駿河守様御連名之以剪紙、牧野備前

守様御渡候由ニテ、御書付写一通被差越候由ニテ、

備後守様ヨリ以御手紙御到来、

〔四月九日〕牧野備前守殿御渡

御詰衆

大目付江

此度渡来之重墨利加船、内海退帆致シ候、然処右滞船中〔船カ〕

彼是自候之所業等有之候ヨリ、意外之兵端ヲ相開候儀

モ難計候ニ付、夫々御固被 仰出候得共、船軍之御備

向モイマタ御整ニ不相成折柄、無余儀平穩之御処置ニ

被成置、彼方志願之内漂民撫恤並航海来往之砌、薪・

水・食料・石炭等船中闕乏之品々被下度トノ儀、御聞

届相成候処、場所御取極無之候得ハ、何国之浜方ヘモ

勝手ニ渡来不取締ニ付、豆州下田湊・松前之箱館ニオ  
ヒテ被下候積ニ候、当今不容易御時節ニ付、兼テ被  
仰付<sup>由之</sup>モ有之候通、質素節儉ヲ相守、此上水陸之軍事一  
際相励、若非常之儀モ有之候ハ、速ニ本邦之御武  
威相立候様可被心掛候、右之通、早々可被相触候、

四月

〔大日本古文書(幕末外國關係文書)にて校訂〕

六二 御所炎上布告

六二の二

寅四月十日申刻、井戸石見守様ヨリ大岡兵庫頭様御  
一名之以御切紙、内藤紀伊守様御渡候由ニテ、御書  
付写一通被差越候付、右写一通、兵庫頭様ヨリ以御  
手紙来、

内藤紀伊守殿御渡

御詰衆

大目付江

京都 御所向炎上ニ付、明十一日惣出仕有之候間、其  
段向々江可被達候、

四月十日

六二の二

寅四月十一日、為御詰日牧野備後守様・内藤駿河守

様・大岡兵庫頭様被成御出仕候処、内藤紀伊守様被  
成御渡候由ニテ、堀伊豆守様被成御達候御書付写一  
通、以御手紙来、

内藤紀伊守殿御渡

御詰衆

大目付江

禁裏炎上ニ付、鳴物今日ヨリ明後十三日迄、三日停止  
之事、

但普請ハ不苦候、

右之通可被相触候、

四月十一日

六二の三

寅四月十二日、為御詰日牧野豊前守様・永井肥前守  
様被成御出仕候処、内藤紀伊守様御渡候由ニテ、堀  
伊豆守様被成御達候御書付写二通、以御手紙来、

内藤紀伊守殿御渡

御詰衆

大目付江

一 禁裏炎上ニ付、為伺御機嫌明十三日惣出仕之事、

一 病氣・幼少・隠居之面々ハ、月番之老中宅江使者可差

越事、

一 在国在邑之面々ハ、飛札可差越事、

但在国在邑之嫡子・隱居モ同断、(右脱カ)

右之通可被相触候、

四月十二日

(國史大系(統徳川史紀)にて校訂)

六三 米国軍艦退去ノ布告

寅六月十日、為御詰日戸田因幡守様・松平備中守様

御出仕被成候処、松平和泉守様御書付由ニテ、柳生

播磨守様御達被成候御書付写一通、因幡守様・備中

守様ヨリ御手紙ヲ以来ル、

松平和泉守殿御渡(六月十日)

御詰衆

大目付江

豆州下田湊ニ滞留之亜墨利加船、今度不殘帰帆致シ候、

此段為心得向々江可被達候、

六月

六四 各藩其他供人数減省令

寅六月十六日、秋元但馬守様・板倉伊豫守様被成御

出仕候処、牧野備前守様御渡候由ニテ、井戸石見守

様御達被成候御書付写二通、但馬守様・伊豫守様ヨ

リ以御手紙御到来、

牧野備前守殿御渡

御詰衆

大目付江

供連省略之儀、前々ヨリ相達置候得共、当今武備心掛

專要之御時節ニ候間、敵敷驕奢ヲ改メ節儉ヲ守リ、行

粧質素ニ可致事ニ候、就テハ是迄召連候人数、一万石

以上先供・駕籠脇共十三四人、五万石以上十七八人、

拾万国以上二拾人ニ限り、仮令国持タリトモ、二十四

五人ニ過不申様触面有之、夫々格録ニ応シ召連来候処、

其後追々省略之儀被 仰出、近来ハ高並人数之内相減

候向モ有之候得共、猶此度万石以上之面々別格之省略

相立、前文触面人数之内半減位迄ハ相減、下供(等脱カ)マテモ

同様減少致シ不苦、尤登 城御府内通行共、馬上勝手

次第、其節ハ供連之内駕籠為釣候ニ不及候、且万石以

下之面々モ右ニ準、相成候程ハ、供人数減少致シ召連

可申、総テ質素ヲ守リ、武備之嗜專一ニ可被心掛候、

右之通、万石以上以下共可被相触候、

六月

〔國史大系(統徳川実紀)にて校訂〕

大目付江

此度、諸家供連省略被 仰出候ニ付テハ、陪臣各藩家之  
面々使者等相勤候類、其余供連別テ減少可致、平日駕  
籠相用候儀、歩行・乗馬ニ改メ、駕籠之儀ハ無余儀節  
ハ格別、先平日成丈ケ不相用、都テ無益之供連無之様、  
銘々主人ヨリ可被申付候、  
右之通可被相触候、

六月

〔國史大系(統徳川実紀)にて校訂〕

六五 英国軍艦来崎布告

〔船出シ日〕

寅八月七日、為御詰日土并能登守様・秋元但馬守様

〔利忠、大野藩主〕

被成御出仕候処、松平和泉守様被成御渡候由ニテ、

〔政憲、大目付〕

筒井肥前守様被成御達候御書付写一通、以御手紙来

ル、

〔八月六日〕

松平和泉守殿御渡

詰衆

大目付江

此度、長崎表江英吉利船四艘渡来候処、穩ニ候旨注進

有之候、此段為心得、向々江可被達置候事、

八月

六六 閣老海防事務取扱事件布告

〔船出シ日〕

寅八月十一日、為御詰日戸田因幡守様・土并能登守

様被成御出仕候処、阿部伊勢守様御渡候由ニテ、筒

井肥前守様被成御達候御覽書付写一通、以御手紙来ル、

阿部伊勢守殿御渡

〔八月十日〕

御詰衆

大目付江

海岸防禦筋之御用向、向後老中・若年寄中一同ニテ申

合取扱候、尤是迄之通月番順ヲ立取扱候間、向々諸伺・

諸届等其心得ニテ差出候様可被致候事、

右之趣向々江可被相達候事、

八月

六七 御拳場近辺鉄砲稽古事件布告

〔船出シ日〕

寅九月廿五日、内藤駿河守様・大久保佐渡守様御出

〔忠美、鳥山藩主〕

仕被成候処、久世大和守様御渡被成候由ニテ、筒井

肥前守様御達被成候御書付写一通、佐渡守様ヨリ以

御手紙来ル、

久世大和守殿御渡〔九月二十二日〕

御詰衆

大目付江

御拳場將軍放鷹場ノ通唱、近辺鉄炮稽古之儀ニ付、追々相達候趣モ有之候処、向後品川・目黒・澁谷辺月延之場所、四季打稽古不苦候間、此段向々江可被達候、

九月

六八 將軍家定公襲職更ニ武家法度ヲ発ス

武家諸法度

一文武忠孝ヲ励シ、可正礼義事、

一 参勤交替之儀、毎歳可守所定之時節、従者之員数不可及繁多事、

一人馬・兵具等、分限ニ応シ可相嗜事、

一新規之城郭構營堅禁止之、居城之隍壘・石壁等敗壞之時ハ、達奉行所可受差図也、櫓・屏・門以下ハ如先規可修補事、

一大船製造可言上事、

一企新規、結徒党、成誓約、并私之関所、新法之津留制

禁事、

一 江戸并何国ニテモ、不慮之儀有之トイフトモ、猥不可〔虚カ〕心集、在国之輩ハ其所ヲ守リ、下知ヲ可相待也、何処ニテ雖行刑罰、役者之外不可出向、可任檢使之左右事、

一 喧嘩・口論可加謹慎、私之諍論制禁之、若無抛子細有之ハ、達奉行所可受其旨、不依何事令荷担ハ、其各本人ヨリヲモカルヘシ、并本主之障有之モノ不可相抱事、

附頭有之輩之百姓訴論ハ、其支配江令談合可濟之、有滞儀ハ評定所江差出之、可受捌事、

一 国主・城主・老万石以上・近習并諸奉行・諸物頭、私不可結婚姻、惣テ公家ト於結縁辺ハ、達奉行所可受差

凶事、

一 音信・贈答・嫁娶之規式、或饗応、或家宅營作等、其外万事可用儉約、惣テ無益之道具ヲコノミ、不可致私之奢事、

一 衣裳之品不可混乱、白綾公卿以上、白小袖諸大夫以上免許之事、

附徒・若党之衣類ハ羽二重・絹・紬・布木綿、弓鉄砲之者ハ紬・布木綿、其下ニ至リテハ万ニ布木綿可  
用事、

一 乘輿ハ一門之歴々・国主・城主・一万石以上并国大名之息・城主及侍従以上之嫡子、或年五十以上許之、医師・僧家ハ制外事、

一 養子ハ同姓相応之者ヲ撰ヒ、若無之ニヲヒテハ由緒ヲ正シ、存生之内可致言上、五十以上十七歳以下ノ輩及末期雖致養子、吟味之上可立之、縱雖実子筋目違タル儀不可立事、

附殉死之儀、弥令制禁事、

一 知行之所務清廉沙汰之、国郡不可令衰弊、道路・駅馬・橋舟等、無断絶可令往還事、

一 諸国散在之寺社領、從古至于今、所附来ハ不可取放之、勿論新地之寺社建立弥令停止之、若無抛子細有之ハ、達奉行所可受差函事、

一 万事応江戸之法度、於国々所々可遵行事、  
右条々堅可相守者也、

〔安政元年〕  
嘉永七年九月廿五日

〔大日本古文書〔幕末外國關係文書〕にて校訂〕  
徳川家羈業ノ初、公家・武家諸法度ヲ制定シ、之ヲ遵守セ

〔軍脱カ〕  
シメタリ、而シテ將職任命毎ニ代々之ヲ頒テ誓盟セシメ、或大小諸侯襲封ノ後、誓盟血判セシメ、這ノ法書ニ違ハサルヲ盟シム、法文ハ初頒ニ異ナルコトナク、茲ニ記スカ如シ、

六九 大船製造荷船造建云々布告

今度御法令ニ大船製造可言上之旨被 仰出候、然処荷船ハ前々ヨリ御許シ有之事ニ付、有来通製造之儀ハ、是迄之通可相心得候、尤荷船タリトモ、製造方其外有来ト相違致シ候ハ、此度被 仰出候通相心得可申事、  
〔船カ〕  
〔右之通万石以上之面々江相違候間、万石以下之向江モ可被達候〕

九月 〔二十五日〕

〔大日本古文書〔幕末外國關係文書〕にて補正〕

七〇 亜墨利加合衆国船下田・函館ニ港繫泊許

可布告

〔輸出日〕  
寅十月十三日、為御詰日戸田因幡守様・秋元但馬守

様被成御出仕候処、内藤紀伊守様御渡候由ニテ、并戸石見守様被成御達候御書付写一通、以御手紙来、

〔十月十日〕  
内藤紀伊守殿御渡

大目付江

此度亜墨利加合衆国、下田・箱館之両港江船繫之儀被差許候ニ付テハ、阿蘭陀国之儀ハ、從來通商御免之國柄ニ付、以後航海来往之砌、下田・箱館之両港江船ヲ



寄、薪・水・食料其外船中闕乏之品ヲ弁シ、并破船修復等惣テ重墨利加同様御差許有之、尤交易之儀ハ、是迄之通長崎表ニ相限候間、同所之規定愈堅可相守旨、在留甲比丹江申渡候間、此段為心得向々江可被達候、

十月

七一 禁裏炎上後御警衛

〔世長、藤山藩主〕  
青山下野守

禁裏 御所方炎上ニ付御警衛之儀、本多隱岐守為代其方被仰付候間、家来斗差出相勤候様可被致候、〔正邦、淀藩主〕稲葉長門守モ被仰付候間、申合可被勤候、委細之儀ハ脇坂〔安宅〕淡路守へ可被承合候、〔康融、藤所藩主〕

七月九日

七二 北蝦夷ノ光景通報

八月十四日松前店マ七月廿五日附、北蝦夷地之一条左之通り、

北蝦夷越年ハ、異国人共此方ヨリ境税立会之役人参候迄、落付居候ニ付、水海明候時節、相待人数追々渡海、公儀御役人モ不殘渡リ、是ヨリ応接ニ可相成之所ニ至

リ、彼等之類船屯艘参リ、惣大将・船主・奉行トモ可申、アメリカ之ヘルリー同様之ボウチヤチント申モノヨリ、越年致居候小頭へ手紙差越、其地ニ於テ何様之儀有之候トモ取合不申、早々引払掃国可致之旨申来、依之右小頭申候ニハ、折角多人數此所迄遠方へ参リ、氣之毒ニ候得共、大将ヨリ之下知ニ付、是ヨリ昼夜ニ掛ケ早々引払候間、此段届候趣申ニ付、其儀不相成、是非引留候様申向候所、我等之国体ハ日本ト違ヒ、大将ヨリ一言之下知有之候時ハ、義理・礼之差別無之、急度相守不申候テハ不相成、其方ニテ引留候トモ、此方ハ不承知ト申、無二無三ニ寢食之間モ無之、一日一夜之内ニ片付、四方之板塀マデ残シ、余ハ皆一度ニ二艘之船へ積入、早々出帆、右ハ五月十八日之事、余リ急候テ哉、二貫目位之鉄砲玉七ツ取落シ参候、彼等モ取雇参候ニ付、越年ニアキ果、交代船之参候テハ、待合候所へ右之趣申参リ大悦之様子、扱逗留中常ニ彼等申居候ニハ、北夷ト申所ハ寒国ト承リ候得共、ケ様ニハ有間敷ト存候所、以之外成大寒ニテ漸相凌申候、其上承リ候所、当年ハ幾年ニモ覺無之暖氣之多ト申事、若此上之極寒ニ候ハ、迎モ助命相成兼、二度ト参候所

ニ無之、和人ハ能凌居ル、感心ト申候由、亦出直シ參候事哉難計候得共、先ニ夢之様ニ相成候間、一同致方モ無之、自役人北蝦夷勤番ト被申付候者計、三拾五人居残り、越年ト相定候、公儀御役人・自役人トモ追々彼地引払、大廻リニ東蝦夷地へ抜ケ、箱館へ參候モノモ在之、又ハ元之道へ戻リ候モノモ在之、此節帰国道中半ニ御座候、都テ此方存込皆相違仕、却テ仕合ニ相成、最初此方決心ハ、北蝦夷地上陸之所ヨリ百五十里モ奥へ行、多分越年ニ可相成、冬中極寒無事ニ凌候トモ、春ニ相成候ハ、半分ハ存命六ヶ敷、皆覚悟之上ニテ、死骸塩漬之用意、又ハ火葬之積ニテ壺等持參致シ出立之所、無事ニ相濟、又ハ明年ハ明年之事ニ候、荒増如斯御座候、

### 七三 魯国船長崎へ来ル島原藩主届書

寅四月四日御掛リ牧野様へ左之通差出之、

長崎表へ廿三日、異国船三艘渡来ニ付相糺候処、先達(三月)テ長崎沖致出帆候オロシヤ船ニテ、類船無之、疑數儀モ相聞不申趣、水野筑後守ヨリ家来之者へ申越候間、早速家老松平勘ケ由兼テ手当人数之内召連レ差遣候、

私儀モ引統為見廻、在所発足仕候、此段、(以下文)

三月廿四日

(志稱、島原藩主)  
松平主殿頭

### 七四 無名氏建言水戸・福山二侯異論云々

水戸公昭御喪中ニテ御登城無之、何レ大喪御出棺之上、海防之議論起リ可申、水府公ト福山侯阿部正弘ト異論故、御勝敗如何相成可申哉、甚不安心ニ付、左之通建言仕候、

此度質素儉約之御触有之候得共、兼テ御意被為在候御見込通ニモ到リ兼候処ヲ以テ、推測仕候得ハ、水府公之御建言未全ク御許容無之故ト、乍恐奉遙察候、過日申上候通り、万一和議之方へ御決着有之候ハ、皇国ハ遂ニ外意之臣僕トナルヘク、左ヨリ衰弱之世、戰以テセスシテ、其国ヲ奪ハレ候ニ不心付、兎角和議ニ泥ミ、戰ヲ好候モノヲ却テ不忠ニ讒言致シ、甚敷ニ至リテ候テハ、是ヲ罪シ敵方へ申訳仕候類モ不少、則漢土ニテハ、宋朝之秦檜・王倫、外夷之金ト和議ヲ結ヒ、戰之度々敵ヲ破リ頻リニ辺功ヲ立候忠節之岳飛・韓世忠ヲ殺シ、金ト和議仕、遂ニ宋朝滅亡ニ及ヒ申候、明朝モ又韃靼ニ奪ハレ候モ同様ニ御座候、仍テ數百年

之後迄モ、岳飛・韓世忠ヲ至忠節義之士ト称シ、秦檜・王倫ヲ至惡不忠ト憎ミ誹ラサルモノハ無之候、今日若姑息苟安之人情ヲ以テ、亡國ニ至リ候ハ、乍恐当今廟堂ニ被為在候御老中方之御惡名ハ、万世迄モ相伝リ候ハ必定ニ奉存候、

水府照公之御登 城被遊候ヲ、草野之端迄モ承リ伝ヘ、大ニ安心仕、此君世ニ御出被遊候ハ、我國ヲアメリカニ被奪候事ハ有之間敷ト、何之弁ヘモ無之田夫野郎迄モ申居候、又何レ之訶何事ヲ承リ評判仕候哉、此節水府照公ト福山侯ト御存意齟齬、イツレノ御存意相立候哉、何卒福山侯御退役ニ相成候ハ、國家ノ御大幸ト相折候由、天ニ口ナク人ヲ以テ云シムルト申諺之如クト奉存候、何卒此節之処、幕府ヘ之御忠節 日本之生靈ヲ御救ヒ、

御先祖ヘ之御孝道ト被為 思召、兼テ之 尊慮御十分ニ御申張有之候様奉折候、彼是之嫌疑ヲ御避ケ御差扣ヘ、玉石ト共ニ碎候ト申ニ至リ候テハ、残念至極奉存候、吳々モ福山侯ヘ御進<sup>道</sup>從無之候様仕度、此侯草野之端々迄モ誰云トナク相嘲リ候間、御永勤ハ如何可有之哉、一体此度アメリカカ船驕傲之振舞ヲ捨置候処ヲ伝聞

仕、田夫野郎迄憤リヲ発シ、切齒罷在候由、実ニ頼母敷國風ト奉存候、水府照公此度初ハ御登 城無之候テハ、夫迄之儀一旦御出又御引込ニテハ、日本国人人忽ニ挫ケ、貴賤共ニ力ヲ落シ、外国ヘモ響キ候テ、人情如何変シ可申哉難計奉存候、又外夷之氣ヲ緩メ、其内ニ武備相調ヘ申詛ニハ決テ到リ申間敷候間、兎角戦争之方ニ御決シ、日本国中人心一致為致度、左候ヘハ不令シテ調ヘ可申、今日並合之諸侯ニ被為入候テハ、假令慷慨之志厚ク候得共、詮ナキ処 廟堂之上ニ被為列候事ハ、此上モナキ事ト奉存候、何卒御十分ニ御申張御忠節御尽シ有之度、是ニテモ草野之批判ハ無智無分別ナレトモ、天之云ハシムル処故、左之賢君モ是ヲ警戒ト仕候事ニ御座候、此段イラサル杞憂ナカラ、不願恐奉申上候、頓首九拜、

再白、十二ヶ年以前、和蘭国王ヨリ御忠告申上候テモ、更ニ御用心無之、有志之士之建言モ御取用無之、宴晏自若トシテ今日肩ヲ焚キ候之急ニ至リテ、武器・玉葉モ間ニ合ズ、狼狽顛倒シテ、外夷之驕劫ニ逢ヒ、日本之恥辱、御当家之御汚名ヲ引出候事、全ク此候一人之不覺ヨリ之事ト不堪切齒候、

七五 長崎入津清人書牒

去夏拜別後、各船大順揚帆本船於五月廿二日首先抵乍  
王局雨均於廿八日同日進港、惟我局得宝船、船身落北、  
南風太大不能前進、直至六月十二日進港、各艘到齊後、  
本擬商弁發船夷因正二月間、廣西逆匪竄入下江江南連  
矢南京・鎮江・揚州三城、蘇地居民紛々逃避、鄉間各  
宗生意、尽行縮手報致回貨、積滯不消、於八月間、又  
有上海小刀会土匪作乱踞佳城地、各省大兵雲集江南一  
帶地防堵、擾乱居民、人心惶惑、生意一道斷絕往來、  
以至冬幫又不能發弁、今雖各所賊匪未勦滅、幸自入春  
以來折伏略有勝帳、賊勢稍減、各路竄逃省紛、帶傷不  
少惟浙省一無擲動、看此光景一時諒難掃除、而此幫又不  
能發弁來崎、是以兩局會議勉力各發、實屬分外喫力也、  
本船於七月初十日自乍浦開駕、於十六日清晨由兩廣放  
洋、於廿一日已剋見天堂山、昨晚大鯧北首今日不能進  
港、現在白沙嶼外奇旋、隨即報梓、諒可即日、抵崎源寶  
如大、約十五六日間行超此好鳳、想日上又可到港<sup>(崎力)</sup>照叙  
在瀬恕不煩遠、崑此希達、並清日安不一姪均梅江、

少棠二叔大人

星畬二兄大人

均竊

去年壬子春、明朱氏後裔名華字元暉、蜀四川人年僅二  
十四、發欲興復先朝之大志、乘道光爺之衰、不用清之  
正朔・制度、更明律・明服建元天德募兵於廣東諸州、  
漸得十萬矣、已而浙江妖婦李氏亦擁衆十萬、襲杭州殺  
尹府而庇元暉、元暉李氏定謀略、攻拔廣東府及福建西  
湖、招撫清之降將・降卒、於是兵勢日強大也、衆既三  
十餘萬、推元暉為新王也、諸港英夷亦屬焉、秋八月  
清主咸豐爺親征之不克、韃靼亦起兵於北方檄声言助、  
朱氏襲清之旧都拋之進略寧古塔、清人降者許多諸府服  
東京師戒嚴焉云、  
<sup>(嘉永元年)</sup>右嘉永癸丑四月、自朝鮮國牒告長崎鎮台之書、自崎陽  
達江戶官府者、

七六 京都七口警衛達書

青山下野守

異国船渡來之節、京都七口御固被<sup>(直隸、高麗藩主)</sup>  
仰付候、稻葉長門守・本多隱岐守・永井遠江守儀毛被  
仰付候間申合可被勤候、時宜ニ寄候テハ、相互ニ援兵  
ヲモ差出、御警衛向厚ク可被心懸候、委細之儀ハ所司

代へ可被承合候、尤京都火消之儀へ、只今迄之通可被  
心懸候、(得力)

十一月 (十八日)

(大日本古文書(雜木外國關係文書)にて校訂)

七七 昇平学校ニ在ル長州書生本藩製船ノ事ヲ

聞キ友人ニ送ル書

製艦式序

〔幕末六十年〕嘉永癸丑甲板船製造之命降、海内譁然、贊歎偉度、皆

曰、庶政自是一新、洋慮雖狡不足慮也、而世未諳其制、

不能遽奉行休命、独薩侯首請造軍艦十余隻、越明年十

數文大艦、巍然以成矣、世方駭其神速、至或疑其困旧

有甲板船、而英夷拋香港者、遐邇貫珍、載為皇國聰敏

之証、盛哉挙乎、可以周刃邇、可以極臭濁、又能率先

諸侯、而遙皇眷於海外、是數者固志士之所饑渴而仰望

也、抑事有大小、務有貴賤、軍艦雖急乎、非侯所宜規

為心有才能特絶之士輔成元者、古人之好善、推愛於屋

鳥、苟有一事足稱、不特口稱之、又云々(薩藩海軍史)

不朽乎永世、(今也、業大如此(薩藩海軍史))今已功大如此、有志於斯志者、固当鋪張

其羨以風勵一世、而以相距之遠、其姓名且不能挙、非

古人好善之義也、窃以為憾、安政丁巳薩艦来于袖浦、

偶藩人中原誼卿在予塾、固請觀之、(因力)田原君某甫導察其

容髮、然若有遂識者焉、既至縱觀、誼卿曰、(本藩得力)某甫所製

也、(制度或未悉詳、問而根究之、予驚異、指艦體清遠、備製所、君云々(薩藩海軍史))製作所田、君乃出是書及図一卷、且指且說、詳明

悉備、不啻提吾耳、雖以予拙劣、製艦之術思過半矣、

及問所造之數、君曰、官事多端僅成五隻、而其蒸氣船

則誼卿造之矣、予益驚、夫誼卿在予塾、与之朝夕殆一

年、而未嘗聞蒸氣船成于其手雖以予好善未誠、抑何恭

默謙讓之至于此也、況君誼卿所兄事、其弘量偉識、有

過無不及、而初又在四百里之遠、予之不能挙姓名、固

其所也、嗚呼深山大沢、(遠脱)實生龍蛇、以薩之表于西海、

其多士固不怪已、独異二君蹈晦才能、深沈不泄、(厚劣如)

以親薩藩風之淳、而僕又知而任之、(薩藩海軍史)

宜矣、其能首製皇無前之艦、以施盛眷於海外也、頃者

君因誼卿、徵序於予、予生与蠹魚伍、為世棄物、然其

志則未已也、今也得名於是書、以從古人好善之義、幸

莫大焉、於是乎綴所管思慕歎羨以序之、(薩藩海軍史)

則其艦巍然存矣、(以腕力)何待予言哉、何待予言哉、(薩藩海軍史(公卿島津家編纂所編)にて校訂)

七八 参考 江田平藏日記抄 國分物主

江田平藏

右之通被仰付候事、

右通り、安政元年寅十一月十日、於臺子之間<sup>御對面所新三ノ間</sup>

納駿河殿ヨリ、御軍役奉行小松相馬殿御取次ヲ以テ、

國分物主被仰付候、尤國分エハ御軍役方ヨリ可被御達

越旨承候得共、自分迄宿次時付ヲ以テ成行申越候処、

所役々早速夜通シニ差越候付、諸手当之儀相達置候、

櫻島物主当番頭町田圖書殿・御納戸奉行格御使番新納

四郎右衛門殿・清水物主御使番猪俣爲右衛門殿・曾於

郡物主道奉行肥後平九郎殿エ、平藏一列ニ被仰付、万

一モアメリカ船内海ニ乗入候儀モ候ハ、櫻島之儀ハ

第一之場所柄ニテ、國分・曾於郡・清水三ヶ郷人数ニ

テ、櫻島応援可被仰付ニ付、物主之儀ハ彼島へ致渡海、

海岸人数手配申談、見分致シ置候様トノ趣、御軍賦税

所七郎右衛門殿ヨリ承候付、圖書殿<sup>町</sup>・四郎右衛門殿

新<sup>納</sup>向人ニハ十三日ヨリ渡海、爲右衛門殿<sup>猪俣</sup>・平九郎殿<sup>肥後</sup>

平藏<sup>江田</sup>三人ニハ十四日朝渡海致、海岸致巡見、赤水ヨ

リ洗出シ御台場辺・古里辺迄櫻島人数受持、古里ヨリ

有村辺迄清水・曾於郡式ヶ郷受持、横山前後國分一組

人数ニテ受持之節申談置候処、異船モ無異議十八日出

帆致候付、一流<sup>統カ</sup>引取被仰渡候、

安政元年寅十一月九日七時過比、山川大山崎御台場沖

合十一二町所、アメリカカ船一艘碇ヲ卸候ト追々注進ニ

テ、御軍役掛御用人末川久馬殿一番駈付ニテ出馬、新

納駿河殿儀ハ、御家老ニテ指宿地頭故、自分手廻<sup>家来ノ</sup>

ニテ出馬、島津下總殿ニハ西目惣揚主被仰付置候付、

自分手廻ニテ出馬、御小姓与番頭御軍役惣頭取勤小松

相馬殿ニハ、西目御手当当番一番・四番組二組人数被

召列出馬、当番頭大砲頭取北郷哲五郎殿ニハ、西目御

手当大砲人数被召列出馬、其外御軍賦役初、兼テ被掛

置候人数等出張等有之候処、何モ異変之体全ク不相見

得、測量船ト相見得候得共、言語・文字不通、同十八

日無異儀致出帆候付、出張人数引取相成候事、